

長野県松本市

IDEGAWANISHI

出川西遺跡

— 第 10 次発掘調査報告書 —

2015.3

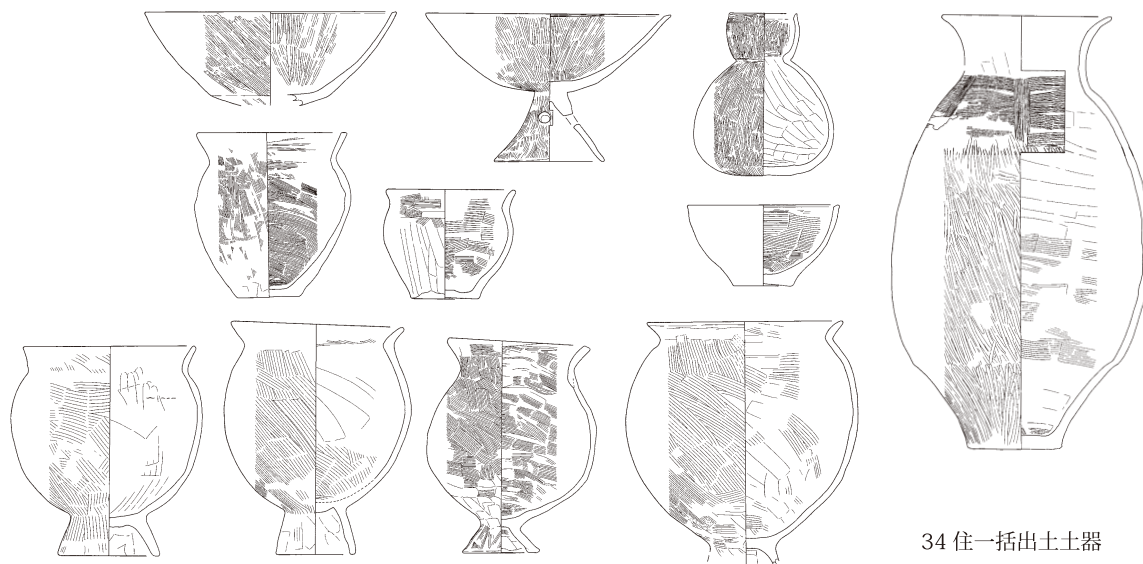
松本市教育委員会

長野県松本市

IDEGAWANISHI

出川西遺跡

— 第 10 次発掘調査報告書 —



34 住一括出土土器

2015.3

松本市教育委員会

例言・凡例

- 1 本書は、平成25年6月17日～7月31日に実施された、長野県松本市南松本2丁目15番10号に所在する出川西遺跡の第10次発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、株式会社東京インテリア家具松本店建設に伴う緊急発掘調査であり、株式会社東京インテリア家具代表取締役利根川弘衛から松本市長菅谷昭が委託を受け、松本市教育委員会(担当:文化財課)が発掘調査(平成25年度)、整理・報告書作成(平成26年度)を行った。
- 3 本書の執筆分担は次のとおり。
第I章:事務局、第II章第1節・第2節:三村竜一、第III章第2節:百瀬長秀、第3節:百瀬長秀・直井雅尚、第III章第4節4:原田健司、その他の章・節:直井雅尚
- 4 本書作成にあたっての作業分担は以下のとおりである。
遺物洗浄・注記 内田和子・佐々木正子・中澤温子・洞沢文江
遺物保存処理・接合復元 竹平悦子・洞沢文江
遺物実測・トレース・版組 土器:久保田瑞恵・竹内直美・八板千佳・安田津由紀
金属製品:洞沢文江 石器・石製品:原田健司・白鳥文彦
遺構図整理・トレース・版組 荒井留美子
写真撮影 遺構:百瀬長秀 遺物:宮嶋洋一 写真レイアウト:石井佑樹
編集:直井雅尚
- 5 遺構番号は、竪穴住居址については第1次調査からの通し番号、その他の遺構は本次調査で1号から付した。
- 6 本書で用いた略記は次のとおりである。
第○号住居址→○住 第○号掘立柱建物址→○建 第○号土坑→○土 第○号溝址→○溝 土器集中○→土集○
- 7 図中で用いた方位記号は真北を指しており、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅷ系に準拠した。
- 8 図類の縮尺は遺構1/80・1/40、土器1/4、土製品1/2・1/3・1/4、金属製品1/2、石器・石製品については器種に応じて縮尺を変え図版に記載した。写真図版は遺構、遺物ともに縮尺は統一されていない。
- 9 土器実測図の断面白抜きは弥生土器・土師器・黒色土器、黒塗りは須恵器・灰釉陶器を示す。灰釉陶器は遺物番号の脇に「K」を併記し須恵器と区別した。
- 10 発掘調査実施と報告書作成にあたり次の方々からご指導、ご助言をいただいた。記して感謝申し上げる。
赤塚次郎、石黒立人、上田典男、岡安光彦、川崎みどり、桐原 健、小林健二、小山岳夫、櫻井秀雄、笹沢 浩、島田哲男、原 明芳、平林 彰、廣田和穂、藤田英博、水澤幸一、森 義直、山下誠一、和田和哉
- 11 本調査で作成された測量図・写真等の諸記録は松本市教育委員会が保管し、出土遺物は松本市立考古博物館に収蔵されている。
松本市立考古博物館 〒399-0823 長野県松本市中山3738-1 TEL 0263-86-4710 FAX 0263-86-9189
松本市教育委員会 文化財課 埋蔵文化財担当 TEL 0263-85-7064 (住所とFAXは松本市立考古博物館と同じ)

出川西遺跡関連の発掘調査報告書

- 松本市教育委員会 1990『松本市文化財調査報告No.87 松本市 出川遺跡』
松本市教育委員会 1999『松本市文化財調査報告No.135 長野県松本市 出川西遺跡Ⅵ』
松本市教育委員会 2006『松本市文化財調査報告No.181 長野県松本市 出川西遺跡Ⅷ』

目次

例言	1
目次	2
第I章 調査の経緯	3
第II章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	4
第3節 過去の調査と出土遺物	7
1 出川西遺跡の発見と周知	7
2 昭和50年代までの記録	7
3 昭和60年代以降の調査と遺跡範囲の見直し	7
4 既出遺物の概要	8
第III章 調査成果	
第1節 調査の概要	13
第2節 標準土層	14
第3節 遺構	
1 竪穴住居址	16
2 掘立柱建物址	20
3 溝址	20
4 火葬施設	21
5 土坑	21
6 土器集中	22
第4節 遺物	
1 土器	32
2 土製品	35
3 金属製品	35
4 石器・石製品	36
第IV章 総括	57
抄録	

図目次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡	5
第2図 調査地の位置	6
第3図 出川西・南遺跡の過去の調査地点	10
第4図 出川西遺跡既出品	11
第5図 調査範囲	12
第6図 土層標準層序模式図	14
第7図 出川西遺跡第10次調査 調査地全体図	15
第8～16図 遺構実測図1～9	23～31
第17図 出土土器提示のための群範囲	32
第18図 土器の主要な器種・器形概略	33
第19～30図 土器実測図(1/12～12/12)	37～48
第31図 土製品実測図	49
第32図 金属製品実測図	49
第33・34図 石器・石製品実測図(1/2・2/2)	53・54
第35図 松本市・塩尻市域出土の外來系土器集成	59

表目次

第1表 出川西・南遺跡の遺跡名の変遷	9
第2表 出川西・南遺跡の過去の調査一覧	10
第3表 金属製品一覧表	49
第4表 土器・土製品一覧表(1/3～3/3)	50～52
第5表 石器・石製品一覧表(1/2・2/2)	55・56

写真図版目次

写真図版1 出川西遺跡一帯の航空写真	
写真図版2 調査地全景写真	
写真図版3 遺構 住居址1	
写真図版4 遺構 住居址2	
写真図版5 遺構 住居址3、建物址、火葬施設、溝址	
写真図版6 遺物等出土状況1	
写真図版7 遺物等出土状況2	
写真図版8 出土土器1	
写真図版9 出土土器2	
写真図版10 34住一括出土土器集合写真、出土石製品	

第 I 章 調査の経緯

第 1 節 調査経過

株式会社東京インテリア家具(以下「東京インテリア」という。)により松本市南松本二丁目15番10号で店舗建設が計画されたが、予定地一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地である出川西遺跡に該当していたため、平成25年5月17日付で、文化財保護法第93条に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出書が東京インテリアから提出された。松本市教育委員会(以下「市教委」という。)では工事の際に遺跡が破壊される恐れがあるため、同5月28日～6月5日に事業地内で試掘調査を実施し、古墳時代の遺物を伴う竪穴住居址などを確認した。この結果に基づき6月8日に両者は保護協議を行い、遺跡が破壊される範囲について発掘調査を実施し、記録保存を図ることとなった。発掘調査とこれに係る事務処理は市教委が実施することとし、東京インテリアと松本市との間に平成25年6月17日付で発掘調査業務の委託契約が締結された。

現地での発掘調査は平成25年6月17日～7月31日に実施し、終了後9月3日付で長野県教育委員会に発掘調査終了報告書を提出した。また同日付で埋蔵物発見届を松本警察署に提出し、10月1日付で県教委より埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属についての通知を受けた。

本発掘調査に関連する文書等の記録は以下のとおりである。

【平成25年度】

5月17日 店舗建設に伴う「土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出」を東京インテリアが市教委に提出

5月27日 土地所有者の承諾書提出

5月28～6月5日 市教委が試掘調査を実施

6月 8日 保護協議

6月17日 東京インテリアと松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結

6月17日～7月31日 発掘調査実施

9月 3日 「埋蔵物発見届」「埋蔵文化財保管証」を市教委が松本警察署、県教委に提出

9月 3日 「発掘調査終了報告書」を市教委が県教委に提出

10月1日 「文化財の認定及び県帰属について」県教委から市教委に通知

3月12日 東京インテリアと松本市が変更契約を締結

3月20日 松本市が東京インテリアに埋蔵文化財発掘調査完了報告書を提出

【平成26年度】

4月28日 東京インテリアと松本市が埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結(整理・報告書作成)

第 2 節 調査体制

【平成25年度 発掘調査】

調査団長：吉江 厚(松本市教育長)

調査担当者：百瀬長秀(文化財課嘱託)、小山奈津実(同)、直井雅尚(同係長)

発掘協力者：井口方宏、今井文雄、折井完次、大滝清次、加藤朝夫、加藤 旻、坂口ふみ代、清水陽子、関谷昌也、茅野信彦、中嶋 健、西原達雄、西村一敏、宮澤文雄、三村脩二、渡辺啓之助、

事務局：松本市教育委員会文化財課

伊佐治裕子(課長)、直井雅尚(係長)、櫻井 了(主査)、百瀬耕司(主任)、柳澤希歩(嘱託)

【平成26年度 整理作業・報告書刊行】

担当者：百瀬長秀、三村竜一(文化財課係長)、直井雅尚、原田健司(同事務員)

調査員：宮嶋洋一

整理協力者：荒井留美子、内田和子、柏原佳子、久保田瑞恵、佐々木正子、竹内直美、竹平悦子、中澤温子、洞沢文江、村山牧枝、八板千佳、安田津由紀

事務局：松本市教育委員会文化財課

内城秀典(課長)、直井雅尚(係長)、櫻井 了(主査)、百瀬耕司(主任)、石井佑樹(主事)、吉見寿美恵(嘱託)

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

本遺跡は市内有数の大規模遺跡で、東西400m、南北1,000m程の範囲がある。現在の町名では南松本1・2丁目、双葉、高宮中、出川町にまたがっており、東部をJR篠ノ井線が横断している。一帯はほぼ平坦地であるが、きわめて緩い傾斜がある。その方向は一様ではないが、巨視的には南西から北東に向かって傾斜している範囲が広い。標高は591～594mで、北東部一帯が最も低く、南東端部が最も高い。

一帯は昭和初期まで畑地と水田が広がっていたが、第二次世界大戦中に軍事工場が疎開し、大規模な開発が始められた。戦後は造成を伴う大規模工場、倉庫等が建設され、昭和38年の国道19号線開通を契機に商業地や宅地として急速に発展し市街化された。このため原地形はほとんど失われ、推測は困難な状況にある。

地形的には奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地の接する沖積扇状地性堆積の末端に位置しており、一部を除き水はけの良い広大な平坦地となっている。ほぼ全域が奈良井川の影響を強く受けており、基底部の礫層は奈良井川系統である。遺構が掘り込まれる基盤上層面は、奈良井川系統と田川・牛伏川系統が混在している。これらの河川の氾濫や乱流による影響を受けながら複雑に堆積しているため、その様相は地点ごとに大きく異なる。現在遺跡内を流れる自然流路はないが、これまでの発掘調査によって遺跡中央部を南北方向に横断する小河川があったことが推定されており、ここから用水を得ていたものと考えられている。一方、遺跡の北東端～南東端部は様相が異なっている。田川の影響が主となり、田川系統の細粒堆積物に推移する。現在のやまびこ道路周辺がその境界であり、一帯では湧水口、水路、畑地の窪み等に湧水がみられる。これらの水が集まって頭無川の源流となり、下流では井川城跡の脇を流れている。本遺跡北の湿地帯は弥生時代中期頃に水稲栽培が開始され、それ以降は生産域として利用されたものと推定される。

今回の調査地は遺跡の南東部にあたり、JR篠ノ井線南松本駅構内の西約150mに位置している。西の奈良井川現川床とは約2,400m、東の田川からは500mの距離で、標高は593m前後である。上記の低湿地から南に約300m離れた水はけの良い平坦地で、南東から北西に向かってきわめて緩く傾斜している。遺構が掘り込まれる基盤上層面は奈良井川系統を主としている。周辺の地下水位は2.2～6.9mを測る。

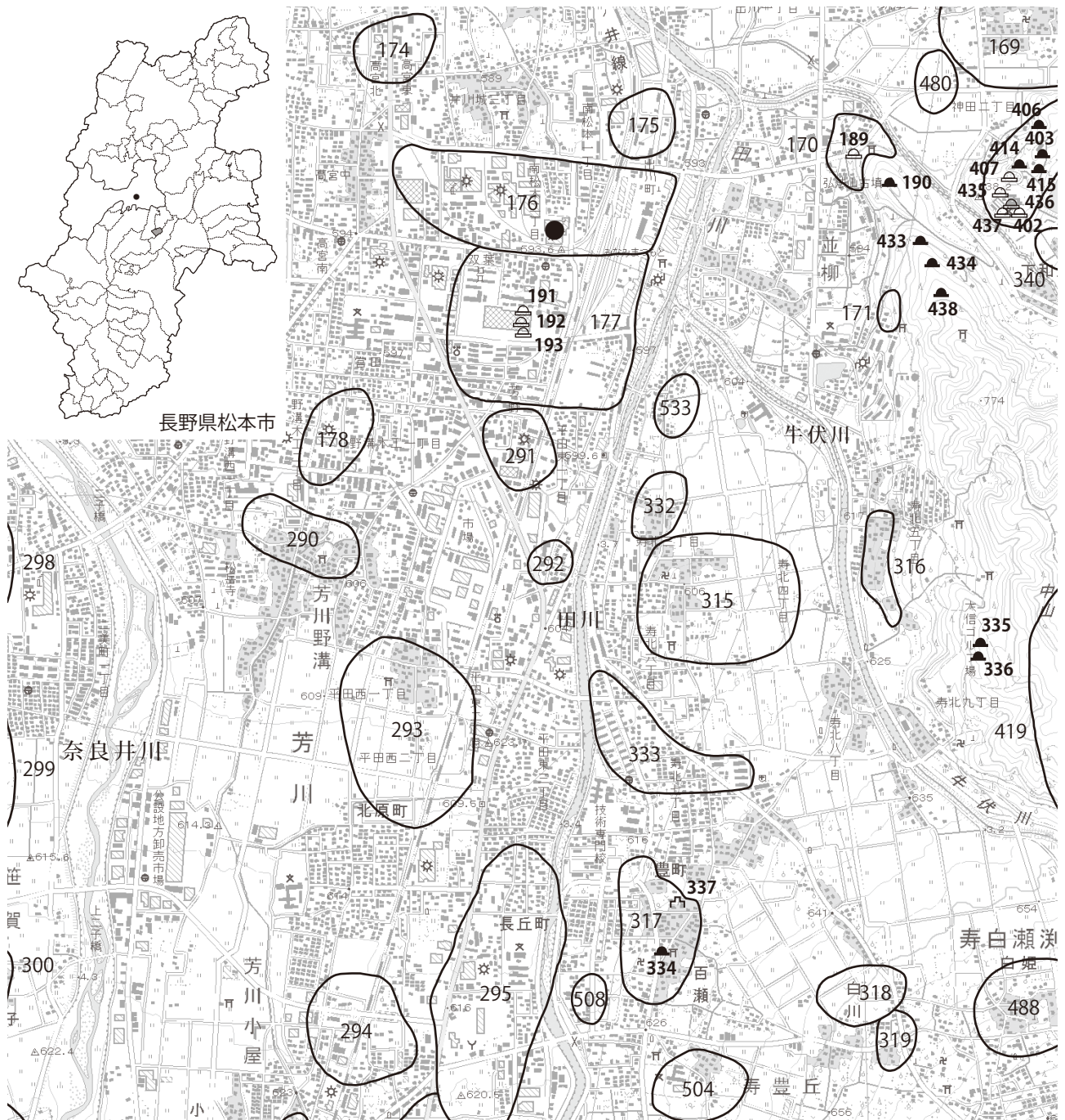
第2節 歴史的環境

周辺の遺跡分布は田川右岸、奈良井川左岸、田川と奈良井川に挟まれた地域の3遺跡群に大別される。

田川右岸の遺跡群は、近世以降に起きた牛伏川氾濫の影響を受けたものが多く、周知の遺跡はこの氾濫による破壊を逃れたものである。縄文時代の竪穴建物址は未確認だが、百瀬遺跡で土坑が確認されている。弥生時代には標式遺跡として著名な百瀬遺跡や竹淵遺跡・竹淵南原遺跡で大規模集落が営まれ、それ以降も断続的ながら古墳時代から中世にかけて小池遺跡等の大規模集落が形成されている。

奈良井川左岸の遺跡群では、縄文～弥生時代の遺構は確認されていない。7世紀後半から本格的に大規模集落が急速に営まれ、下神・南栗・北栗遺跡等がある。一帯は河岸段丘上に位置する利水の悪い地域で、水路の整備が不可欠であることから、計画的な大規模開発によって、大規模集落が成立したと思われる。

本遺跡は田川と奈良井川に挟まれた地域の遺跡群に含まれる。縄文時代の明確な遺構はなく、弥生時代中期に本遺跡・出川南遺跡・高宮遺跡等で各種の遺構が確認されている。この後一帯には古墳時代から平安時代にかけて小原遺跡・平田本郷遺跡・吉田川西遺跡等の大規模な集落が確認されている。古墳は出川南遺跡の範囲内に中期の平田里古墳群、東に東日本最古級の弘法山古墳があり、本遺跡との関連が注目されている。



●：今回の調査地点 No：松本市遺跡台帳記載の遺跡番号

遺跡

169:神田遺跡 170:平畑遺跡 171:山行法師遺跡 174:高宮遺跡 175:出川遺跡 176:出川西遺跡 177:出川南遺跡 178:五輪遺跡
 290:野溝遺跡 291:平田北遺跡 292:平田遺跡 293:平田本郷遺跡 294:小原遺跡 295:高畑遺跡 298:下二子遺跡 299:中二子遺跡
 300:上二子遺跡 315:竹淵遺跡 316:瀬黒遺跡 317:百瀬遺跡 318:白川遺跡 319:野田遺跡 332:竹淵南原遺跡 333:向原遺跡
 480:神田西遺跡 488:白姫遺跡 504:百瀬南遺跡 508:寿南久保遺跡 533:寿畑田遺跡

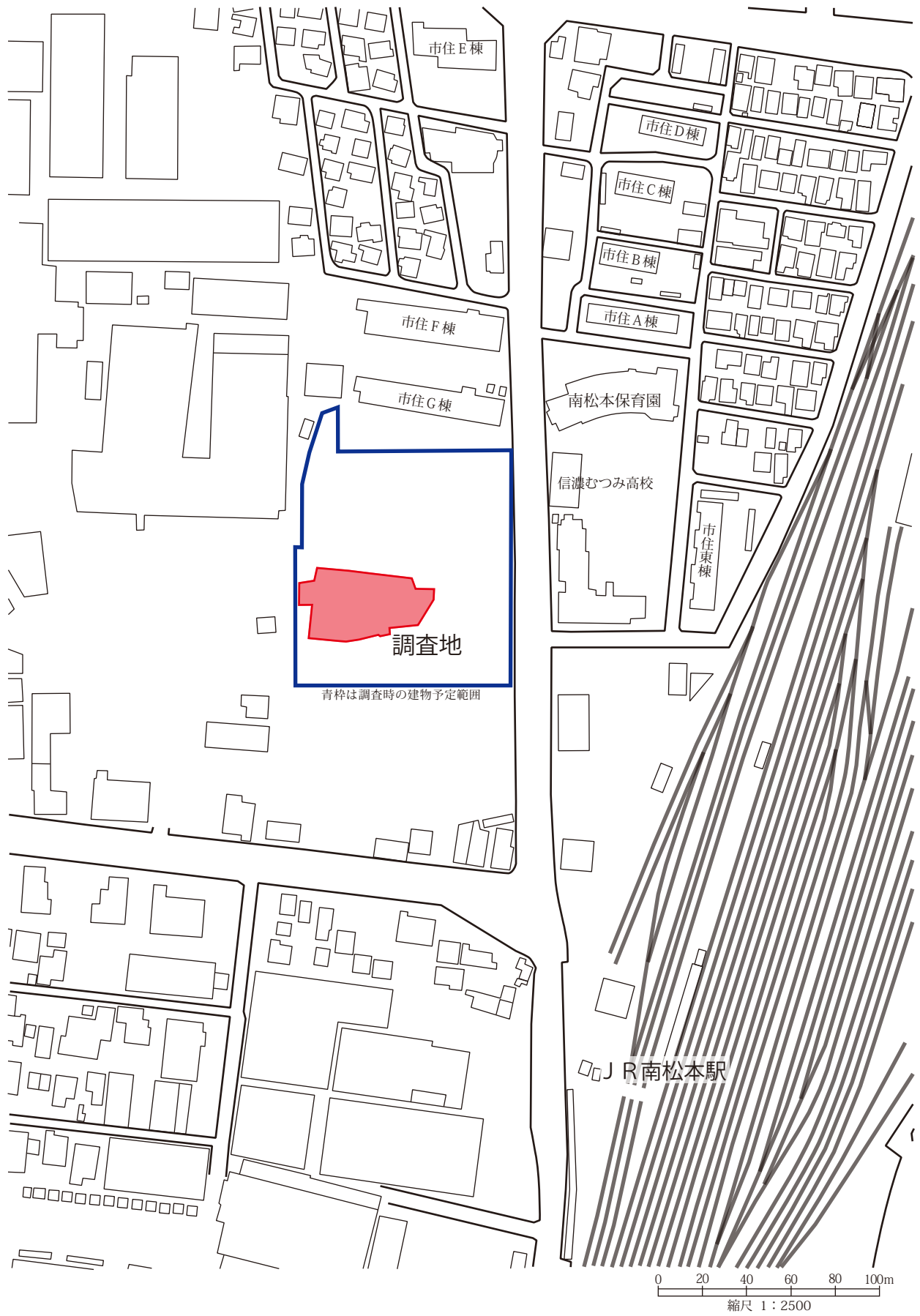
古墳

189:平畑古墳 190:弘法山古墳(中山48号) 191:平田里1号古墳 192:平田里2号古墳 193:平田里3号古墳 334:耳塚古墳
 335:長峰下1号古墳 336:長峰下2号古墳 402:中山31号古墳 403:中山32号古墳 406:中山35号古墳 407:中山36号古墳(仁能田山)
 414:中山58号古墳 415:中山59号古墳 419:中山古墳群 433:中山北尾根1号古墳 434:中山北尾根2号古墳 435:棺護山1号古墳
 436:棺護山2号古墳 437:棺護山3号古墳 438:中山北尾根3号古墳

城館址

337:百瀬の陣屋

第1図 調査地の位置と周辺遺跡 (S = 1/25,000)



第2図 調査地の位置

第3節 過去の調査と出土遺物

1 出川西遺跡の発見と周知

本遺跡の存在が文献等に記録された最初は昭和4年の新聞記事に遡る。同年3月27日の信濃毎日新聞に、同月24日に石川武雄氏によって発掘が行われ遺構・遺物が発見されたことが報じられている。発掘地点は「古観音」となっている(文献1)。おそらくこの時に出土したと思われる土器が松本市立博物館に収蔵されており(第4図既17)、その胴部外面には新聞報道と同様の内容が同氏によって墨書されている(文献2)。

次に昭和8年に刊行された松本市史では、先史時代の章において「鐵道線路の直ぐ西隣にて、多賀神社の正西方」の畑地に多数の遺物散布を認め「出川遺蹟地」として認定するとともに、先の石川氏と上條隆一氏の発掘成果を記し、第4図既10の壺の実測図を掲載している。また写真図版に5点の出土土器(うち古墳時代に属するものは第4図既6・10・15・19)を掲載し「出川字原口」と出土地点らしき説明を付す(文献3)。さらに原始時代の章では「鐵道線路のスグ西隣邊にも二三の古墳ありたる由を傳う」としている(文献4)。

これらの文献に現れる小字名「古観音」と「原口」の位置・範囲は第3図に朱線で示すとおりで、松本市史が刊行された昭和8年までに少なくとも本遺跡内の2地点から遺物出土があったことがわかる。

昭和13年に刊行された彌生式土器聚成図録には第4図既10が「松本市出川発見壺形土器」として紹介され、全国的に出川の名が周知された(文献5)。

2 昭和50年代までの記録

本遺跡の一带には昭和13年にステンレス工場が建設されたのを初めとして、第二次世界大戦中に軍需等の工場の疎開が行われ、それまで畑地桑園だったところが大規模に開発され、広大な工業地帯へと変貌した。この間の遺構の発見・遺物出土を物語る記録はない。

昭和46年に刊行された土師式土器集成では、桐原健氏によって上記10の壺が紹介されている(文献6)。

昭和49年に刊行された『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌』では、藤沢宗平氏によって、あらためて本遺跡一带の遺物出土状況が詳述され、松本市史以降に出土や発見がなされたものについて記述が追加されている(文献7・8)。この中では精美堂、元ステンレス工場敷地、小島踏切西、県営住宅などの遺跡名(出土地点名)が挙げられている。精美堂は土地台帳に記載はないが字平田里の中の小地名、前記のステンレス工場は字原口と字小島上にまたがる広大な敷地に建設、県営住宅は戦後に字古観音に開発が進んだものである。県営住宅遺跡の「小松度見取図」のカッコ書きについては、原図の詳細を探り得ていない。

この間の出土遺物が市立博物館に収蔵されており、出土の経緯は不明だが「共同乳業敷地」「南松本乳業敷地」等の注記がある(第4図)。若干の表記の違いはあるが、いずれも協同乳業松本工場の敷地から出土したものと推定される。同工場は旧ステンレス工場敷地のほぼ南東部分(字原口の南東部1/4を占める)に昭和28年末に建設され、今回の調査地には平成23年まで工場社屋が残されていた。したがってこれらの土器は今回の調査地に直結する資料と思われる。

3 昭和60年代以降の調査と遺跡範囲の見直し

本遺跡一带で市教委による本格的な記録保存調査が始まるのは昭和60年からである。これ以降の本遺跡および南に接する出川南遺跡の発掘成果は第2表のとおりである。昭和60年の時点では本遺跡と出川南遺跡の遺跡範囲の把握は小規模なもので、遺跡名も旧来の「出川遺跡」であった。その後、一帯で数次にわたる発掘調査を重ね、両遺跡共に範囲が広範に拡がるのが判明してきたため、平成6年度に市教委が全市域一斉に行った遺跡地図の見直しでほぼ現在の遺跡範囲まで拡大された。また本遺跡の名称についても出川集落よりは大きく西方に拡がっている点から「出川西遺跡」と変更して出川南遺跡に対応させ、旧来の出川遺跡の名称は鐵道線路東側の中世遺跡に充てた。その後、試掘や立会い調査等の結果を加味し、随時、遺跡範囲の微細な見直しを行って現在に至っている。

4 既出遺物の概要

今回の調査地一帯から出土したと推定される既出土器の実測図を第4図に掲載した。11以外は市立博物館収蔵品である。これらには弥生時代中期に属する土器も伴っていたが、今回は古墳時代に属するものに限定した。器種・器形は1～6が高杯、7・8が杯、9～11が壺、15・16が台付甕の脚、17～19が甕である。時期は2・3・5・9が古墳時代中期、4・7・8が古墳時代後期、他は古墳時代前期に属すると考える。前述した遺跡の履歴に照らし合わせると、17が昭和4年の石川武雄氏による字古観音出土品、6・10・15・19は上條隆一氏による字原口出土品、2～5・7～9・12～14・16が戦後に協同乳業松本工場敷地から出土したもので、1・18は遺物に注記はないが市立博物館の整理記録から出川出土品と特定できた。このうち10の壺は弥生式土器集成図録や土師式土器集成にも取り上げられ全国的に紹介されている。

南松本・出川地区の遺跡・遺物に触れている文献

文献1：信濃毎日新聞 昭和四年三月廿七日（第5面記事）

松本平の湖沼説 新発見で覆るか 石川松本市営病院長が先史時代の土器を掘出す

人類學並に考古學に造詣深き松本市営病院長石川武雄博士は先般松本市出川字古観音地籍に於て多數の彌生式土器と竪穴の痕跡並に朝鮮式土器を發見した土器類は地下三尺の有機質黒土層中に埋もれて居た爲何れも完全なものではなく彌生式の大形瓶の口高杯、小型の壺石棒の断片等多數持ち歸り目下研究を重ねてゐるがさきに松本高等女學校敷地東南方からも同様土器類を發見されたことと照らし合はせて松本平が往古一大湖沼であつたといふ傳説は之によつて全然くつがへされることになるので歴史家の間にセンセーションをまき起した右につき石川博士は語る「松本平が昔湖水であつたといふ泉小太郎の傳説は景行天皇の御宇に起つて居るが彌生式土器は石器時代即ち先史時代の遺物で朝鮮式のもの原始時代の遺物であるから既に泉小太郎出現以前古代民族の一部がこの邊に住つてゐたことを證據立てることになり松本平湖沼説はどうしても信ずる譯に行かぬ」（寫眞は發掘された土器の一部）

文献2：土器の墨書（第4図 既17の胴部外面）石川武雄 昭和四年

彌生式土器（日本石器時代土器）

昭和四年三月廿四日

長野縣松本市出川郊外

鐵道線路西方畑地

（手塚清一氏所有）

地下三尺ノ所ヨリ出土

發見者 石川武雄 記

昭和四年三月廿七日

時事新報 及 信濃毎日新聞 所載

文献3：松本市史上巻 第一編古代 第二章先史時代 第四節出川方面（両角守一、昭和八年、松本市役所、21頁L9～16）

出川遺蹟地は鐵道線路の直ぐ西隣にて、多賀神社の正西方に當る。口碑にては東邊が往昔出川部落の有りし所、又水引明神の跡とも傳へられ、今日にては其邊一面畑地にて、祝部及埴部土器所謂朝鮮土器片も散亂し、古墳ありし由をも傳へらる。此地は往古の湖沼汀線にはあらざれど、附近に所々清水の湧出せるあり、民族の棲息に便せしならん。昭和四年石川博士は其一部を、又上條隆一は其處なる自家畑を發掘し、多くの遺物を發見せり。此等は地下三尺乃至三尺五寸の深さにて、遺物包含層に達し、彌生式土器等以下録する者の外、高杯脚部破片等を多量に出せり。一體此方面は出土遺物尠なく、今迄閉却されしも、最近の發掘に依り俄に注意を惹くに至れり。

甕（寫眞版第三2）彌生式・褐色・黒斑あり、祝部土器に見る羽状の刷線を印し、底部を缺損せるも、高三寸八分・口径三寸五分稍小形にて焼成堅緻なり、是と類似せる者に高五寸八分・口径五寸八分の者あり。

漏斗状壺（寫眞版第三1及第八圖）高七寸餘、口部は漏斗状をなし、口邊は所謂複合口邊を呈し、口径五寸九分・頸部著しく縊れ、腹部の大なるに比して底部著しく小さく、径二寸一分、従つてい少々安定を缺く。紋様は肩部に四條の帯條紋・波狀紋及び鋸齒點線紋が相接して施され居れり。而して有紋部は黄褐色の焼肌を露し、塗料を施さず、他は内外両面に互つて朱様の塗料を施し、其の全體の形容は無花果状を呈し、其紋様形状及び朱様の色彩共に能く整ひ、當地方彌生式土器として、稀に見る代表的なものなり。而も彼の熱田貝塚出土の土器（史前學雜誌二ノ一所載、現在博物館所蔵）と頗る類似せるは、頗る興味を覺ゆ。

此他高杯脚部破片にて圓き透しを三ヶ所に有せるもの（寫眞版第三3）三個、何れも上り底の脚部にて、内底黒褐色を呈し、内外に刷條を付けし者ありしが之等は、熱田の高森貝塚出土土器と全く差異を認めざる程能く類似せるは、後文述べんとする如く兩地の交通を物語る貴重なる資料なり。

猶圖示せざるも、壺形小土器にて高二寸・底徑一寸一分・淡褐色を呈し、内外両面朱塗を施し、剥落の痕あるもの、及び中間性土器にて壺形（寫眞版第三4）高九寸三分・口邊を缺損せるも徑二寸七分・頸部に拙劣の羽狀線紋を付け、其下に帯條紋と斜集線紋を施し、黒褐色を呈したる物が出土せり。こは四つ家發見のものに能く類似し、又城山腰出土の第二圖拓影に示せるものと共に、中間性に屬する者なり。

尚石器として、長四寸二分淡綠色・珪岩質の短冊形石斧一個同所より出土せり。

文献4：松本市史上巻 第一編古代 第三章原史時代 第一節古墳 二市地籍内の古墳（堀内千萬藏ほか、昭和八年、松本市役所、34頁L1～2）

出川の西方なる鐵道線路のスグ西隣邊にも二三の古墳ありたる由を傳う（其邊が昔水引明神のありたる遺址なり又近来多くの彌生式土器を發掘す）

文献 5：彌生式土器集成図録正編解説 第八中部高地地方 中部高地第三様式（小林行雄、昭和十四年、東京考古学会、88 頁 L6～14）

第三の様式については十分な資料を得てゐないが、八幡一郎氏が「北佐久郡の考古學的調査」において彌生式土器の第三類として挙げられた壺形土器を中心として、一つの様式を設立することが可能であらう。球形の器體に廣口の口縁部の上方に曲折して擴がったものを附した壺で、無文または肩部に櫛目文等を有するものが挙げられてゐる。相似た土器は松本市出川にも出土例があつて、これには文様帯以外の器面を塗丹してゐる（第二十五圖）。伴出土器には臺付甕形土器及び三個の圓孔を穿った高坏脚部などがある。甚だ不十分であるが、第二様式の他に今一つの櫛描文様を用ひた土器様式の存在が考へられることを注意して置きたい。

文献 6：土師式土器集成本編 1 解説中部地方 長野県 104 出川遺跡出土の土器（桐原健、昭和 46 年、東京堂出版、81 頁）

松本市街南方の奈良井川、田川の形成した氾濫原に臨んでいる遺跡で、この土器の発見は古く、「弥生式土器集成図録」においては中部高地第 3 様式の標式土器として取り扱われている。出土の状況など不明であるが、有脚の甕形土器が伴出していることだけは判明している。

壺形土器（1）器面全面と口頸内側に、文様帯を除いて赤色塗彩が施されている。文様帯は上より櫛描直線文帯、同波状文帯、同直線文帯と繞り、最下端を列点文帯でまとまっている。形態は扁球な胴部に二段に屈折し、内面もゆるく二段に亘って広い面をとっている口縁部が接している。

文献 7：東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 第一篇 第三章 第二節 一平地の弥生遺跡 1 田川沿辺の遺跡（藤沢宗平、昭和 49 年、300 頁 L12～16）

田川が松本地区に入ると、田川と牛伏川の合流点より手前、出川古観音では、昭和四年の発掘によると（病院長石川博士の調査によるもの）、地下一メートル前後に弥生土器・土師器・須恵器の完形品・破片などを発見し、なかでも東海地方から移入されたと思われる完形土器をえた。その他、戦中・戦後、この地域の開発にともなつて、前述の出川精美堂・井川城（元ステンレス工場敷地）・小島踏切西などの諸遺跡が散在し、征矢野地籍でも後期弥生土器破片を採集したが、この辺の調査はほとんどできていない状態にある。元ステンレス工場敷地や征矢野などは、田川沿いというよりは田川の古い痕跡とみられる穴田川沿いにあるという方がよい。野溝本郷部落の東、東原・南原などの土師式遺跡の存在は、正しく元田川ともいふべき寺安度堰の存在を考えなくてはならない。

文献 8：東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 第二篇 第二章 第四節 一平地遺跡 2 奈良井川右岸（広丘西半分、芳川の両地区）（藤沢宗平、昭和 49 年、495 頁 L13～17）

平田部落から井川城部落に達する中間、寺安度堰の西方に県営住宅遺跡や元ステンレス工場敷地が存在し、前者からは 10 戸ないしそれ以上の住居址の存在が知られる（小松度見取図）。後者からは、弥生文化で既述したように、この付近に後期弥生遺跡が点在し、これが田川沿いの弥生文化の諸遺跡の末端をなし、やがて古墳文化およびそれ以降の歴史時代に継続したものと推測される。これらの遺跡の包括的な調査は、今日ではすでに望むべくもなく、むしろその大半は工場建設などによって破壊され尽くしている。

文献 9：松本市史 第四巻 旧市町村編 I 第一章 第二節 一原始 二古代（桐原健、平成七年、579～581 頁）

（前略）昭和三十年作成の『遺跡地名表』には井川城ステンレス工場敷地より弥生土器破片、小島の踏切西より石庖丁出土と記されている。ともに現在の出川西遺跡のことである。（後略）

（前略）研究史上よく知られている原口遺跡は現在出川南遺跡のなかに含まれている。昭和四年に発見された遺跡で、出土遺物は、旧『松本市史』に報告され、そのなかの赤色塗彩されている壺は昭和十四年の『弥生式土器集成図録』で中部高地第三様式の標式土器として、昭和四十六年の『土師式土器集成』では前期土師器として取り扱われている。地下九〇ないし一〇六センチメートルの深さで、遺物包含層に達し、甕・壺・高坏脚部破片等が多量に出土したとのことで、甕は脚付、高坏の脚には円窓がうがたれている。壺は扁球な胴部に二段に屈折している口縁が付され、上胴部に櫛描文様帯がめぐり、文様帯以外は赤色塗彩されるという、後でふれる弘法山古墳出土土器と同一の型式に属している。（中略）『信濃考古総覧』の地名表には、南松本駅前の精美堂遺跡より箱清水式以降の型式土器、古墳前期の高坏多数が出土しているとある。原口遺跡ともども出川南遺跡として扱うべきである。

遺跡名の一覧等が掲載されている文献

文献 10：信濃史料刊行会 1956『信濃考古学総攬 上巻』

文献 11：文化財保護委員会 1967『全国遺跡地図（長野県）』

文献 12：長野県史刊行会 1981『長野県史考古資料編 1-1 遺跡地名表』

文献 13：文化庁文化財保護部 1983『全国遺跡地図 長野県』

その他の本節参考文献

文献 14：東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1976『東筑摩郡・松本市・塩尻市誌 地名』

文献 15：小松芳郎 1987『市制八十年のあゆみ』松本市役所

文献 16：松本市 1998『松本市史 第 5 巻 地名・年表・索引』

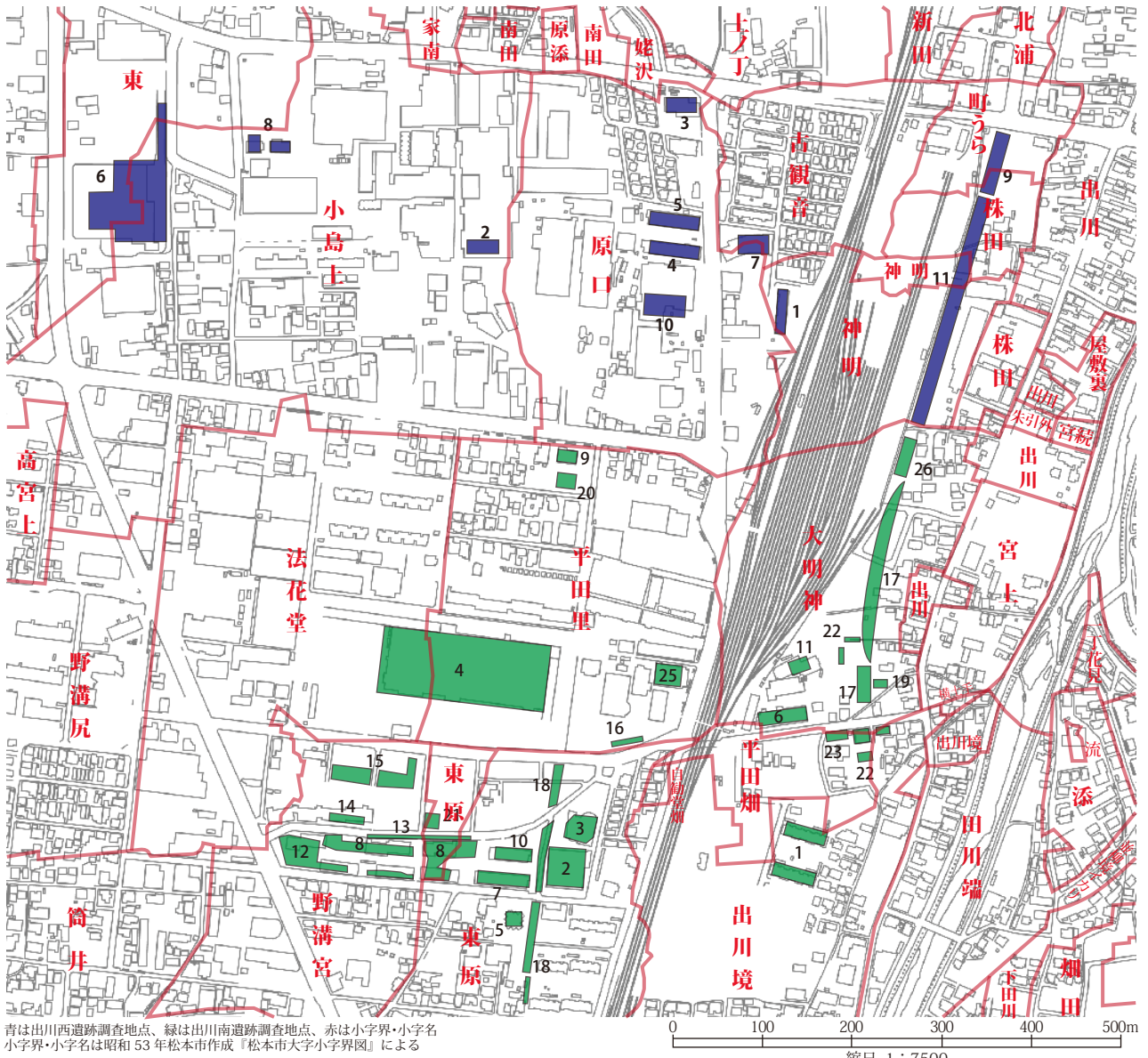
文献 17：出川史跡研究会 1999『泉わく里 出川史』

文献 18：長野県地名研究所 2002『字名表 大字順』松本市教育委員会

文献 19：窪田雅之 2013『近代松本地図集成』書肆 秋櫻舎

文献名等	信濃考古総攬 (1956)	全国遺跡地図（長野県） (1967)	長野県史考古資料編 (1981)	全国遺跡地図 長野県 (1983)	備 考
遺跡番号 遺跡・地点名	2617 精美堂（南松本駅前） 2618 井川城 2619 踏切西 2620 井川城 2621 高宮 2622 南松本	4789 南松本駅前 4790 ステンレス工場敷地 4791 踏切西 4792 井川越 4793 高宮 4794 南松本 7487 散布地 7488 散布地	4789 精美堂 4790 ステンレス工場敷地 4791 踏切西 4792 井川城 4793 高宮 7487 出川	189 高宮 190 小島 191 南松本 192 出川	現状の遺跡に対比すると精美堂は出川南、ステンレス工場敷地は出川西にあたる。踏切西は小島地籍（井川城）とされているが、弥生時代の石器が出土していることから南松本駅北の踏切（現在のやまびこ地下道）を指していると思われる、やはり出川西に相当すると推定する。 1983 版全国遺跡地図の段階でそれまでの遺跡情報が大きく改変されている。

第 1 表 出川西・南遺跡の遺跡名の変遷



第3図 出川西・南遺跡の過去の調査地点

出川西

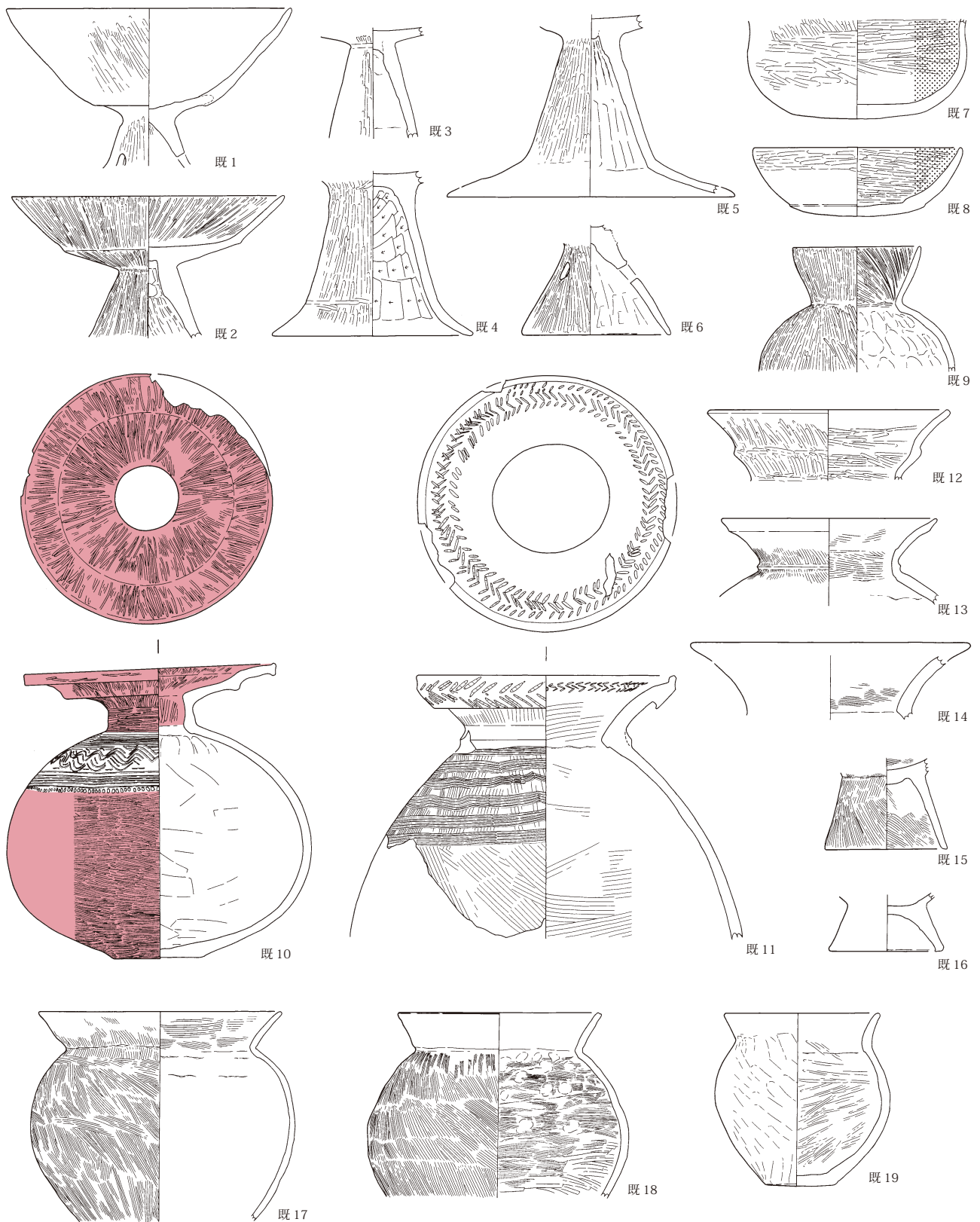
次	調査年度	面積	調査成果	備考	次	調査年度	面積	調査成果	備考
1	S60	1,500 m ²	住5(弥中~平前)	未報告	7	H13	450 m ²	住9(平)、溝	未報告
2	H5	60 m ²	住1(弥中)	遺物のみNo.135	8	H16	458 m ²	住1(弥後)、土器集中7	No.181
3	H7	465 m ²	溝(近世)	市住E棟、未報告	9	H25	444 m ²	住1・平地住1(弥中)、土坑17、溝10	未報告
4	H7	1,200 m ²	住1(古)、建1、溝	市住G棟、未報告	10	H25	1,450 m ²	住18(古前・後)、建1、土坑7、溝3、火葬1	本書
5	H8	1,008 m ²	住1(平後)、溝	市住F棟、未報告	11	H26	1,116 m ²	住23(弥中)、溝2、方形区画(中)	未報告
6	H8	8,100 m ²	配石7(古中)、土器集中19、火葬1、溝状遺構15	No.135					

出川南

次	調査年度	面積	調査成果	備考	次	調査年度	面積	調査成果	備考
1	S61	1,325 m ²	住5(弥後1、古前1、平2)、建1	No.53	14	H19	383 m ²	住2(古後)、建2、土坑9、P11	No.198
2	S63	1,715 m ²	住1(古後1)、土坑26、P61、溝1	No.75	15	H21	1,839 m ²	住15(古後2、奈4、平前9)、土坑29、石積遺構1	No.207
3	H1	900 m ²	住6(古後~平前)	未報告	16	H23	89 m ²	溝2、古代以降の氾濫	未報告
4	H3	14,688 m ²	住116(古後113、平3)、建21、土坑7、溝7	No.115	17	H22・23	4,624 m ²	住106(弥中32、古54、奈~平16、中4)、建7、墓38	未報告
5	H10	281 m ²	住11(古後1、奈1、平前5)	No.139	18	H24	2,362 m ²	住70(古後~平前)、建12、土坑222、P151	未報告
6	H10	1,486 m ²	住4(弥後3、古後1)、建3、土坑3、P55、溝6	No.147	19	H24	158 m ²	住1(弥)、土坑8、火葬1	未報告
7	H10	867 m ²	住50(古後~奈11、平前39)、建1、土坑175、P13	未報告	20	H24	502 m ²	住9(古中3、古後6)、建1、土坑	未報告
8	H11	3,293 m ²	住48(古後7、奈~平23)、建1、土坑4、遺物集中2	No.157	21	H25	341 m ²	住12(古後~奈)、土坑1、P8	No.212
9	H11	240 m ²	住2(古後)、土坑4、遺物集中2(古前)	No.148	22	H25	616 m ²	住20(弥~平)、建1、土坑	未報告
10	H11	560 m ²	住4(平前)	未報告	23	H25	428 m ²	住7(古前~平)、建1、土坑	未報告
11	H13	188 m ²	住3(弥後1、平後2)、土坑7、P234、溝1	No.161	24	H26	1,460 m ²	住1(古中)、建1、土坑、溝	県理工が実施
12	H13	2,197 m ²	住13(古後1、奈10、平2)、土坑34、P70	No.158	25	H26	647 m ²	住9(古前・後)、溝5、墓1(古前)	未報告
13	H14	25 m ²	住2(不明)	未報告	26	H26	395 m ²	住23(弥中)、墓、溝	未報告

第2表 出川西・南遺跡の過去の調査一覧

備考欄「No.」は松本市文化財調査報告書の連番

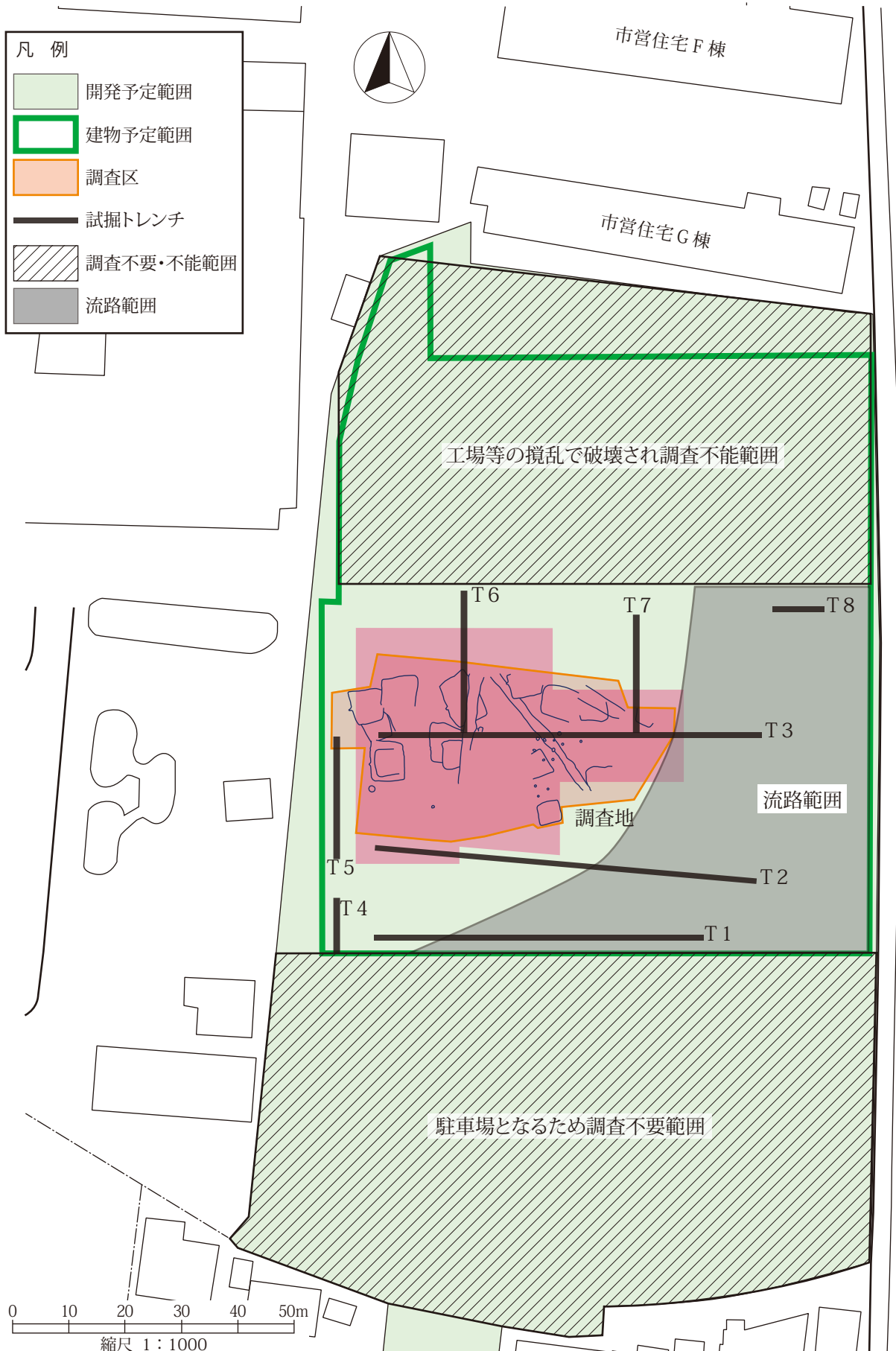


各土器の注記は次のとおり。

上条隆一寄贈：6・10・15・19 文献2の墨書：17 南松本乳業敷地：4・5・7・8・13 南松本乳業：12 共同乳業敷地：3・14・16
 南松本駅前共同乳業敷地：2・9 注記なし（受け入れ記録等で出川西遺跡出土と確認）：1・18

上条隆一氏寄贈品は文献3において写真付きで紹介されたもの。写真図版では「出川字原口」とされている。さらに10は文献5・6にも収録された。17は胴部外面の墨書（文献2）の内容から、文献1で紹介されたもののひとつと推定。11は今回調査地の西隣敷地で平成25年5月の立会い調査で出土。11は市立考古博物館蔵、それ以外は市立博物館蔵。

第4図 出川西遺跡既出品



第5図 調査範囲

第三章 調査成果

第1節 調査の概要

1 調査地の設定

今回の開発予定地は当初の計画では10,655㎡に及ぶものであったが、本調査に先立ち各所に試掘トレンチを設定して、工場等の攪乱で遺跡が破壊されている範囲や洪水層等で破壊されている範囲を把握し、最終的な調査予定地を設定した。

2 調査の方法・手順

調査予定範囲全面の表土をパワーシャベルを用いて除去し、さらに遺構検出が可能な深度まで機械力で削り込んだ。遺物包含層に達した以降は遺構検出作業を人力で進め、外郭ラインが特定できた遺構から掘り下げを行った。この段階までに遺構が包含される土層深度を超える攪乱や破壊が多数見つかったため、攪乱の範囲を特定し、発掘作業の対象から外していった。したがって実質の調査面積は当初の予定(1,760㎡)より減少している。出土遺物については、検出作業・遺構掘り下げ作業を通して遺存状態が良いものと特異な出土状況を示したものに限り出土地点を記録し、他はエリア一括で取り上げた。測量は簡易遣り方測量で調査地全体の1/20の平面図と各遺構図を作成するとともに、遺構等の土層図も1/20で作成した。写真は発掘作業の各段階と遺構等の遺物出土状態及び完掘状況をフィルムカメラとデジタルカメラで撮影した。調査の最終段階で調査地東側の2カ所のビル最上階から調査地全景の俯瞰写真を撮影した。

調査地測量原点の座標はX = 23,586.150、Y = -47,858.668、標高は592.100mである。

3 調査成果の概要

調査面積：1,469㎡

発見遺構

竪穴住居址：18棟(19～37住、ただし30住は欠番。古墳時代前期6棟、同中期2棟、同後期7棟、不明3棟)

掘立柱建物址：1棟(時期不明、古墳時代中期以降と推定)

土坑：7基(時期不明、古墳時代前期以降と推定)

溝址・流路：3条(古墳時代前期1、同前期～中期1、近世1)

火葬施設：1基(中世)

土器集中：7カ所(古墳時代前期、同後期)

出土遺物

土器・陶磁器：弥生土器、土師器(内黒土師器・黒色土器を含む)、須恵器、灰釉陶器

土製品：円筒埴輪片、ミニチュア土器、土錘、丸玉

石器・石製品：編み物用石錘、管玉、白玉、弥生時代の石器(石鏃、磨製石斧、石核等)

金属製品：刀子、鉄鏃、銭貨

4 考慮すべき事項

(1) 遺物包含層の発達

標準土層Ⅲ層の上部には遺物包含層が発達しており、古墳時代の遺構の多くはこの遺物包含層を削り込んでいく中で検出できた。したがって明確な遺構検出面の設定は不可能で、しかも個々の遺構ごとに検出できる深度はまちまちであった。このため検出中に出土した遺物で、最終的に遺構の平面的な範囲内に収まるものであっても、当該遺構の埋土に伴うものであったという確証はない。

(2) 上層・下層遺構の存在

唯一、把握できた上層遺構は中世に属する火葬施設であり、古墳時代の竪穴住居址等の検出深度より20cm

ほど浅いところで確認できた。また底面も古墳時代の検出深度に達していなかった。この例によれば、他にも把握できなかった上層遺構があった可能性は捨て切れない。特に遺構覆土や検出面、包含層から残存状態の良い平安時代後期の土師器杯が数点出土していることは、古墳時代の包含層中に切り込む平安時代後期の竪穴住居址の存在などを想定すべきかもしれない。

下層遺構については、24住の床面下20cmに炭化物の広がり確認されたが、調査期間の関係で追及できなかった。Ⅳ層中に掘り込まれる下層遺構が存在した可能性は高い。遺構出土の土器群にわずかに弥生時代中期中葉から後半にかけての土器が伴っており、想定される下層遺構の時期はそこに求められると考える。

第2節 標準土層

事前の試掘結果等から、調査予定地全域で攪乱が著しいうえに遺構密度が濃いことが予測されたが、調査期間の関係で現地表面を残した土層観察用ベルトの設定は困難と判断し、代表的な地点で土層柱状図を作成、観察をすることとした。実際には試掘調査で設定したT3の下層調査地点で観察・作図を行い、下記のように標準層序を設定した(模式図:第6図)。なお、調査最終段階でT3の北側ではⅢ層とⅣ層の間に黒色の粘土層が広範囲に分布することが、竪穴住居址の床下調査で判明した。しかし標準層序の改定は記録の混乱を招く恐れがあるので、設定済みの層名称は変更せず、新たにX層と命名して標準層序に追加した。

また、竪穴住居址覆土の大半は、Ⅲ層由来のシルトを含む粘土で、マンガンの沈着が顕著。遺物細片・炭片・焼土粒を若干含み、有機質含有による汚れが明瞭で、分層不能であった。次節ではこれを「Ⅲ層由来の標準埋土」と一括して表記した。

標準層序

I層:表土層。工場建設地造成で入れ替えられた人為層で、礫・コンクリート片などを含む。

II層:シルト含み粘土層。淘汰が悪く、小礫を含み、マンガンが少々沈着する。色調はHue5Y、7/2~7/4。Ⅲ層との相違は、シルト・小礫含有の程度と、色調、マンガン沈着度合で、堆積学的には識別が難しい。

III層:シルト含み粘土層。II層よりシルトが少なく、小礫も少ない。マンガンの沈着が顕著で、粒状化する。古墳時代の遺物の包含層である。色調はHue2.5Y~5Y、6/4。

X層:粘土層。有機物を多量に含み、黒色で、土壌A層。Vb層に類似。

IV層:粘土含みシルト層。Ⅲ層・V層より明らかに粒度が大きい。小礫は含まないが、細粒砂がブロック状に入る。マンガンの沈着は顕著だが、Ⅲ層ほどではない。Hue2.5Y~5Y、6/4。IVa~IVcに細分する。

IVa層:粘土含みシルト。

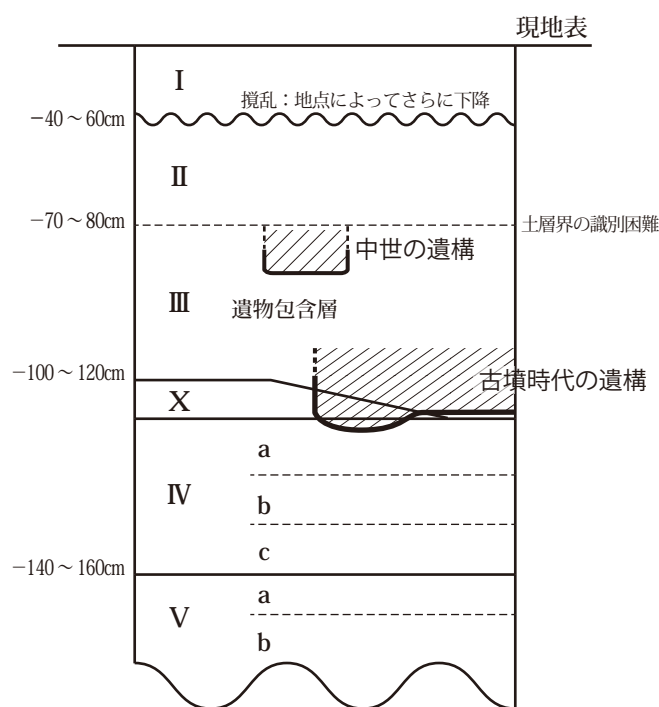
IVb層:細粒砂含みシルト。

IVc層:粘土含みシルト。

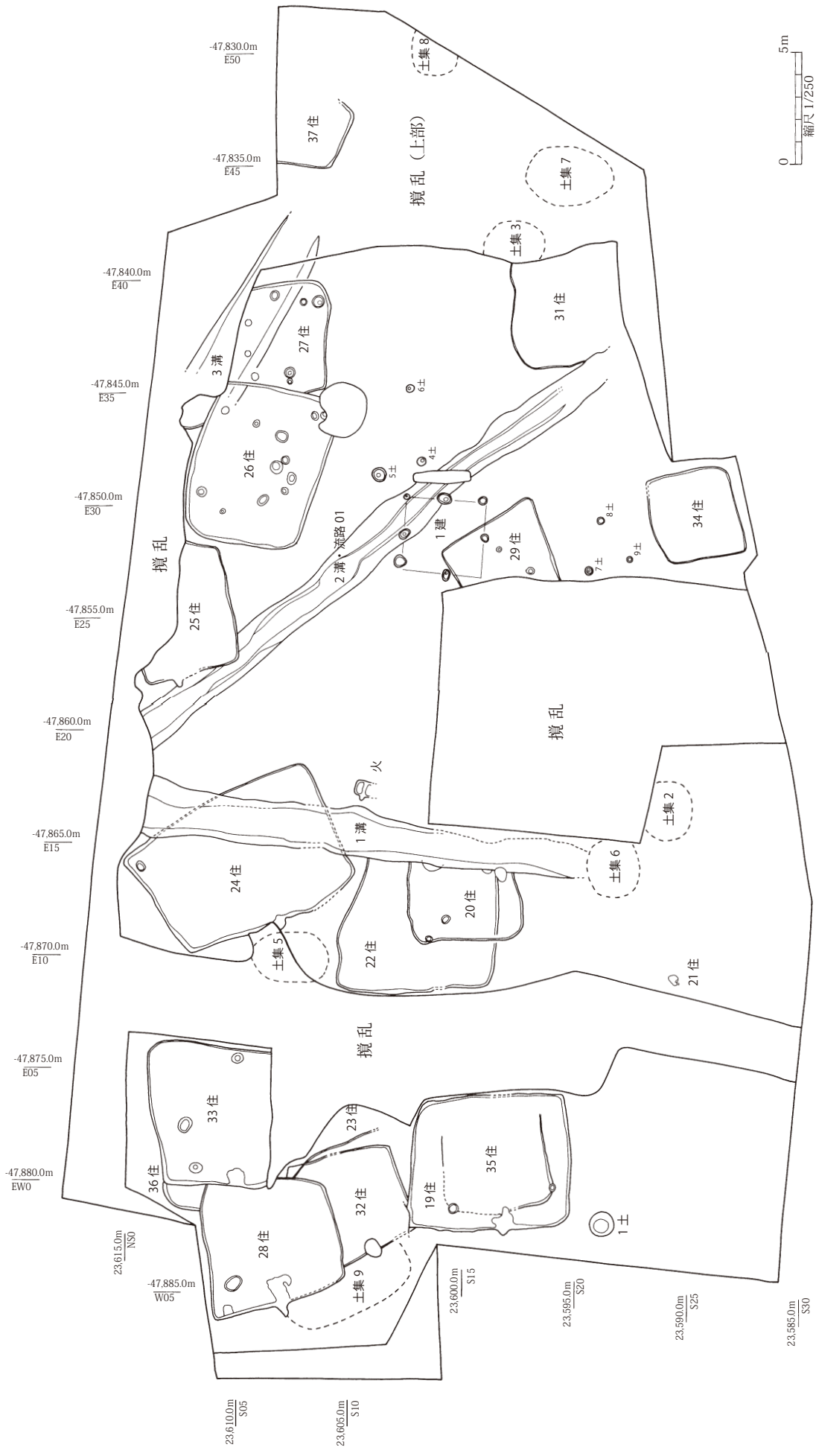
V層:粘土層。マンガンが沈着し、粒状化することもある。Va~Vbに細分する。

Va層:シルト含み粘土。Hue5Y~7.5Y、6/2~6/3。

Vb層:粘土で有機物を多量に含み、土壌化(土壌A層)。Hue5Y~7.5Y、5/3~5/4。



第6図 土層標準層序模式図



第7図 出川西遺跡第10次調査 調査地全体図

第3節 遺構

1 竪穴住居址

(1) 第19号住居址(遺構:第8図、土器:第19・20図1~74)

[検出] Ⅲ層中、カマドを手掛かりに検出。東辺は攪乱の影響を受けてやや不确实。[切合] 北辺は32住南辺と重なり、その上に構築。35住とは完全に重複し、その直上に構築。23住とも重複する可能性があるが、本址の北辺が明瞭なので、23住を切っていると推定。[平面形] ほぼ方形。[規模] 6.0×7.1m [主軸方向] N93°W [床面積] 41.573㎡ [埋土] 「Ⅲ層由来の標準埋土」で分層不能。[壁] ほぼ垂直。[床] 縁辺部以外は貼床が明瞭で堅固。カマドの前面は数回の貼り直し。西半の床上には、炭・焼土粒の薄層が分布。[床下] 床下掘方は南辺のみ深く、付随施設等が存在した可能性もある。[施設] ピット等は確認できない。[火所] 西辺中央にカマド。割石を芯材にし、その周囲を粘土でくるむ。カマド中央には割石を置き、上に甕を逆位に被せて支脚としている。[遺物出土状況] 住居内の北西側から土器が大量に出土。石製品は白玉4点、管玉2点出土。[遺物・時期] 土器は非常に多く、ほとんどが古墳時代後期に属す。杯の形態は深目で内黒が多く、高杯も多い。須恵器も少量伴う。土師器甕に胴部が卵形のものがみられる。これらの点から本址の時期は古墳時代後期前半としたい。また弥生時代中期中葉~後期後半、古墳時代前期に属する破片が数点混じっている。さらに平安時代11世紀代の杯の完形品が混じっており、本址覆土中あるいは周辺に該期の遺構があった可能性がある。

(2) 第20号住居址(遺構:第8図、土器:第22図169~180)

[検出] Ⅲ層中、カマドを手掛かりに検出。切り合う22住埋土との識別は難しく、平面形には若干の不安が残る。[切合] 住居東辺は近世の1溝に切られて喪失。22住を切るの平面で確認。[平面形] 方形または長方形。[規模] 残存値3.3×5.4m [主軸方向] N90°W [床面積] 残存値16.280㎡ [埋土] 「Ⅲ層由来の標準埋土」で分層不能。[壁] 不明瞭。[床] 北辺付近以外は堅固な貼床で、床上に炭・焼土粒の薄層が分布。炭化材も多い。[床下] 床下掘方が10cm以上あり、カマドの下部では掘方が特に深い。床下埋土は住居埋土に近似する。[施設] ピット3基で、いずれも柱痕はなし。P₁には細長い円礫(編み物用石錘)を埋納。[火所] 西辺中央にカマド。火床のみ残存。[遺物出土状況] 散漫に出土。[遺物・時期] 土器は量的には多くない。図示したものの半数は古墳時代前期だが、後期に属する須恵器や土師器甕の破片もあるため、遺構所見と合わせて、本址の時期は古墳時代後期としたい。古墳時代前期のものは本址下層の22住覆土遺物に由来すると考える。

(3) 第21号住居址(遺構:第8図、土器:第26図324・325)

[検出] Ⅲ層下部で被熱して赤化した火所を検出。掘方や施設は確認できなかったが、炉(またはカマド火床)跡と考えて住居と認定。[平面形・規模・主軸方向・床面積] 不明 [床] 堅固な床面はなし。[火所] 直径30cm程度の火所で、被熱層の厚みは数cm。焼土周辺に3点の細長い礫が存在したが、編み物用石錘で、石囲い炉ではない。[遺物出土状況] 火所と同レベルでわずかに出土した土器を本址帰属と判断。[遺物・時期] 土器は非常に少ない。古墳時代前期と後期の破片を図示できたが、遺構の時期を特定するのはむずかしい。

(4) 第22号住居址(遺構:第9図、土器:第22・23図181~212)

[検出] 試掘トレンチT3断面で、Ⅲ層中に本址掘方を発見。それを手掛かりにしたが、包含層と住居埋土は酷似し、識別根拠は遺物破片の有無だけで、検出は難航した。北辺は特に不安があり、西辺も攪乱の影響でやや不安。[切合] 20住に切られるのを平面で確認。東辺は近世の1溝に切られて喪失。[平面形] 西辺と北辺に不安が残るが、やや不整な方形とみる。[規模] 7.0×残存値5.8m [主軸方向] 不明 [床面積] 残存値37.634㎡ [埋土] Ⅲ層由来の粘土を基本に、Ⅳ層由来のシルトが多量に加わる。分層不能。[壁] やや不明瞭だが、垂直に近いと推定。[床] 明瞭な貼床はなく、硬化範囲も狭い。Ⅳ層直上に大形土器片があり、Ⅳ層直上を床と判断。[床下] 掘方なし。[施設] ピット2基。P₁は埋土中に焼土ブロックを含み、柱痕も確認できる。[火所] 南辺部の中央やや西寄りに焼土と炭片が集中。床面の被熱層はないが、火所の候補としたい。[遺物出土状況] 土器は量的に多い。[遺物・時期] 一括品にはかなり大きな塊もあり、ほとんどが古墳時代前期のため、本址は古墳時代

前期の遺構と考えると問題はない。ただしピットや焼土集中からの出土品に古墳時代後期6世紀代の杯などの小片が必ず含まれており、おそらく本址の上部に重複していた20住の掘り残し施設に伴うものと理解すれば年代的には整合する。さらに弥生時代中期前半に属する甕の一括品(第23図211)があり、追究できなかった下層遺構が存在する可能性がある。

(5) 第23号住居址(遺構:第9図、土器:第20図75~80)

[検出] 攪乱層直下のⅢ層に存在する火床と、硬化した床面を手掛かりに、竪穴住居の掘方を探し、東辺のみ僅かに検出。形状、範囲は全く不明。Ⅲ層中に構築。[切合] 床面の広がり方から見て28住と重複し、プランが明瞭でカマドを持つ28住に切られている可能性が高い。32住は本址直下にある(本址は32住の真上に乗る)。
[平面形・規模・主軸方向] 不明 [床面積] 残存値11.466㎡ [床] 黄色っぽい粘土を用いた貼床で硬い。[床下] 32住が下部に存在するので、床下の掘方はないとみる。[火所] 貼床の西限近くに厚さ数cmの被熱層があるのみ。袖等の構造痕跡は認められなかったため、カマドの残骸ではなく地床炉と判断する。[遺物出土状況] 散発的に出土し非常に少ない。[遺物・時期] 土器は量的に少ない。古墳時代中期の二重口縁壺と杯があり、他は単口縁で4世紀か5世紀か判断できない。28・32住の重複関係と土器の時期からみて、本址は古墳時代中期に属するとしておきたい。

(6) 第24号住居址(遺構:第9図、土器:第23図213~225)

[検出] Ⅲ層中のカマドを手掛かりに検出。南西・北東コーナーは識別困難でやや不安。1溝の影響を受ける東辺も不安が残る。[切合] 1溝に中央東側を切られる。[平面形] 長方形 [規模] 6.2×8.6m [主軸方向] N114°W [床面積] 推定復原値51.256㎡ [埋土] 「Ⅲ層由来の標準埋土」で分層不能。[壁] 垂直に近い。[床] カマド前面は貼床が堅固で、数回の貼り直しが認められ、床上に炭・焼土粒の薄層が分布。縁辺は床材の粘土を敷いているが固め方は弱い。[床下] 床下の掘方が深く、住居埋土と近似した床下埋土が入る。北辺付近では床面から20cm下に、直交方向に組んだ炭化材と焼土ブロックの薄層が広がる(下層遺構の可能性あり)。[施設] カマド前面にⅩ層由来の黒色粘土塊が置かれる。ピットは不明。[火所] カマドは損壊し、火床下部と煙道被熱層のみ残存。[遺物出土状況] 散漫で少量。[遺物・時期] 土器は古墳時代後期の土師器杯類、須恵器が主体だが、古墳時代前期の土師器が一定量混じっている。遺構所見ではカマドの存在は確実なので、土器様相と合わせみて本址は古墳時代後期に属すると判断する。本址周辺の遺物包含層から遺構に伴わない古墳時代前期の土器が多量に出土しており、本址の前期のものはそこに由来すると考える。弥生時代中期前半の条痕紋を有する破片が1点ある。

(7) 第25号住居址(遺構:第10図、土器:第24図254~263)

[検出] Ⅲ層中のカマドと、流路01(2溝)の砂礫層を切る本址南西コーナーを手掛かりに検出。北辺・東辺は攪乱により喪失。[切合] 流路01(2溝)を切る。[平面形] 方形か。[規模] 5.5×4.4m [主軸方向] N105°W [床面積] 残存値15.10㎡ [埋土] 「Ⅲ層由来の標準埋土」だが、住居南西側は流路01(2溝)に由来する砂礫が多量に入る。堆積学的には分層不能。[壁] ほぼ垂直。[床] 床面は硬化しきれず、貼床は不明瞭。[床下] 掘方は確認できなかった。[施設] 検出できなかった。[火所] 西辺中央にカマド(新)。両袖に芯材の礫を3個ずつ並べて粘土でくるむ。煙道は検出できない。新カマドの北隣に旧カマドの火床と煙道の残骸が残る。[遺物出土状況] 新カマド周辺より遺物が多出した。[遺物・時期] 土器は古墳時代前期と後期のものがあるが、後者が主体となる。遺構所見ではカマドが存在し、土器様相と合わせみて、本址は古墳時代後期に属するものと判断する。

(8) 第26号住居址(遺構:第11図、土器:第24図264~286)

[検出] 25住東辺と同時に、Ⅲ層中で検出。[切合] 27住を切ることを平面で確認。ただし東辺北半は不明瞭で切合の判断に苦しんだ。[平面形] 北東・南東コーナーは攪乱を受け不明。北辺も攪乱の影響を受け、検出に不安が残る。東辺のラインにも不安は残るが、一応は長方形と考える。[規模] 5.7×7.2m [主軸方向] S10°E [床面積] 残存値37.785㎡ [埋土] 「Ⅲ層由来の標準埋土」で、部分的にブロックが含まれるのは短期間に埋没した証拠であろう。上位ほど有機質の汚れが多いのを根拠に上下に二分したが、堆積学的には分層できない。

[壁] 不明瞭だが垂直に近いと推定する。[床] 床は硬化しきれず、貼床も不明瞭。[床下] 床直下はⅢ層(自然層)なので床下掘方はない。[施設] ピット12基のうちP₃は柱痕があり、P₇・P₁₂は一定の深さがある。他のピットは浅く、施設とは断定できない。[火所] 南辺中央にカマドの火床あり。袖は損壊し残っていない。煙道は不明。[遺物出土状況] 南東側床面に土器大形破片が多い。[遺物・時期] 土器が多量に出土し、土器器杯・甕を中心とした古墳時代後期のまとまった資料である。本址の時期もそこに求めて良い。ただし古墳時代中期に遡る可能性のある高杯などがあり、これらは本址に切られる27住由来と捉えるのが妥当と考えるので、本址東辺の位置については土器様相からも検討の余地が残った。ごくわずかに古墳時代前期や弥生時代中期の土器も混じるが下層のものであろう。

(9) 第27号住居址(遺構:第10図、土器:第25図287~306)

[検出] 26住東北コーナー検出時に発見、それと並行してⅢ層中で検出。北辺は攪乱で、西辺は26住に切られて喪失。その結果、孤立した形で北西コーナー付近を把握したが、そこを含めると平面形が歪むので、当該部分は別遺構の可能性もある。[切合] 平面で確認でき、26住に切られる。床下に3溝があり、その上に乗る。[平面形] いびつな方形だが、孤立した北西コーナーを除外すれば方形ないし長方形。[規模] 残存値4.0×5.0m [主軸方向] 不明 [床面積] 残存値19.750m² [埋土] 「Ⅲ層由来の標準埋土」で分層不可。[壁] 不明瞭だが垂直に近いと推定。[床] の硬化は不十分で、貼床も不明。一括出土の土器直下を床面と推測。[床下] 10~30cmの掘方。埋土は住居埋土と近似、遺物断片等を含有。[施設] ピット9基のうち、P₇・P₈は柱痕をもち、P₅・P₉は床下まで掘方が及んだが、他は浅く、施設とは断定できない。P₅には土器の大形破片(第25図298・300)を折り重ねて埋納。[火所] 不明。26住に切られて喪失した可能性を想定。[遺物出土状況] 床面全面にまとまった残存状態の土器が散乱状態で多量に出土。[遺物・時期] 土器の量は多いが、古墳時代中期に属する二重口縁壺や高杯と、後期の長胴甕や須恵器蓋杯などが混在し、しかも双方ともに良好なものが多い。後期の土器は本址を切る26住由来と思われるが、各土器の出土地点を見ると、古墳時代中期のものは本址中央部から東北部に、古墳時代後期は26住寄りに偏重している。26住東辺の位置に不確かな点があるが故の状況であろう。本址の時期は遺構所見と遺物の内容・出土地点から古墳時代中期としておきたい。古墳時代前期の土器がわずかに混じるが、下層の3溝に伴うものと考え。また円筒埴輪とそのタガラしき破片が複数点(第31図1~3)出土しており、注目に値する。

(10) 第28号住居址(遺構:第12図、土器:第20・21図81~106)

[検出] Ⅲ層中で、カマドを手掛かりに検出。住居西側の検出のみが容易で、32・33住と切合う南辺・東辺は不安が残る。[切合] 本址南西コーナーは確実に32住を切る。33住カマドは本址埋土中に構築されているので、33住に切られる。36住を切るのは平面で確認。プラン不明の23住と重なる場合はカマドがある本址が23住を切ると推測する。[平面形] ややいびつな方形。[規模] 5.6×6.0m [主軸方向] S 75° E [床面積] 残存値31.406 m² [埋土] 「Ⅲ層由来の標準埋土」で分層不能。[壁] ほぼ垂直。[床] カマド前面から住居北半分にかけては顕著な貼床だが、他の硬化は不十分。[床下] 10~30cmの掘方。住居埋土と近似した埋土で、Ⅳ層由来の黒色粘土が加わる。[施設] 浅くて不明瞭なピット1基のみ。[火所] 住居西辺中央にカマド(新)。両袖の残骸が残るが芯材の存否は不明。中央に支脚石があり、煙道下部の被熱層が残存。西辺の北寄りに旧カマドの火床が残存するが袖や煙道は喪失。旧カマドは位置的にみて別遺構の可能施もある。[遺物出土状況] 住居西半から散漫に出土。床面遺物は少ない。[遺物・時期] 土器は量的に多い。ほとんどが古墳時代後期の土器で、甕と内黒の杯が多数を占め、須恵器の小破片も数点ある。本址の時期は遺構所見と土器から古墳時代後期と判断する。ただし古墳時代前期に属する土器の破片が少量混じっており、これらは本址に切られる32住覆土由来のものと考え。

(11) 第29号住居址(遺構:第12図、土器:第26図326~329)

[検出] Ⅲ層中に構築されていると推測するが、Ⅳ層上面で検出。Ⅳ層と埋土の差は明瞭。[切合] 1建のP₅に切られるのは平面・断面で明瞭に確認。[平面形] 方形~長方形。[規模] 残存値3.7×4.6m [主軸方向] N 60° E

[床面積]面積]残存値12.388㎡[埋土]Ⅲ層由来の粘土主体で、Ⅳ層由来のシルトを多量に含む。[壁]不明瞭だが垂直と推定。[床]住居中央部は十分硬化。[床下]床直下はⅣ層で、掘方はない。[施設]ピットが1基あり、柱痕はないが深さは十分にある。[火所]住居中央やや東寄りに埋甕炉があり、甕胴部(第26図329)を正位に埋置。炉東側床面に炭・煤の薄層。[遺物出土状況]土器小片が散発的に少量出土。[遺物・時期]埋甕炉の炉体とその他の土器は古墳時代前期に属し、本址の時期も同期と判断する。

(12) 第31号住居址(遺構:第12図、土器:第27図350～355)

[検出]Ⅲ層中に構築したと推測するが、Ⅳ層上面で検出。付近のⅢ層は流路01由来の礫を多量に含み、Ⅲ層中の検出は困難で、住居掘方下部・床付近で検出。[切合]住居南西コーナーが流路01に切られるのを平面で確認。[平面形]方形～長方形[規模]残存値4.8×残存値4.8m[主軸方向]不明[床面積]残存値22.655㎡[埋土]Ⅲ層由来の粘土主体で、流路01由来の礫・中粒砂を多量に含む。[壁]不明[床]南西コーナーの火所周辺のみ貼床残存。[床下]底が平坦ではない浅い掘方あり。[施設]不明[火所]西辺～南西コーナーの床が被熱しており火所と推定。前面の床上に焼土粒・炭片の薄層あり。[遺物出土状況]住居検出前のⅢ層中から遺物は多出したが、覆土・床面からの遺物は僅少。[遺物・時期]わずかな土器があり、すべて古墳時代前期に属する。また本址を切る流路01(下層は2溝)の出土土器は上層が古墳時代中期、下層が前期である。それらの点からみると本址の時期は古墳時代前期の可能性が高く、その場合、火所は地床炉の可能性が高い。

(13) 第32号住居址(遺構:第13図、土器:第21図107～112)

[検出]28住南壁と23住床下調査で新たな床面を把握。23住床下で住居掘方を検出。埋土が独自で、住居東北コーナー以外の検出は容易だった。Ⅲ層中に構築。[切合]23住直下でそれに後続し、28住に切られるのを平面で確認。[平面形]ややいびつな方形。[規模]4.7×4.7m[主軸方向]不明[床面積]残存値15.768㎡[埋土]「Ⅲ層由来の標準埋土」だが、Ⅲ層や周辺の住居埋土より細粒砂が多いのが特徴的。分層不能。[壁]ほぼ垂直。[床]全体に硬化し、住居中央は貼床が顕著。住居東辺寄りに焼土粒・炭片の薄層。[床下]10～15cmの掘方あり、床下埋土は住居埋土に近似。[施設]不明[火所]住居東辺寄りの火床は、平面形不整形だが、被熱層厚2～3cmと十分厚く、地床炉と判断。[遺物出土状況]遺物が少なく、床面遺物も少ない。[遺物・時期]土器は量的に少ないが、古墳時代前・中・後期のものがみられる。また本址と28住検出中に出土した包含層遺物は古墳時代前期と後期に二分される。この土器様相と遺構重複の所見から、本址は古墳時代前期の所産としておきたい。

(14) 第33号住居址(遺構:第13図、土器:第21図113～126)

[検出]28住東辺で発見したカマドを手掛かりに検出。Ⅲ層中に構築。[切合]本址カマドは28住を切って構築、36住を切るのを平面で確認。[平面形]方形と推測。[規模]6.2×残存値5.2m[主軸方向]N95°W[床面積]残存値32.425㎡[埋土]「Ⅲ層由来の標準埋土」だが、西半は細粒砂が多く32住埋土に似る。分層不能。[壁]ほぼ垂直。[床]硬化面不明で、カマドのレベルと遺物・礫の分布レベルから床面を推定。[床下]20～30cmの掘方を持つ可能性あり。床下埋土はⅢ層と同質で区別困難。[施設]深さ十分のピット3基。P₂には柱痕あり。[火所]西辺中央やや南寄りにカマド。袖は痕跡のみで芯材の有無不明。火床が残存、煙道は喪失。カマド下部には深い掘方あり。[遺物出土状況]埋土中の遺物が多いが、床面遺物は少ない。[遺物・時期]土器は量が多く、図示できたものの多くは古墳時代前期に属する。わずかに古墳時代後期の甕の破片や須恵器片があり、さらに弥生時代後期の波状紋の甕片もある。本址の時期は、遺構所見からすると明確なカマドを持ち、古墳時代後期の28住を切るの、古墳時代後期以降とすべきであるが、出土土器の全体像とは一致しない。しかし量ではなく最新の土器の時期を採り、遺構所見に合致する古墳時代後期とする。調査範囲のはずれに当る本址北辺側に古墳時代前期の遺構・包含層が存在した可能性がある。

(15) 第34号住居址(遺構:第14図、土器:第26・27図333～349)

[検出]Ⅳ層上面で完形土器の集中を発見。土器周辺を精査し、住居床面で北辺・西辺を検出。土器取上げ後に再検出を試み、東辺・南辺を検出。住居構築はⅢ層中。[切合]なし[平面形]方形でコーナーは丸みがある

が、隅丸方形というほどではない。[規模] 3.9×4.0m [主軸方向] N 15°W [床面積] 15.106㎡ [埋土]「Ⅲ層由来の標準埋土」だが、小礫が多い。分層不能。[壁] 不明 [床] 硬化面なし。[床下] 床直下はⅣ層で、掘方なし。[施設] 不明 [火所] 住居中央やや北辺寄りに炭片薄層あり。焼土・被熱層はないが、地床炉に関わるものの可能性がある。[遺物出土状況] 住居北辺壁際に、一括土器11点を正位で1～2列に並べて据え置く。他の床面遺物は小片のみ。[遺物・時期] 11点の一括土器(第26図333～343)は古墳時代前期に属し、他の小片も同様に、本址は古墳時代前期に属する。わずかに弥生時代中期後半の壺片が1点混じる。

(16) 第35号住居址(遺構:第14図、土器:第21図127～135)

[検出] 19住床下埋土中で検出。[切合] 全面的に19住に切られ、床面の一部のみ残存。[平面形] ほぼ方形か。[規模] 4.6×残存値4.8m [主軸方向] 不明 [床面積] 残存値17.539㎡ [埋土]「Ⅲ層由来の標準埋土」だが、Ⅳ層由来のシルトのブロックが入る。分層不能。[壁] 不明 [床] 西辺寄りに堅固な貼床残存。床上には焼土粒・炭片の薄層あり。[床下] 北西側床下の掘方は深く、埋土はⅢ層・Ⅳ層のブロック状。[施設] 不明 [火所] 南辺寄りに焼土が厚い箇所あり。地床炉の可能性あり。[遺物出土状況] 埋土がほとんど失われ、遺物は散見されるのみ。[遺物・時期] 少量の土器が出土しているが、時期的には古墳時代前・中・後期にわたる。遺構所見に従えば本址の上部を覆う19住が古墳時代後期に属するので、本址は古墳時代後期以前であり、火所が地床炉ならば古墳時代前・中期まで遡る。

(17) 第36号住居址(遺構:第13図、土器:第21図136・137)

[検出] 33住と一体で検出。Ⅲ層中に構築。[切合] 28住・33住に切られるのを平面で確認。本址床の焼土粒・炭片の薄層も33住に切られるのを確認。[平面形] ほとんどの部分を切られているので、詳細は不明。[規模] 不明 [主軸方向] 不明 [床面積] 残存値1.771㎡ [埋土]「Ⅲ層由来の標準埋土」で分層不能。[壁] ほぼ垂直。[遺物出土状況] ほとんどなし。[遺物・時期] 図示した土器は古墳時代後期に属する。切り合い等の遺構所見に基づく古墳時代後期以前となる。確認された範囲が狭小であるため、時期の確定は困難である。

(18) 第37号住居址(遺構:第13図、土器:第27図356～364)

[検出] 27住床下検出の3溝追跡中にⅣ層中で検出。攪乱を受け床面の一部しか残らない。埋土の質からⅢ層中に構築したと推測。[切合] 住居東辺には別遺構があるが把握不能。[平面形] 遺存状況が悪く、平面形は不安だが、方形ベースか。[規模] 不明 [主軸方向] 不明 [床面積] 残存値5.757㎡ [埋土] Ⅲ層質の埋土だが、攪乱の影響を受け、詳細不明。[遺物出土状況] 床面遺物若干あり。[遺物・時期] 土器はすべて古墳時代前期に属し、本址の時期もそこに求めたい。

2 掘立柱建物址

(1) 第1号掘立柱建物址(遺構:第15図)

[検出] Ⅲ層中の流路01(2溝)を追跡中に、流路の砂礫層を切る柱穴を発見、建物を検出。[切合] 流路01(2溝)を切る。29住を切るのを平面・断面で確認。[構造] 2×2間の側柱の建物。南西隅の柱穴は不明で、北西隅の柱穴も位置がずれる。[規模] 3.5×3.3m [主軸方向] N 5° E [柱内面積] 11.55㎡ [柱穴・柱痕] 7基のピット掘方を確認。P₂・P₇以外は柱痕あり。[埋土] 掘方埋土は竪穴住居址埋土と近似。Ⅲ層由来の粘土を基本に、有機質の汚れが明瞭で、土器細片などが混入。柱痕埋土も同質だが、有機質の量が著しく多い。[遺物出土状況] ピットの掘方埋土から少量の土器が出土。[遺物・時期] 出土土器は細片で時期判別不能。古墳時代前期の29住と古墳時代前・中期の流路01(2溝)を切っていることから古墳時代中期以降である。

3 溝址

(1) 第1号溝址(遺構:第16図、土器:第23図230～242)

[検出] Ⅲ層上面で検出。検出は容易。埋土はⅡ層由来なので、Ⅱ層中に構築したと推測。溝底南半には暗渠排水を構築、溝の東壁が破壊される。溝北端は攪乱で喪失、南端は浅く、工場造成等で喪失。[切合] 20住・22住・24住を切るのを平面で明瞭に確認。[方向・形状] ほぼ南北で一直線。標高は南側が高く、北側が低い。[断面

形]逆台形[埋没状況]埋土は上下に二分。下位は溝壁面の崩落に由来するシルト含み粘土質で、小礫混入。溝構築後、比較的短期間で埋没。上位は淘汰の良いⅡ層由来のシルト含み粘土。時間をかけて埋没したか。[遺物出土状況]溝西壁に貼りついて天保通寶が出土。そのほか、散漫に出土。[遺物・時期]最新の出土遺物からみて近世以降の遺構である。

(2) 第2号溝址・流路01(遺構:第16図、土器:第27・28図365～443、444～450)

[検出]Ⅲ層中に帯状の砂礫層を発見、流路01を検出。断面調査で流路下部に2溝の掘方を発見。2溝が氾濫して流路01が形成されたと理解。溝北西端は攪乱で喪失、南東端は浅く、工場造成等で喪失。[切合]25住、1建に砂礫層が切られ、31住を砂礫層が切るのを平面で確認。[方向・形状]南東～北西でほぼ一直線。標高は南東側が高く、北西側が低い。水流は南東→北西と推測。[断面形]流路01は皿状。その下部の溝02は不整逆台形だが、氾濫時に削られており、本来はシャープな逆台形もしくは方形かと推測。[埋没状況]流路01・2溝とも一体で埋没。埋土は淘汰の悪い砂礫層・砂層の互層で、氾濫による瞬時の埋没を示す。[遺物出土状況]砂礫層中に大量の土器片、特に重量のある底部が集中埋没。器面は若干のローリングを受け、長くない距離を運ばれたと推測。流路01直上のⅡ層中に、まとまった土器(第28図444～450)が直線的に並べられて出土。流路に関連する祭祀の痕跡か。[遺物・時期]流路01直上のⅡ層中出土の土器は古墳時代前期から中期にかけてのもの。下層(2溝)の土器は同前期のものであった。前者の土器が、遺構所見で想定した遺構の埋没時期の直後を示すものと考えたい。25・31住との切合とも整合する。

(3) 第3号溝址(遺構:第16図、土器:第25・26図309～323)

[検出]27住床下断面調査で発見。Ⅳ層上面で平面検出。埋土上位はⅢ層由来の粘土なので、Ⅲ層中から構築されたと判断。溝西端は深く、行方は不明。南東端は浅く、工場造成等で喪失。[切合]本址埋土の上に26住・27住を構築。[方向・形状]東南東～西北西方向でほぼ一直線。溝東端付近で溝南辺がやや湾曲、方向を変えている可能性がある。標高は東南東側が高く、西北西側が低い。水流があるなら東南東→西北西と推測。[断面形]幅広で皿形。シャープな掘形ではない。[埋没状況]土質差で分層可。一定の時間をかけて、両側から自然埋没したと推定。[遺物出土状況]底付近よりまとまった土器を多数検出。溝底に意図的に設置した可能性大。[遺物・時期]土器はすべて古墳時代前期のもので、切り合い等の遺構所見からみても本址は古墳時代前期に属すると考える。[性格]断面V字形ではないので、環濠等の区画溝ではない。直線的ではない可能性もある。

4 火葬施設(遺構:第15図、金属製品:第3表8～10)

[検出]Ⅱ層中で焼けた壁面を発見、検出。Ⅱ層中に掘り込まれ、底もⅡ層中に収まる。試掘トレンチT3で南壁を損壊。[切合]なし。[平面形]短辺に煙道が付随した長方形。[埋土]底に棺材の炭と焼骨、焼け崩れた銭貨が集積。上位はⅡ層質のシルト含み粘土で埋め戻す。[壁]垂直の掘方で、壁下半は被熱して赤化。壁上半は煤が付着。[底]短辺中央に煙道につながる浅い溝を掘り込み、通気を図る。[遺物・時期]時期を特定できる土器・陶磁器の出土はなかったが、伴っていた3枚の銭貨は北宋銭であった。本址は中世の所産と考える。

5 土坑

(1) 第1号土坑(遺構:第15図)

[検出]19住検出の延長で、Ⅲ層中で検出。[切合]なし。[平面形]ほぼ円形。[埋土]二分層したが、土質差はわずかなので、長期間かけた自然埋没ではない。[断面形]逆台形で底は平坦。[遺物出土状況]埋土に混入したと思われる微量の土器が出土しているのみ。[時期]不明

(2) 第4～9号土坑(遺構:第15図)

[検出]Ⅲ層中の流路01追跡時に、1建と一緒に検出。土坑埋土とⅢ層・流路砂礫層との差は明瞭。[切合]いずれもなし。[組合せ]4土～7土は柱痕をもつが配置は不整で組み合わせた建物にはならない。建物01にも繋がらない。[平面形]いずれも円形。[埋土]掘方埋土は建物01の掘方埋土と一致。柱痕埋土も建物01の柱痕埋土と一致し、有機質の汚れ顕著。[遺物出土状況]目立つ遺物はなし。[時期]不明。1建と近似する可能性

がある。

6 土器集中(土集1・4は欠番)

(1) 土器集中2(遺構:第7図、土器第28図451・452)

[検出] 21住の東方で土器片が集中的に出土した箇所を概略の範囲で捉えた。北側を攪乱で破壊されている。
[切合] なし。[平面形] 不定 [遺物出土状況] 多数の土器片が出土したが意図的な配置や遺棄の状況は見られない。
[遺物・時期] 古墳時代前期と後期の土器があり、後者を図示できた。遺構の時期は特定できない。生成原因は不明。

(2) 土器集中3(遺構:第7図、土器第28図453～455)

[検出] 31住の東側を破壊する攪乱の下部で土器片が集中的に出土した箇所を概略で捉えた。[切合] 隣接する31住との前後関係は把握できなかった。
[平面形] 不定 [遺物出土状況] 多数の土器片が出土したが意図的な配置や遺棄の状況は見られない。
[遺物・時期] 古墳時代前期と後期の土器があり、前期(454・455)と後期(453)のものを図示できた。遺構の時期は特定できない。生成原因は不明。

(3) 土器集中5(遺構:第7図、土器第23図226～229)

[検出] 24住の西、22住の北方で遺構が確認できなかった部分から集中して土器片が出土した箇所を概略の範囲で捉えた。西側を攪乱で破壊されている。
[切合] 隣接する22住や24住との重複関係は確認できなかった。
[平面形] 不定 [遺物出土状況] 多数の土器片が出土したが意図的な配置や遺棄の状況は見られない。
[遺物・時期] 古墳時代前期と平安時代後期の土器があり、4点を図示(228は平安時代後期、他は古墳時代前期)。本址の生成理由は特定できず、2時期の遺物の存在は、それぞれ別の原因に由来すると考える。

(4) 土器集中6(遺構:第7図、土器第28図456～460)

[検出] 21住の東方、1溝の南端部で土器片が集中的に出土する箇所を概略の範囲で捉えた。東側を攪乱で破壊。
[切合] 1溝との重複関係は不明。
[平面形] 不定 [遺物出土状況] 多数の土器片が出土したが意図的な配置や遺棄の状況は見られない。
[遺物・時期] 古墳時代前期から中期にかけての土器があり、5点を図示(456～460)。遺構の時期は土器の様相に準ずると考える。生成原因は不明。

(5) 土器集中7(遺構:第7図)

[検出] 31住の東方3～5m付近で、攪乱の下部から土器片が集中的に出土した箇所を概略で捉えた。
[切合] なし。
[平面形] 不定 [遺物出土状況] 多数の土器片が出土したが、小破片ばかりで詳細は不明。意図的な遺棄の状況は見られない。
[遺物・時期] 古墳時代前期から後期の土器片であるが、図示できるものはない。遺構の時期は特定できない。生成原因は不明だが、上部の攪乱で破壊された何らかの遺構の残骸の可能性もある。

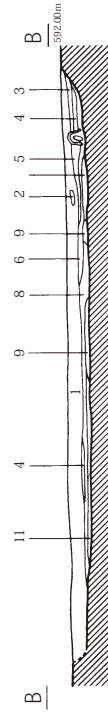
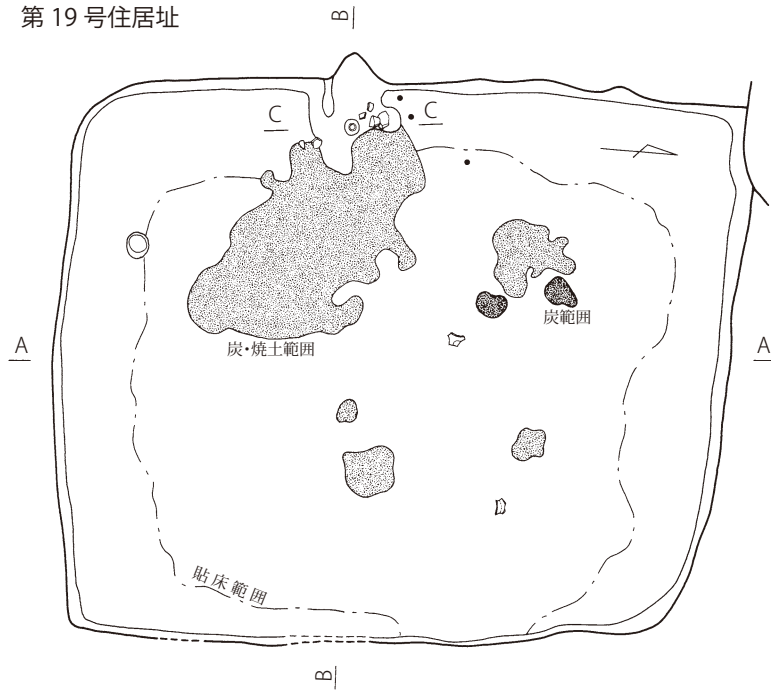
(6) 土器集中8(遺構:第7図)

[検出] 調査区東端部で土器片が集中した箇所を概略で捉えた。
[切合] なし。
[平面形] 不定 [遺物出土状況] 多数の土器片が出土したが、小片ばかりで詳細は不明。意図的な遺棄の状況は見られない。
[遺物・時期] 古墳時代前期から後期の土器片だが、図示できたものはない。遺構の時期は特定できない。生成原因は不明。

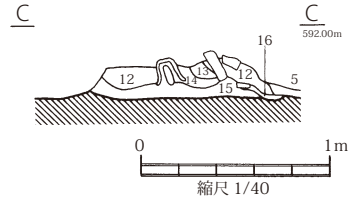
(7) 土器集中9(遺構:第7図、土器第22図138～155)

[検出] 28・32住の西隣で土器が多量に出土しながら、住居址等の遺構として確認できなかった部分を概略の範囲で捉えた。
[切合] 東側で28・32住に接するが前後関係は不明。
[平面形] 不定 [遺物出土状況] 多数の土器片が出土したが意図的な配置や遺棄の状況は見られない。
[遺物・時期] 古墳時代前期から中期と平安時代後期の土器があり、18点を図示できた(150・150:古墳時代中期、139・148:平安時代後期、他は古墳時代前期)。本調査地を覆う遺物包含層が特に発達した箇所として理解することもできるが、平安時代後期の遺物の存在は、上層での該期遺構の存在などの原因に由来するものと考えられる。

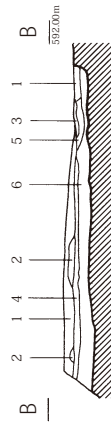
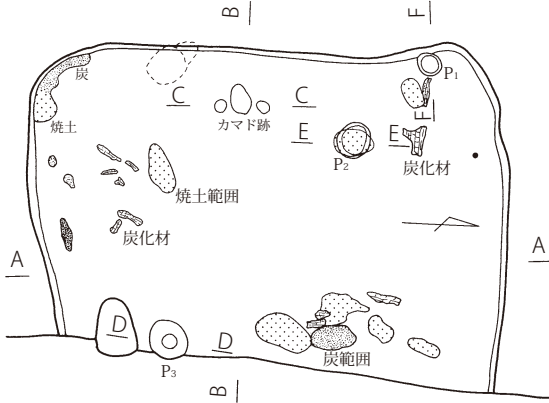
第 19 号住居址



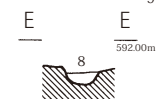
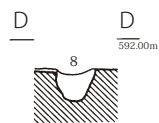
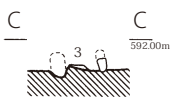
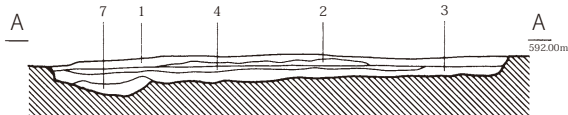
- 1: III層質シルト、溶脱色でマンガン粒・粘土分多、有機質の汚れ、焼土粒・炭化物少量混入
- 2: 焼土ブロック集中
- 3: 煙道内埋土、焼土粒著
- 4: カマド内埋土、火床や内壁の被熱ブロック著
- 5: 19 住埋土
- 6: 19 住貼床 (新床)
- 7: 貼床直下の焼土・灰・炭ブロック混合層 (カマド焚口は改修で貼床下にうめられたか)
- 8: 炭・灰・焼土ブロックの縮状重積層 (19 住由来)
- 9: 19 住貼床 (旧床)
- 10: 炭・焼土ブロック
- 11: 床直上の有機質大量含有土
- 12: カマド材料の粘土、III層
- 13: 焼土ブロック、カマド内壁の崩れ
- 14: 焼土・炭ブロック、カマド内埋土
- 15: 14 と同質、カマド修築の残土か
- 16: 14・15 と同質、焼土著



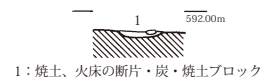
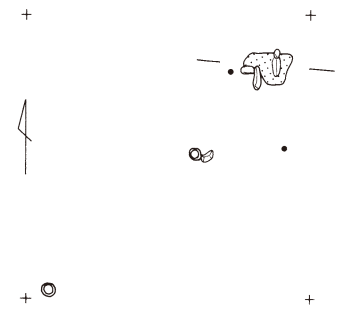
第 20 号住居址



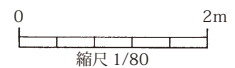
- 1: 埋土、III層ベースシルトで粘性強、マンガン粒着、溶脱色、焼土粒・炭含む
- 2: 炭化物・焼土粒集中の埋土
- 3: カマド火床
- 4: 貼床、黄色味強いシルト～細粒砂、マンガン沈着
- 5: 火床直下の被熱層、火床ほど焼けていない
- 6: 床下埋土またはIII層 (床下埋土の可能性高い)
- 7: 床下土坑か住居内施設、III層・IV層ブロック混在
- 8: III層と同質、若干汚れ (有機物多い)
- 9: シルトで溶脱色、若干汚れ



第 21 号住居址

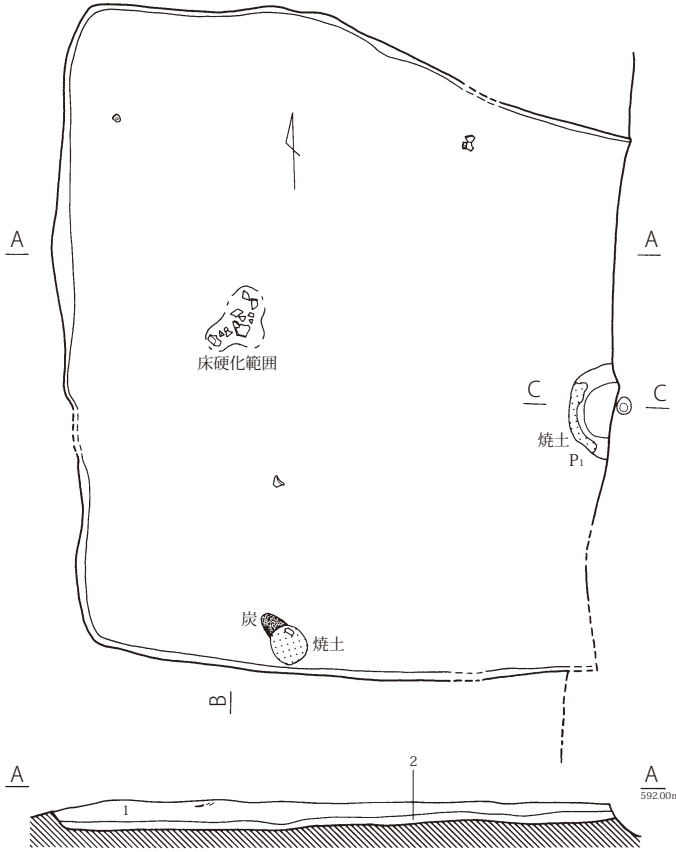


- 1: 焼土、火床の断片・炭・焼土ブロック

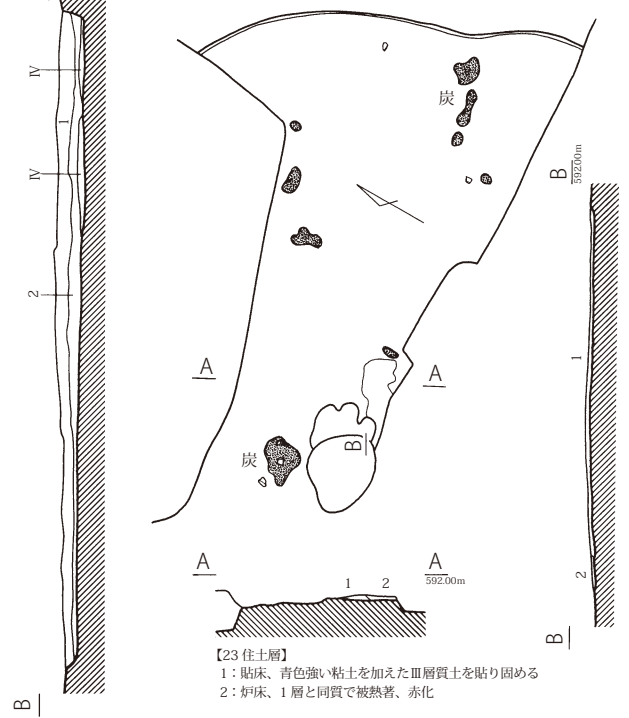


第 8 図 遺構実測図 1 (住居址 1/7)

第 22 号住居址

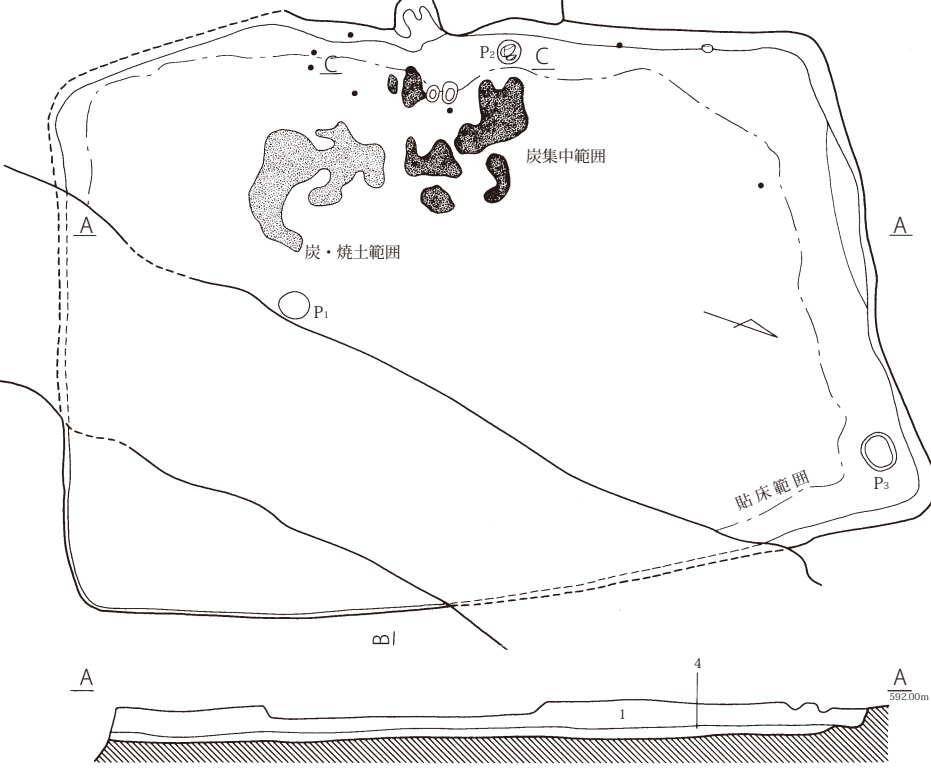


第 23 号住居址

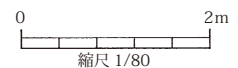


- 【23 住土層】
 1: 貼床、青色強い粘土を加えた皿層質土を貼り固める
 2: 炉床、1層と同質で被熱著、赤化
- 【22 住土層】
 1: 粒度の粗い皿層（粘土含みシルトでIV層に近い）マンガン沈着著
 2: 1層と同質、遺物大破片多い
 3: 焼土ブロック・炭多量含む
 4: IV層
 5: 柱痕（1層と同質）

第 24 号住居址

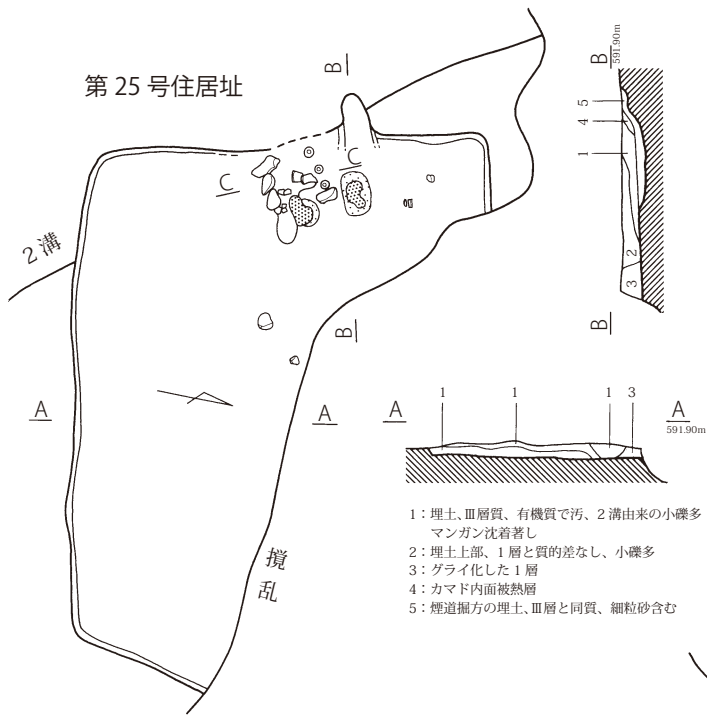


- 1: 埋土、皿層ベース粘土（シルト混）
 皿層より粘性強
 溶脱色でマンガン粒多
 有機質の汚れ多
 2: カマド埋土、焼土ブロック著
 3: 粘土塊、黒色
 4: 貼床・床材
 皿層ベース黄色粘土加わる
 若干汚れ
 5: 皿層ベースシルト、黄色強
 淘汰良いFeO部分沈着
 6: 皿層ベース、シルト+細砂
 マンガン大粒沈着、小礫混

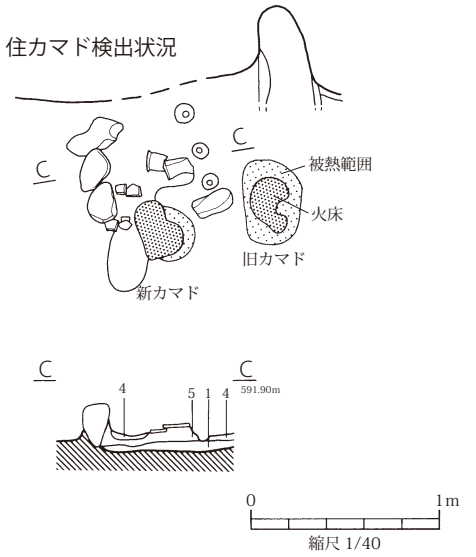


第 9 図 遺構実測図 2 (住居址 2/7)

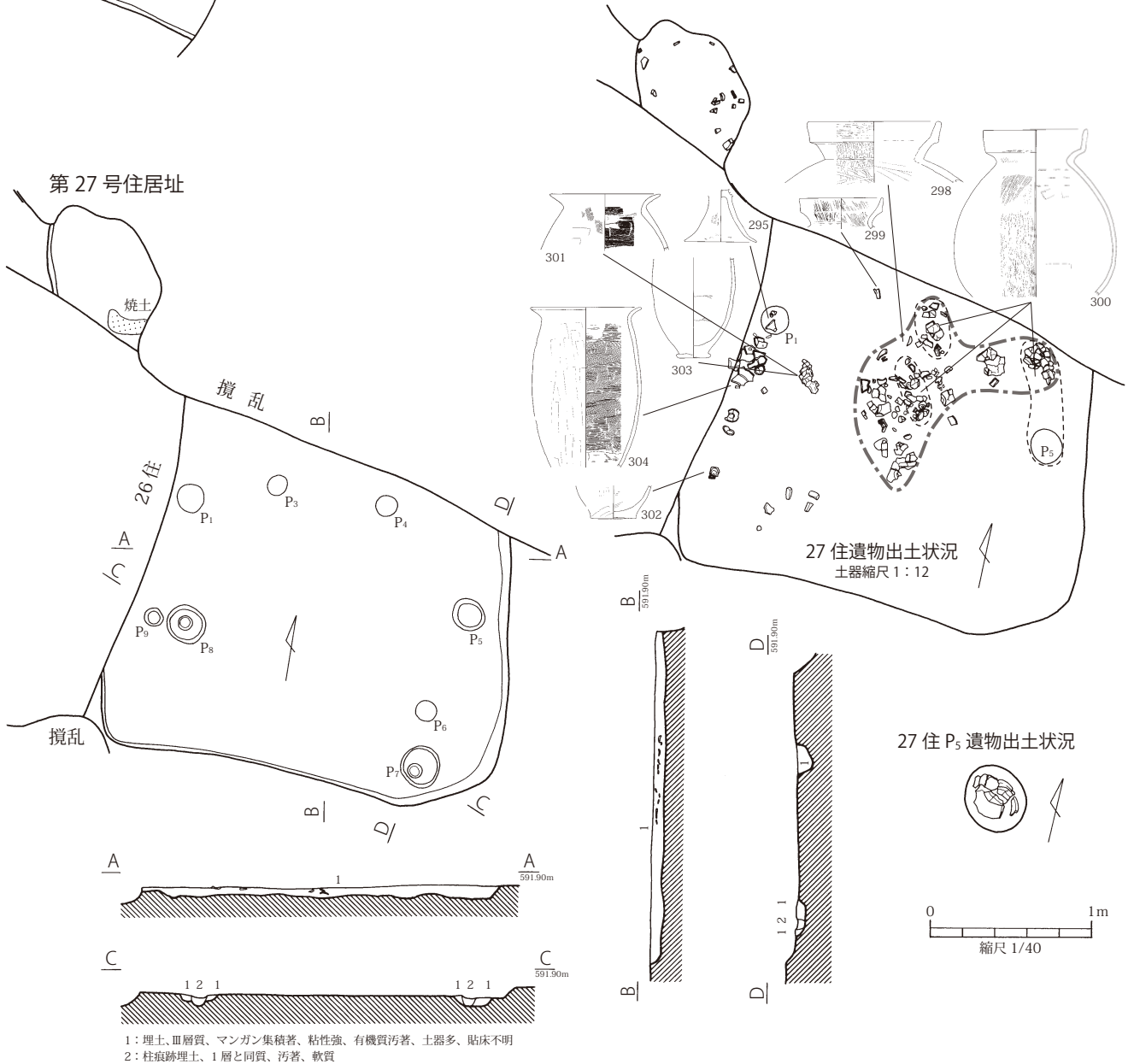
第 25 号住居址



25 住カマド検出状況



第 27 号住居址

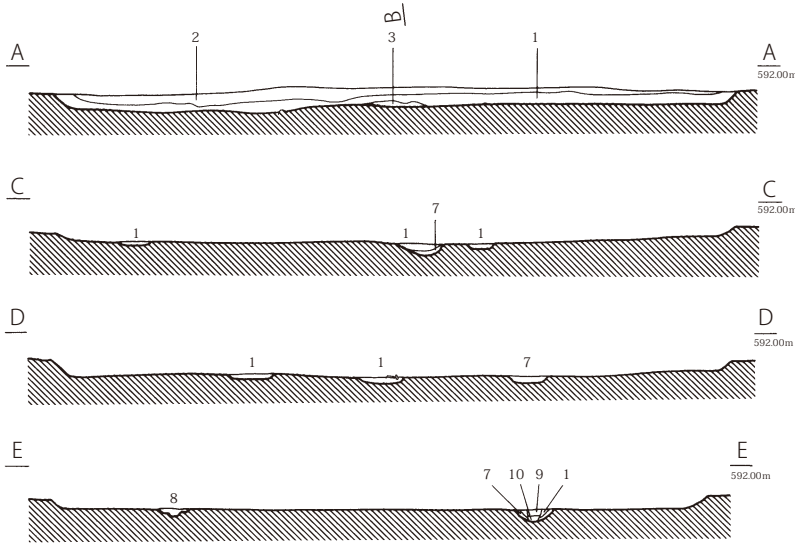
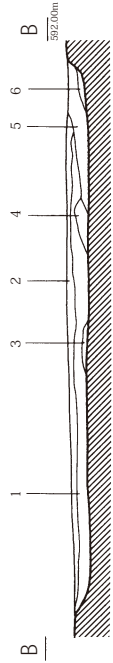
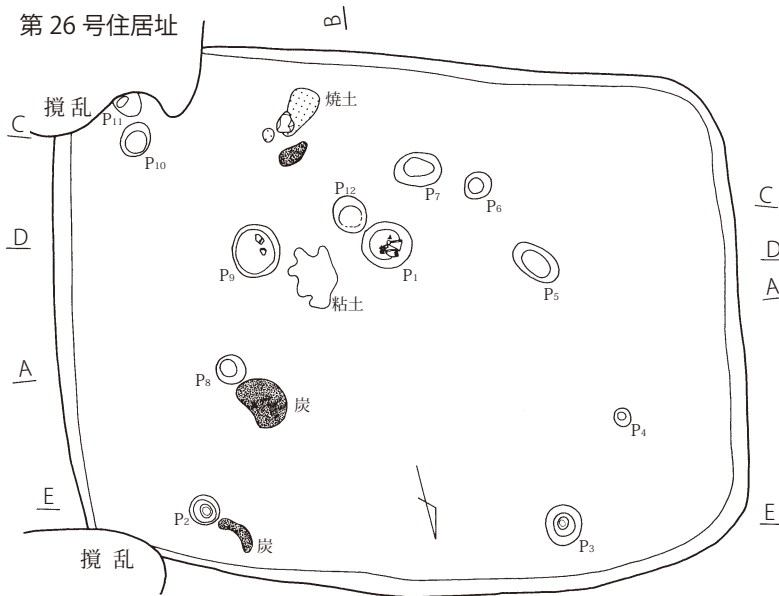


27 住遺物出土状況
土器縮尺 1:12

27 住 P₅ 遺物出土状況

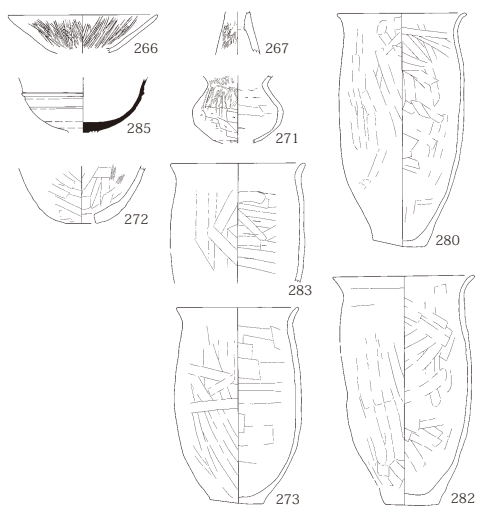
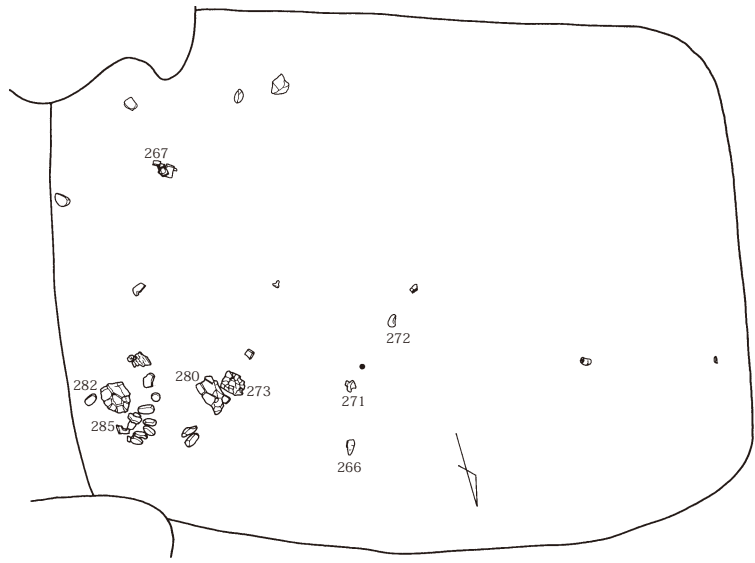
第 10 図 遺構実測図 3 (住居址 3/7)

第 26 号住居址

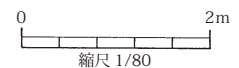


- 1: 埋土、Ⅲ層質マンガン沈着粘土
有機質汚れ、小礫少ない
- 2: 埋土上部、1層と同質だが暗色
粘土分がやや多い、汚れやや強い
- 3: 部分ブロック、1層と同質やや明色
- 4: 埋土、Ⅲ層に近く1・2層より明色
- 5: 埋土、Ⅳ層質の粘土混シルト (壁前落か)
- 6: 埋土、Ⅲ層質で汚れ著
- 7: 埋土、1層と同質だが粘土少でシルト多
- 8: 埋土、1層と同質で汚れ著
- 9: 柱痕埋土、1層と同質、汚れやや強
- 10: 柱痕埋土、7層と同質、汚れやや強

第 26 号住居址遺物出土状況

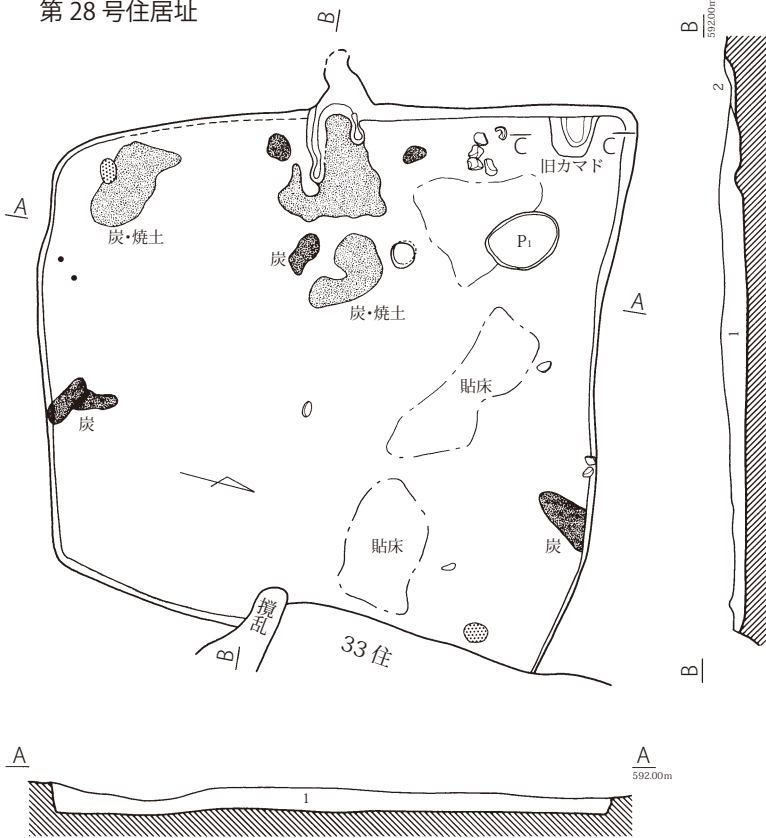


土器縮尺 1:10

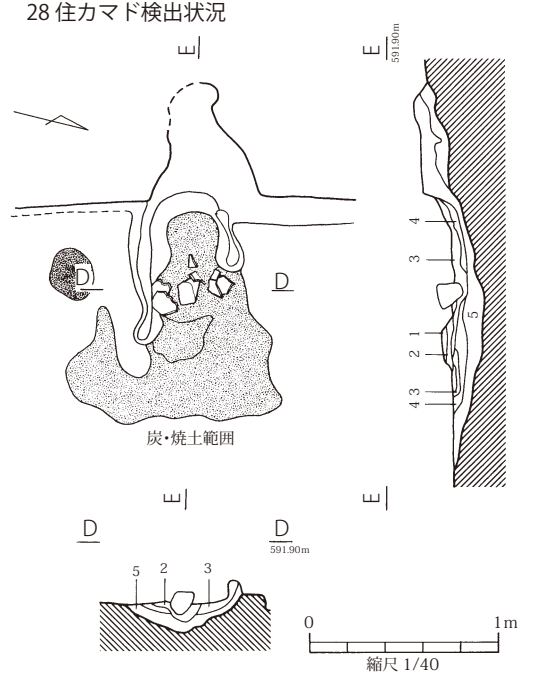


第 11 図 遺構実測図 4 (住居址 4/7)

第 28 号住居址

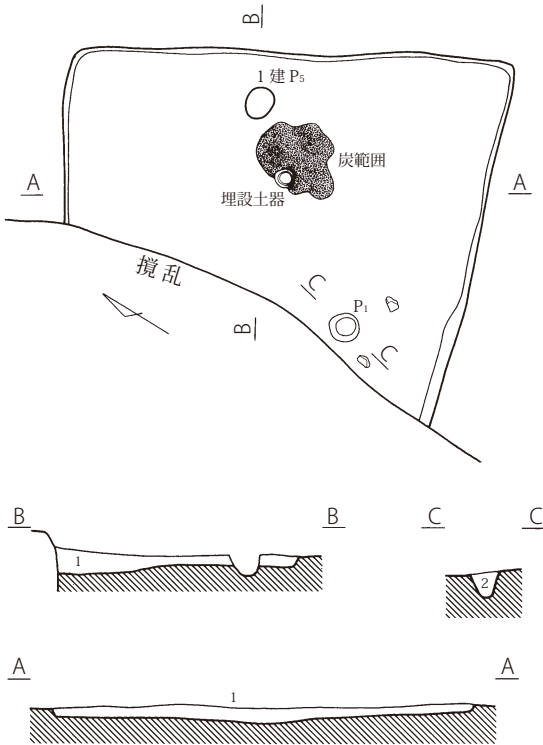


28 住カマド検出状況

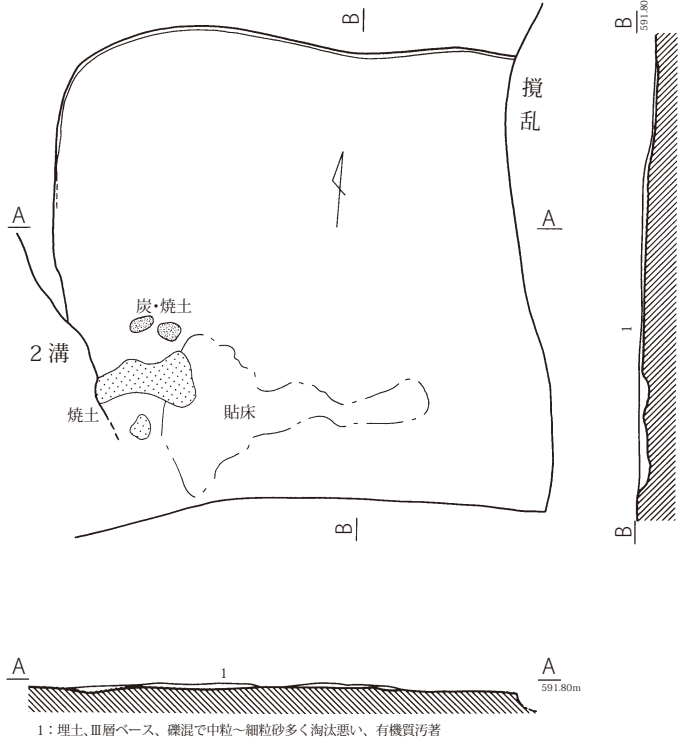


- 1: 埋土、Ⅲ層質のシルトで粘土分多、粘性強、溶脱色、マンガン粒著、有機質汚れ
焼土粒・土器細片・炭片含む
- 2: カマド煙道埋土、Ⅲ層質で焼土ブロック混

第 29 号住居址



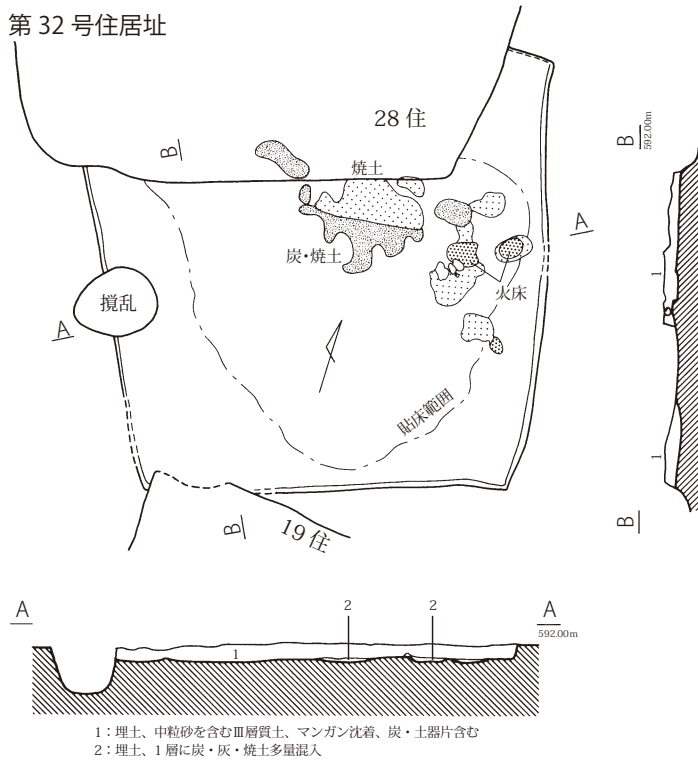
第 31 号住居址



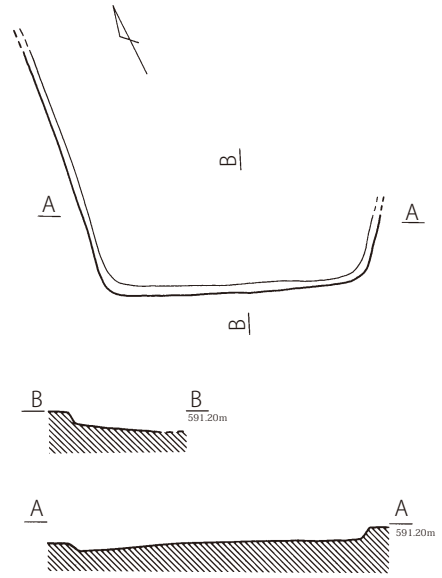
- 1: 埋土、Ⅲ層ベース、礫混で中粒～細粒砂多く淘汰悪い、有機質汚著

第 12 図 遺構実測図 5 (住居址 5/7)

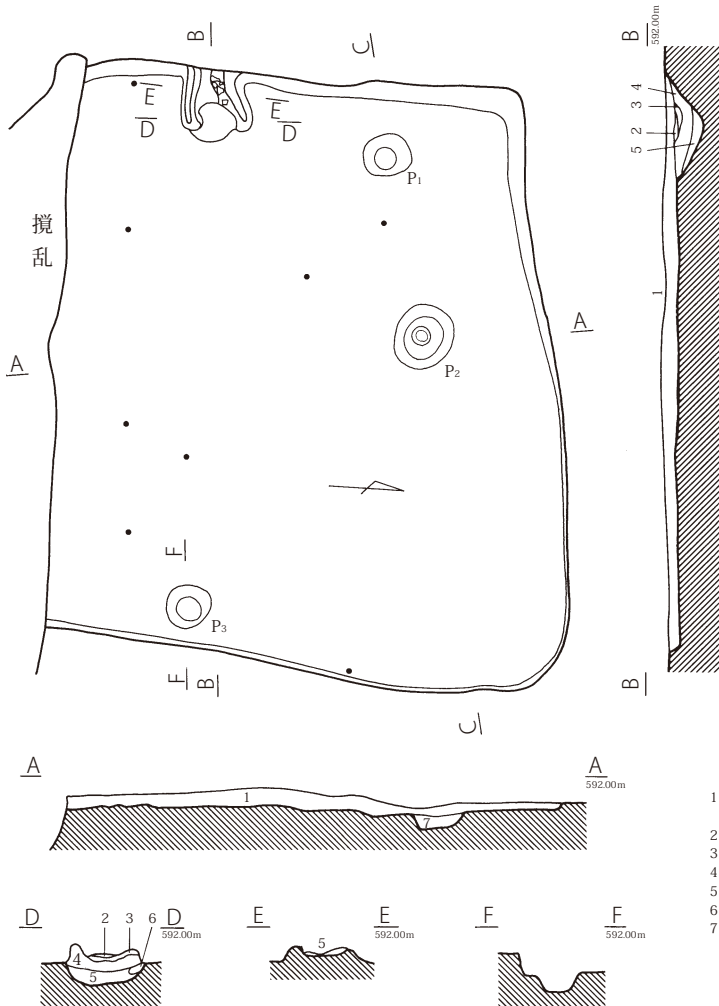
第 32 号住居址



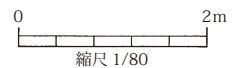
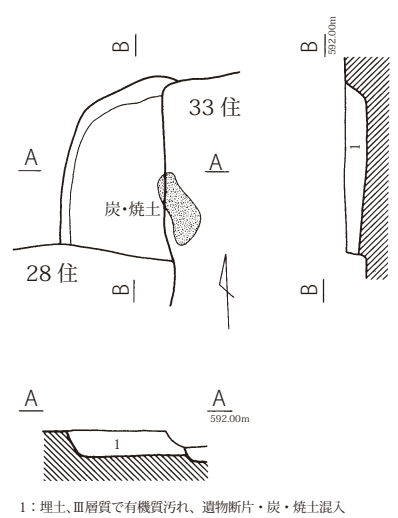
第 37 号住居址



第 33 号住居址

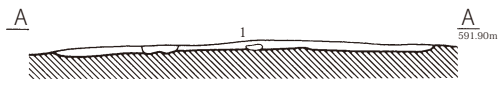
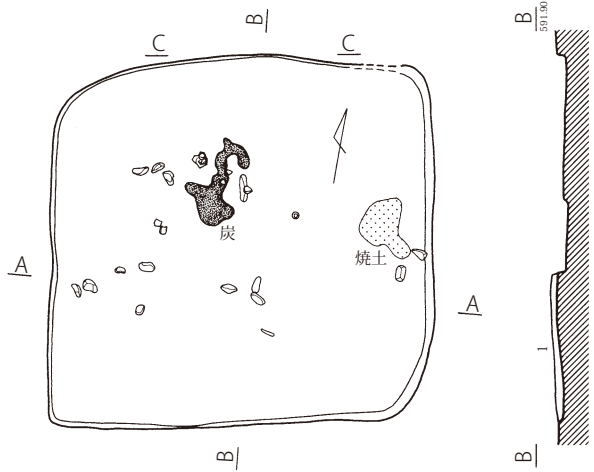


第 36 号住居址



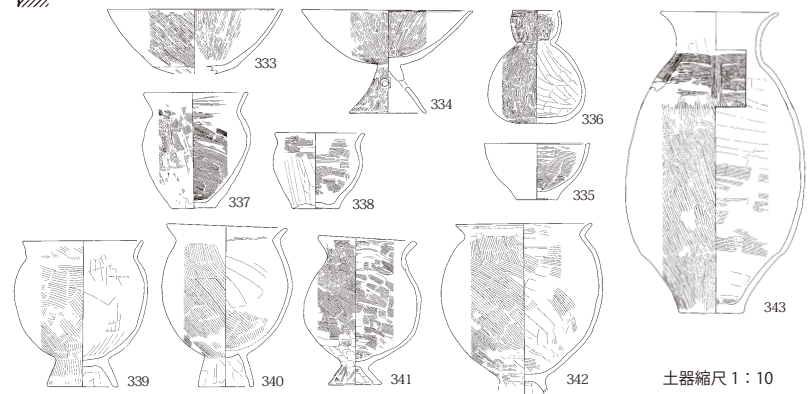
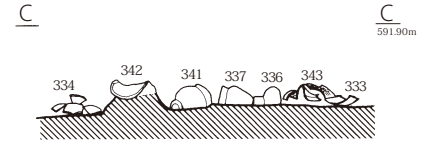
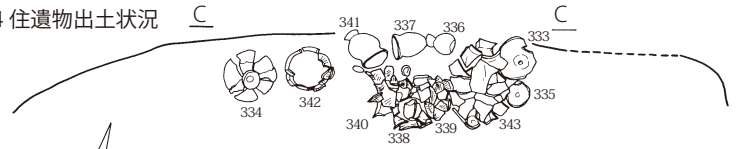
第 13 図 遺構実測図 6 (住居址 6/7)

第 34 号住居址



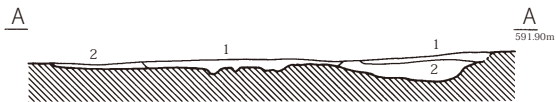
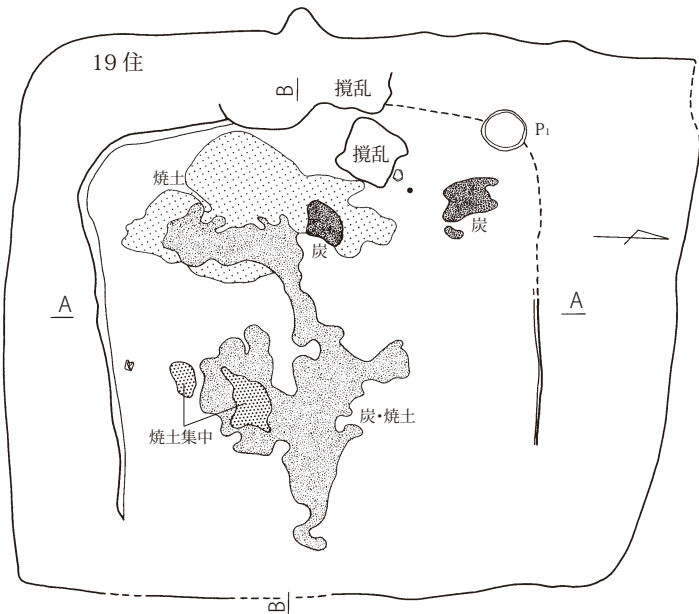
1: 埋土、皿層質で小礫著、汚れ著、炭片少々、焼土粒あり

34 住遺物出土状況

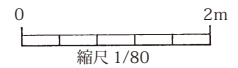


土器縮尺 1:10

第 35 号住居址

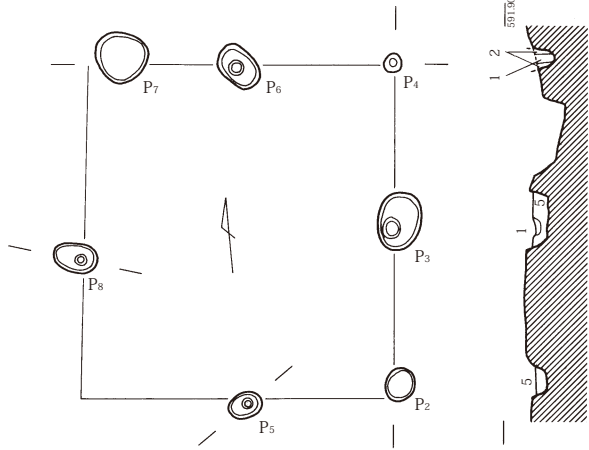


1: 貼床の残骸
1: 貼床上の焼土粒層
2: 床下埋土

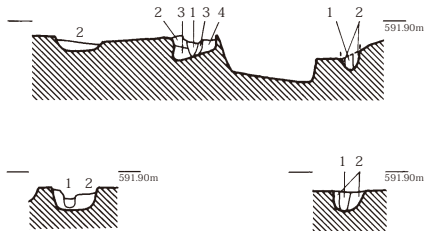
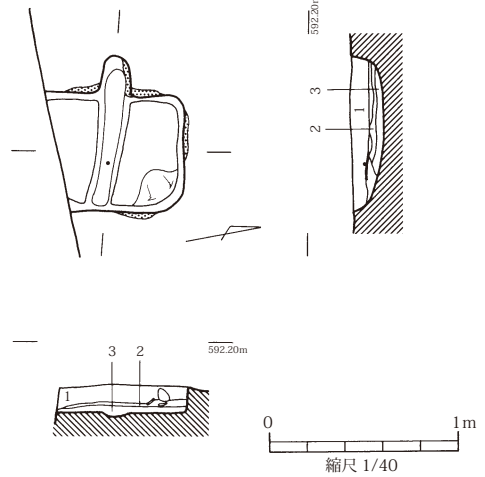


第 14 図 遺構実測図 7 (住居址 7/7)

第1号掘立柱建物址



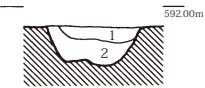
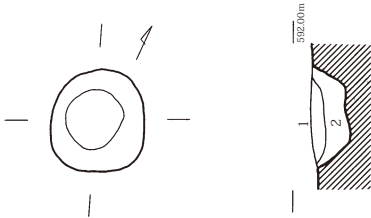
火葬施設



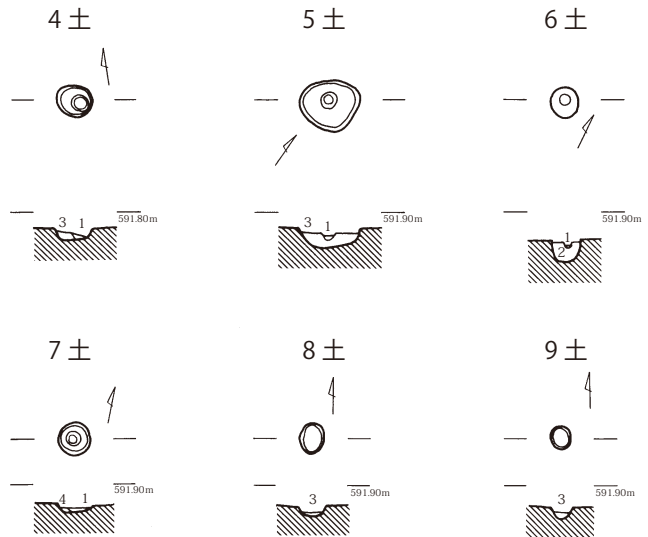
- 1: 柱痕、皿層質、汚著
- 2: 掘方埋土、皿層質
- 3: 掘方埋土、皿層質でIV層に似た黒色粒
- 4: 掘方埋土、シルトと細砂(2溝由来)
- 5: 掘方埋土、皿層ベースでIV層由来シルト混入

- 1: 葬埋土、II層質、炭・骨少量混入
- 2: 大形の炭・骨片
- 3: 小形の炭・骨片

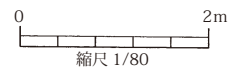
第1号土坑



- 1: 埋土上位、IV層中に構築、埋土もIV層ベース
マンガン沈着著、粘土分(皿層由来)やや多、若干汚れ
- 2: 埋土下位、IV層とはほぼ同じ、有機質汚れ若干あり

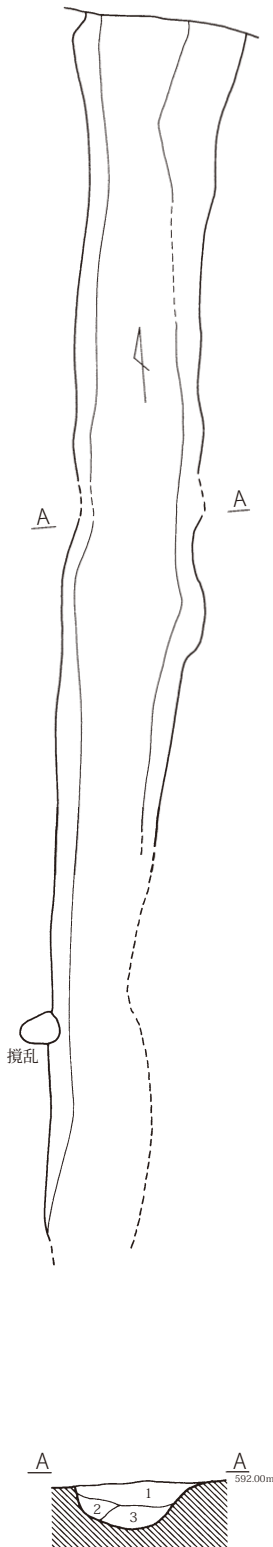


- 1: 柱痕、汚れた皿層質
- 2: 掘方埋土、皿層質でIV層シルト含む
- 3: 掘方埋土、皿層質
- 4: 掘方埋土、IV層質、皿層含む



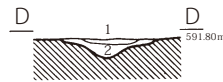
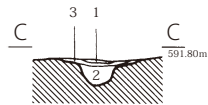
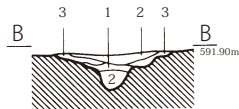
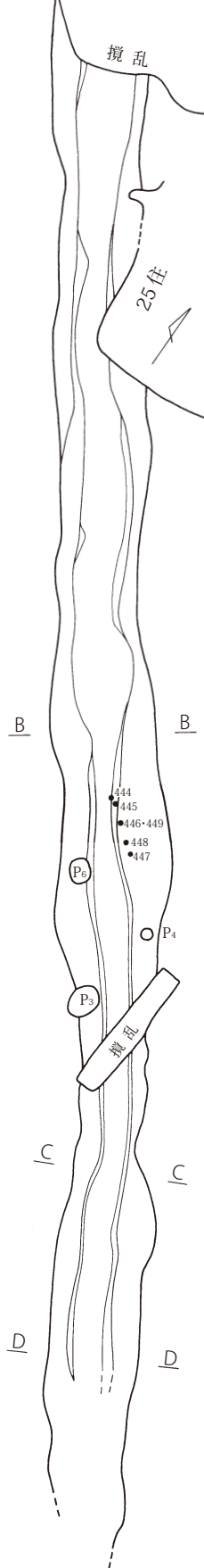
第15図 遺構実測図8 (掘立柱建物址、火葬施設、土坑)

第1号溝址



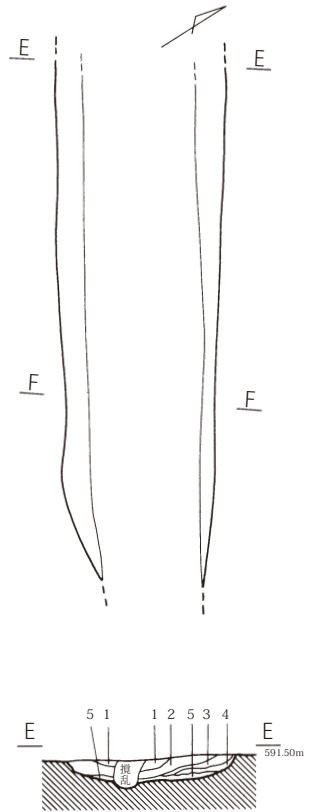
- 1: III層ベースのシルト、黄色強、淘汰良、FeO 沈着
- 2: III層ベースシルトと細砂、マンガン粒 (大粒著)・小礫混
- 3: ややグライ化気味粘土、小礫混、マンガン粒入る

第2号溝址・流路01

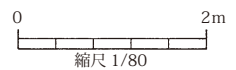


- 1: 中粒砂、礫混、FeO 沈着
- 2: 砂礫層、淘汰ごく悪い急流
- 3: 細粒砂、一時的な緩流

第3号溝址



- 1: 赤味の強い粘土
- 2 右: III層似の粘土、マンガン沈着
- 2 左: III層似の粘土、マンガン沈着少
- 3: III層似で汚れ著粘土、炭片・土器を包含
- 4: 細少・シルト・粘土のブロック層
中砂含む、粘土・シルト主体
- 4: 4層と同一、汚れあり
- 5: 4層と同一で中砂含み、細砂主体
- 6: 5層近似で粘土多、中砂なし



第16図 遺構実測図9 (溝址)

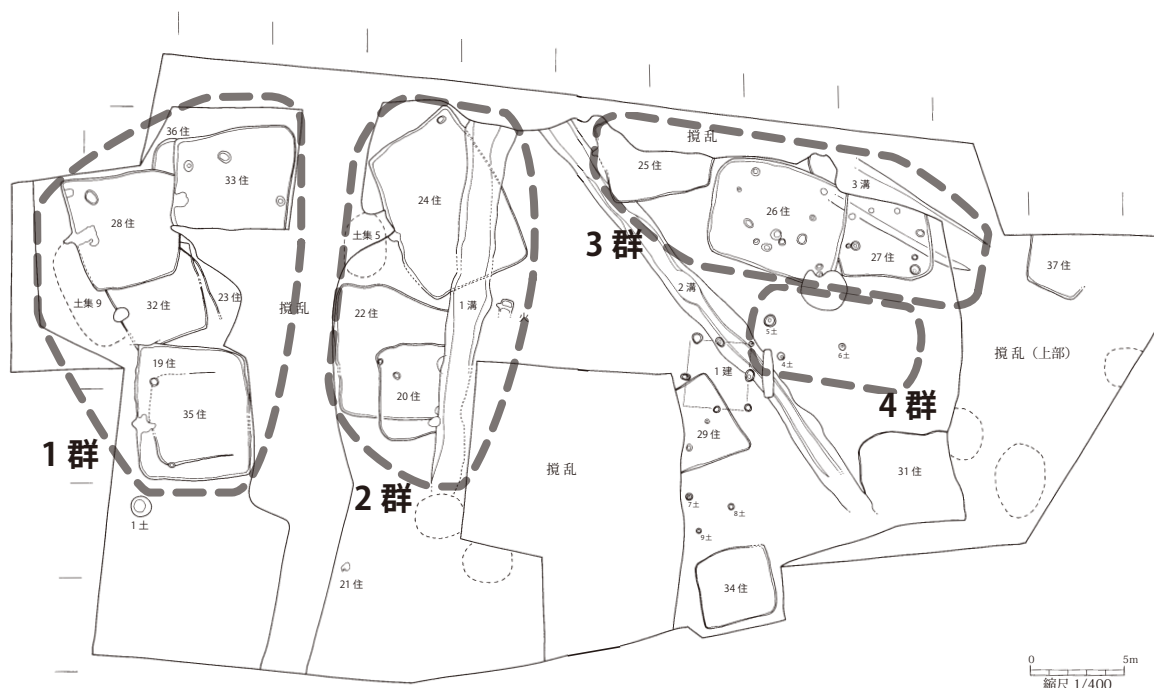
第4節 遺物

1 土器

(1) 提示の方法

本調査では遺物包含層の発達が顕著で、遺構検出作業の際にも一帯の遺物包含層から多量の土器が出土した。また、遺構の重複が著しく、攪乱等による残存状況の悪さもあって、切り合い関係の認定や遺構ラインの確定に難渋したのは第2・3節の記述のとおりである。そのため、遺構内から出土した土器の中には、同じ古墳時代でありながらも型式学的に許容が難しいほどの時期差が認められるものもあり、その由来を重複する遺構や包含層に求めて理解せざるを得なかった。したがって、出土土器の提示は、帰属遺構の時期に添うよう混入品を取り除いて取捨選別するのではなく、時期差が認められるものでも当該遺構出土土器として扱った。また、図示の配列も遺構番号順ではなく、重複し合う遺構・包含層を「群」と捉え、以下のような順序とした。

- ① 1群：調査地西端部で重複する遺構・包含層(19・23・28・32・33・35・36住、土集9、1群検出面)
- ② 2群：調査地中央西寄りで重複する遺構・包含層(20・22・24住、1溝、土集5、2群検出面)
- ③ 3群：調査地東側北部で重複する遺構・包含層(25・26・27住、3溝、3群検出面)
- ④ 単独遺構：21・29・34・31・37住、2溝、土集2・3・6
- ⑤ 4群：2溝・流路01北側、3群遺構の南側に広がっていた包含層
- ⑥ その他の検出面、試掘等



第17図 出土土器提示のための群範囲

(2) 種別、器種・器形

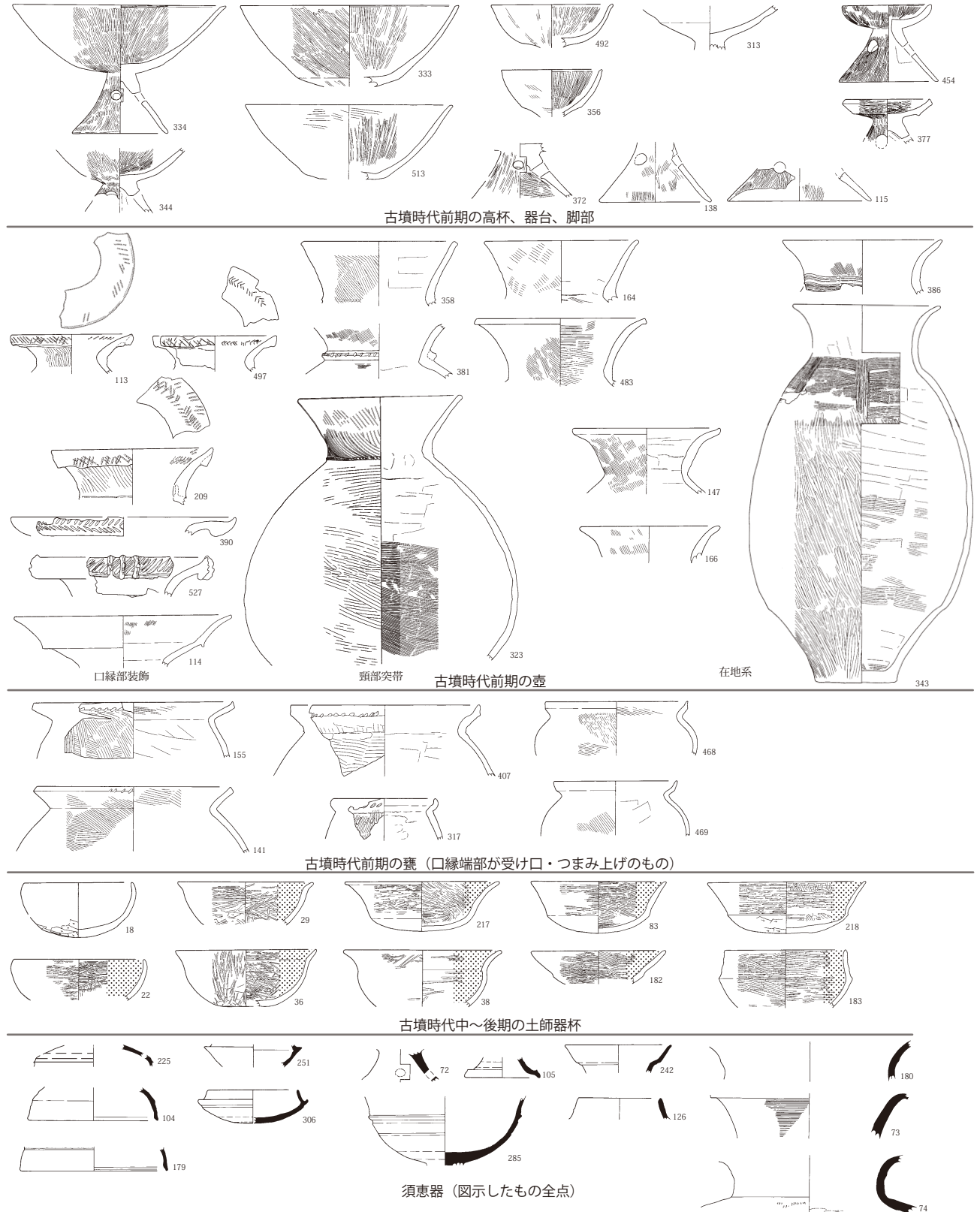
時期的には古墳時代前期から後期にかけての土器がほとんどであるが、わずかに弥生時代と平安時代に属する土器・陶器が伴っている、弥生土器の識別は紋様の有無や外形に対する判断に拠っている。

古墳時代前期の土器は、種別はすべて土師器で、器種・器形には高杯形土器(以下「形土器」は省略する。)、器台、鉢、壺・ヒサゴ壺、手焙り、甕・台付甕、甌がみられる。いずれも全形を知り得るものは少ない。高杯は杯部の大きいもの(333・334・344)と小形のもの(356)がある。壺は口縁部に着目すると加飾が行われるもの(113・209・390・497・527)と単純口縁のものがある。甕・台付甕は底部や脚部を欠くと両者の識別はむずかしい。口縁部に着目すると、口縁端部が受け口・つまみ上げ(141・155・317・407等)などで変化するものと単純に収ま

るものがある。

古墳時代中期の土器は、種別はすべて土師器で、器種・器形には高杯、杯、壺、甕がみられる。高杯は柱脚を持つ4段成形のもの(264~268・461等)、壺は口縁部上段が上方に立ち上がる二重口縁のもの(298~300)、甕は全形を知り得るものはないが口頸部は「く」の字で胴部が卵形になる(301)。

古墳時代後期の土器は、種別に土師器と須恵器がある。器種器形は、土師器では高杯、杯、甕、甗、須恵器で



第 18 図 土器の主要な器種・器形概略

は高杯、杯身・杯蓋、甕、甕がみられる。土師器杯は口縁部形態で数種に分類できる(第18図)。甕は長胴形を呈すものが多い(273・280・282・283・303・304)。内面に黒色処置を行った黒色土器Aまたは内黒土師器と呼ばれる杯類も多く伴う。

(3) 土器群

時期的なまとまりをよく示しているものを含んだ土器群をとりあげる。

19住出土土器群(第19・20図1～74:古墳時代後期)

古墳時代後期の土師器杯と甕を多数図化できている。杯はいずれも底部が丸底気味で、口縁部がわずかに内湾しながら立ち上がるもの(15～23・25)と、短めに外反するもの(27・29～38)の二者があり、後者には深めものが多い。前者はほぼ半数、後者はほとんどが内面黒色処理をされている。甕は全形を捉えたものはないが、みな器面調整は粗い工具ナデやナデで、器肉は厚い。外形は44・52～54などが長胴形になるのではないかと推定するが、50・58・59などを見ると、まだ卵形に近いものもある。甕片を4点図化できている(67～70)。71も甕の可能性がある。39・40は器面調整からみると甕類に近いが器種不明としておく。古墳時代前期の高杯(6)、壺(60)、甕(66)と平安時代の杯(13・14)が混じっている。11・12も古墳時代前期の高杯の脚部かもしれない。須恵器は高杯(72)、甕(73・74)が図化できた。72の高杯は脚部破片だが、円孔を有す。

22住出土土器群(第22・23図181～212:古墳時代前期)

古墳時代前期の土器がまとまった資料で、壺(209)、手焙り(184・185)、甕(186～195・206・208)、台付甕(196～205・207)がある。また、同後期の土師器杯を3点(181～183)図示したが、いずれもピット内の出土で、遺構の項で述べたように本址上部の20住(古墳時代後期)の掘り残し施設に伴っていたものであろう。

26住出土土器群(第24図264～286:古墳時代後期)

古墳時代後期の土師器甕のまとまった資料が出土している(273・274・276・277・279・280～283)。いずれも長胴形を呈し273・277・280・282は全形を知り得る。杯(269)、甕(272)、埴(271)が伴っている。5点の高杯(264～268)はまとまった資料ではあるが、従来からの年代観では古墳時代中期にいくぶん遡るもので、前述の器種に伴うとするより本址に切られる27住に由来する可能性を考えたい。270・275は古墳時代前期、286は弥生時代中期中葉に属するものであろう。須恵器は無蓋高杯の杯部が出土している(285)。脚の接合部には3本の長方形透かしの痕跡が残る。

27住出土土器群(第25図287～306:古墳時代中・後期)

土師器の壺と甕にまとまった資料があるが、両者の間には時間差が認められる。壺(298～300)は3点ともに口縁部上段が屈曲して立ち上がる外形をとる。298は口縁部と頸部周辺しか図示できなかったが、胴部も大小破片が多量に出土しており、復元するとおそらく胴部直径が50cmを超える大形品になる。いずれも古墳時代中期に属すると考える。甕(302～304)は長胴形で古墳時代後期に属すと考えられ、先の壺に伴うものとするのはむずかしい。301の甕に限って古墳時代中期に遡らせるのも可能であろう。高杯も9点(287～295)を図示しているが、287～293は古墳時代中期、295は同後期に属する。本章3節の遺構で述べたとおり、本址と26住の切り合いのラインに不確実な点があるため、本址出土品ではあるが古墳時代後期のものは26住の土器群に関連付けて捉えたい。須恵器は杯身が1点あり(306)、古墳時代後期に属する。

28住出土土器群(第20・21図81～105:古墳時代後期)

古墳時代後期の土師器杯を多数図化できている(83～93)。いずれも丸底気味の底部と体部の境界に稜を持ち、そこから口縁部が外反しながら開く形態をとる。すべて内面が黒色処理されている。土師器の甕は長胴形を呈す(95・97)。96・99・100も長胴甕の一部と考える。101は胴張り甕、102は甕の可能性がある。また、古墳時代前・中期のものがわずかに混じっている(81・98・103)。106は焼成の悪い破片で、時期の特定ができない。須恵器は2点が図化できた。杯蓋(104)と高杯脚部(105)で、105には縦長の透かしの痕跡がある。

29住出土土器群(第26図326～329:古墳時代前期)

出土量は少ないが、他遺構との重複に影響されていない古墳時代前期の資料である。壺(326・327)と甕

(328・329)があり、329は炉に正位で埋設されていた炉体土器である。

34住出土土器群(第26・27図333～349:古墳時代前期)

333～343の11点は本址北壁際からまとめて出土した一括品、他は床面上から散発的に出土した。一括品は、高杯(333・334)、鉢(335)、壺(343)、ヒサゴ壺(336)、甕(337・338)、台付甕(339～342)で構成される。高杯333は脚部すべて、台付甕342が脚部の一部を欠損する他は、ほぼ完形品である。343の壺頸部下には櫛描紋によるT字紋が施文されている。349は弥生時代中期後半の壺の頸部である。

2溝出土土器群(第27・28図365～443:古墳時代前期)

下層から多量の土器が出土し79点を図示できた。すべて土師器で、器種器形は高杯(365～376・378・382)、器台(377)、鉢(379)、壺(381・384～394)、甕(396・398～418)、台付甕(419～443)、甗(395)、手焙り(380)など多種に及ぶ。ただし全形が分かるものは379の鉢1点しかない。高杯は杯部が残るものは365・382のみで他はすべて脚部だが、器台の脚部と区別できていない。壺は単純口縁(384・386)、加飾がある口縁(390～392)、ヒサゴ壺(385・389)など多様である。386の頸部には櫛描簾状紋があり、甕とするべきかもしれない。甕には口縁端部が単純に外反外開するもの(403・404・410～414)と受け口や摘み上げのもの(402・407～409)が見られる。台付甕は台部が確認できたもののみ甕から分離したが、前記の甕の中にも台付甕の口縁部が含まれていると思われる。台部下端が内側に折り返し状に小さく肥厚するもの(433～436)と単純に収まるもの(437～439・441～443など)が見られる。弥生時代中期中葉に遡る甕の大形破片(397)が1点混じっている。

2溝(流路01)上部出土品(第28図444～450:古墳時代前～中期)

遺構の記述で触れたとおり、2溝上部の流路01が埋没した後に意図的に残されたような出土状況を示した土器群である。柱状脚の高杯脚部(444・446)、円錐脚の高杯脚部(445)、小型丸底壺の口縁部(447)、二重口縁壺の口縁部(449)、台付甕(450)、丸底の甕と思われる底部(448)の7点を図化できたのみだが2溝下層出土遺物との時期的な対比において注目される。

3溝出土土器群(第25・26図309～323:古墳時代前期)

底面近くから土師器が多数出土し15点を図示できた。全形を知り得るものはないが、層位的にまとまった良好な資料である。高杯(309～313)、壺(322・323)、甕(314～317)、台付甕(318・321)がある。甕は欠損した底部の形態が不明なため甕と扱ったが、台付甕が含まれていると思われる。壺323は底部周辺を欠くが口縁部から頸部、胴部にかけての外形がよく分る。頸部にはキザミを伴った微弱な突帯が巡る。

4群一括出土品(第29図482～489:古墳時代前・中期)

明確な遺構は把握できなかったが、4群の中でも偶然に埋没・包含されたとは思えない、まとまった出土状況を示した地点があり、それらからの出土品を提示した。地点間の関連は不明である。壺(482・483)、甕(484～488)、台付甕(489)がある。壺482は頸部にキザミを持った太い突帯が付され、口縁部は外面に折り返し状に肥厚させて、口縁端部の面には横線が巡る、あまり類例を見ないものである。

2 土製品(第31図、第4表)

円筒埴輪らしきもの、ミニチュア、紡錘車、土錘、丸玉がある。円筒埴輪らしきものは中小破片数点が27住覆土から出土した。タガの破片もある。3点を図示したが、付近に古墳らしき遺構はなく、円筒埴輪ではない可能性もある。ミニチュアは4点あり、4と5は19住、6と7は3溝から出土した。5は欠損部が多く全形は不明で、ミニチュアではなく他種の土製品かもしれない。紡錘車は調査地北側包含層から出土したもので、ほぼ半分を欠く。直径に比して厚みが薄い。土錘2点はいずれも19住から出土しており、9は全形が分かる。上半部に貫通孔を有す。丸玉は35住出土。

3 金属製品(第32図、第3表)

21点が出土しているが、器種が特定できるものは少ない。火葬施設から出土した宋銭3枚、1溝からの天保

通宝1枚の他は、かろうじて19住から出土した刀子らしきもの(1)、1土からの鉄鏃状のもの(11)が器種を推定できるだけである。全点を第3表に示したが、上部からの攪乱で紛れ込んだ新しいものも混じっている。

4 石器・石製品(第33・34図、第5表)

今回の調査で回収された石器・石製品は総数223点である。そのうち自然石等と判断したもの(42点)を除く181点が広義の石器になる。定型的な石器・石製品と石核・原石は68点あり、その内訳は、石鏃3点、石錐1点、小形刃器5点、磨製石斧(未成品含む)6点、大形刃器3点、磨・敲石5点、砥石2点、編み物用錘14点、装飾品類14点、石核10点、原石4点、不明1点がある。このうち遺存状態の良いものを中心に、35点図化し、概要を述べる。それ以外のものは一覧表を参照されたい。この他に剥片・礫片がそれぞれ103点・1点出土したが、紙面都合上詳細は割愛した。石器・石製品の8割近くは古墳時代の住居跡の覆土から出土しているが、打製石器などは弥生時代の混入品と考えられる。

石鏃(1~3) 1・2は、黒曜石製の有茎平基鏃である。3は、無茎平基あるいは尖基鏃に分類できる。調整加工が少なく、尖頭部の作出が粗雑であることから、未成品である可能性がある。

石錐(4) 4は、黒曜石製で、平面形が逆三角形の石錐である。錐部先端の稜線が摩滅し、一定方向の線状痕が観察できる。摩滅から、錐部の最大幅は4.6mmであると推定できる。

小形刃器(5~9) 刃部の角度により細分類し、急斜度(概ね60度以上)のものを搔器、緩斜度(概ね60度未満)を削器とした。いずれも黒曜石製である。4は、縦長剥片を素材にし、側縁に両面から調整された刃部をもつ。5は、末端側に腹面(主要剥離面)からの加撃により、片刃で急斜度の刃部が作出される。7・9は、打面側にそれぞれ両面、片面加工の刃部をもつ。8は、縦長剥片を素材にし、両側縁に両面加工の刃部がみられる。

磨製石斧(10~13) 図示したものは未成品と考えられる。いずれも刃部を作出しようとする意図がみられ、製作途中のものであろう。比較的小さく、偏平もしくは柱状をしており、大陸系の片刃石斧の未成品と推測される。10は、全面に研磨痕がみられ、片面胴部には溝状線状痕が観察される。砥石からの(砥石への)転用か。11は、基部の片面に、製作途中の穿孔と思われるものがみられる。刃部は、研磨が施されていないが、剥離により片刃状の調整されているようにみえる。12は、3個体に割れて出土した。片面胴部に研磨痕と敲打痕が、片側面の一部に研磨痕がみられる。

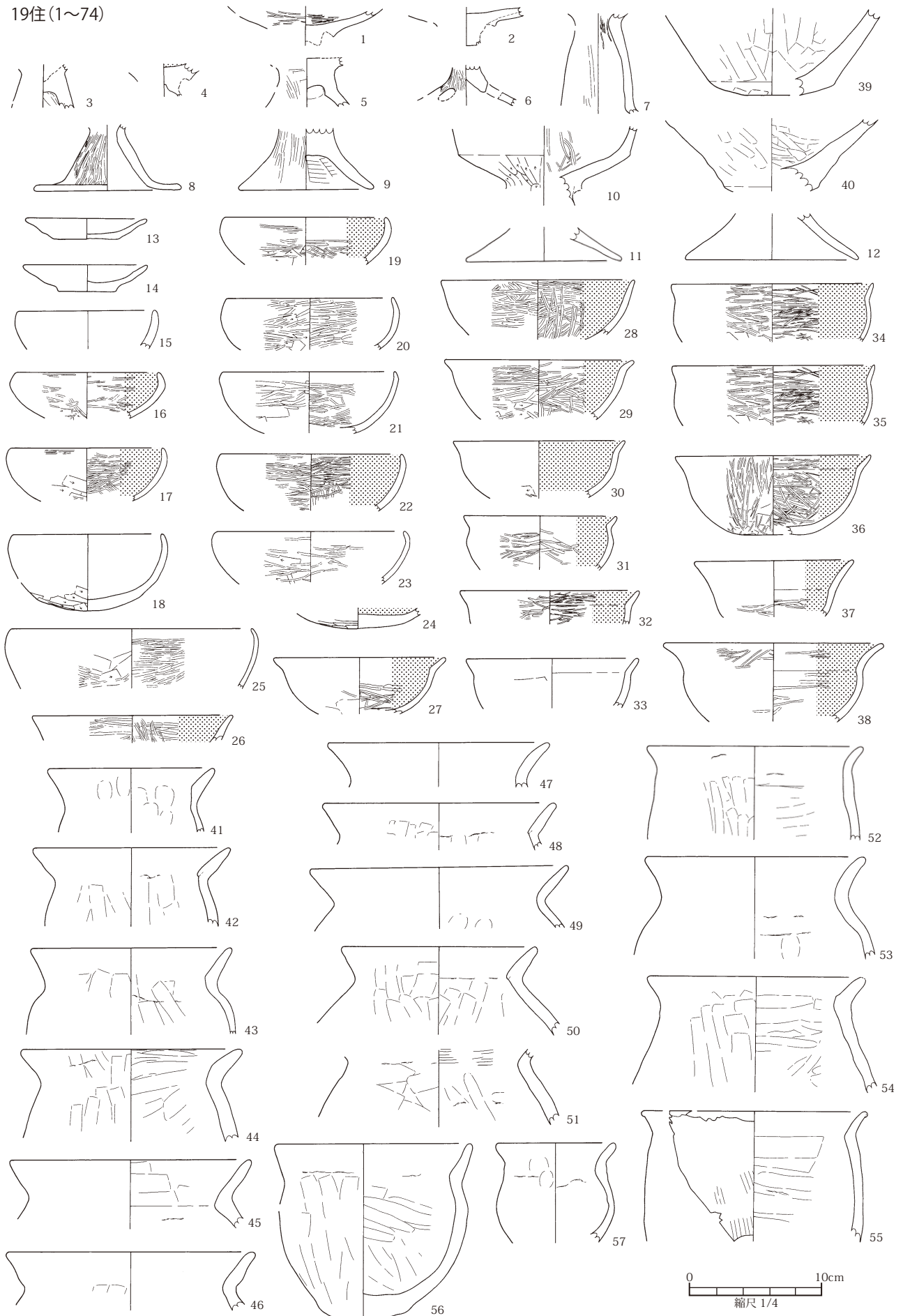
大形刃器(14~16) 14は、刃部の使用痕から機能の推定が困難であるが、摩滅している刃部の幅から「切る」行為が想定されるため、横刃形石器の類と推定される。15は、刃部の摩滅が断片的にみられ、「切る」というよりは「摘む」行為が考えられるので、打製石包丁の可能性もある。3側縁に渡り刃部調整がみられる。16は、表面に弱い研磨痕が観察されることから、磨製石包丁の未成品とも考えられる。刃部の調整は比較的粗雑で、使用痕は確認できなかった。

磨・敲石(17~19) 17は、扁平な礫を素材にした敲石で、一端部に敲打による剥離がみられる。18は、直方体の磨石である。摩耗は比較的弱い。19は、棒状の礫を素材にした敲石で、一端部に連続した敲打によるツブレがみられる。

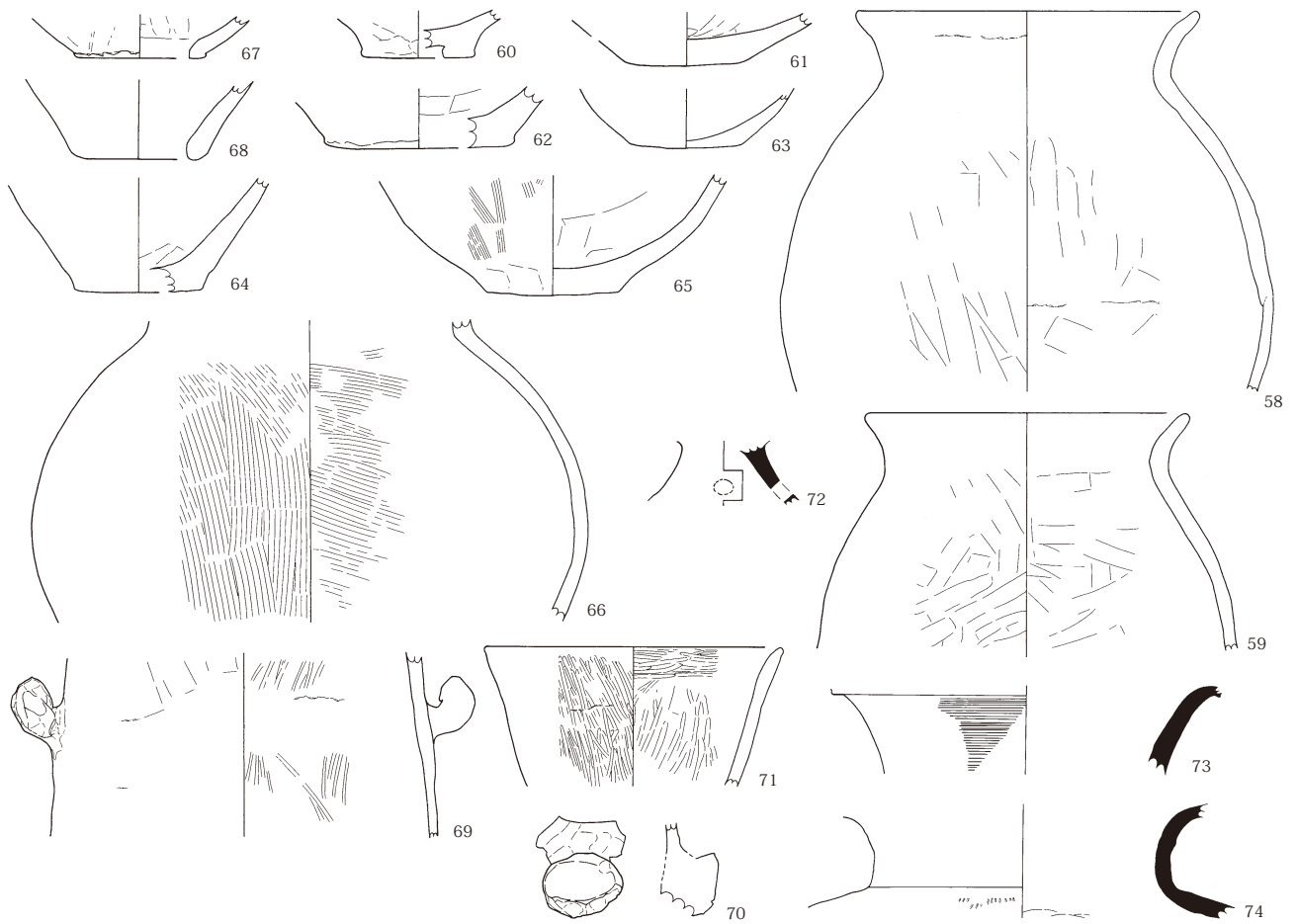
砥石(20・21) 20は、砥面が4面にみられ、いずれも使用により内湾している。石質とサイズから、手持ちの仕上げ砥石と考えられる。21は、片面にのみ砥面がみられる。もう片面は1回の加撃による剥離によって自然面が失われており、欠損の可能性も考えられる。

装飾品類(22~35) 合計14点出土した。内訳は、白玉9点(22~25・28・31~34)、管玉1点(26)、勾玉2点(29・30)、不明2点(27・35)。孔部の特徴から、両面から穿孔されたもの(22・24・26・30)と片面からのみ穿孔されたもの(23・25・28・29・31~35)がある。また、孔径2.5mm前後のもの(22・25・26・29・39)と、孔径1.4mm前後のもの(23・24・28・31~33)に分けられる。27は、破損品で全体形は不明である。33・34は、接合関係にある。35は、両面が平らに研磨され、側面にも弱い研磨痕が観察される。また、片側辺に半欠の孔部がみえる。穿孔の際に破損し、再加工が施されたものだろうか。

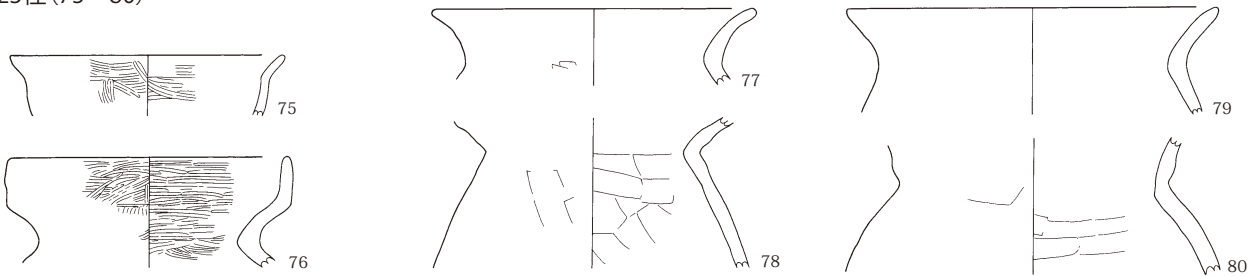
19住(1~74)



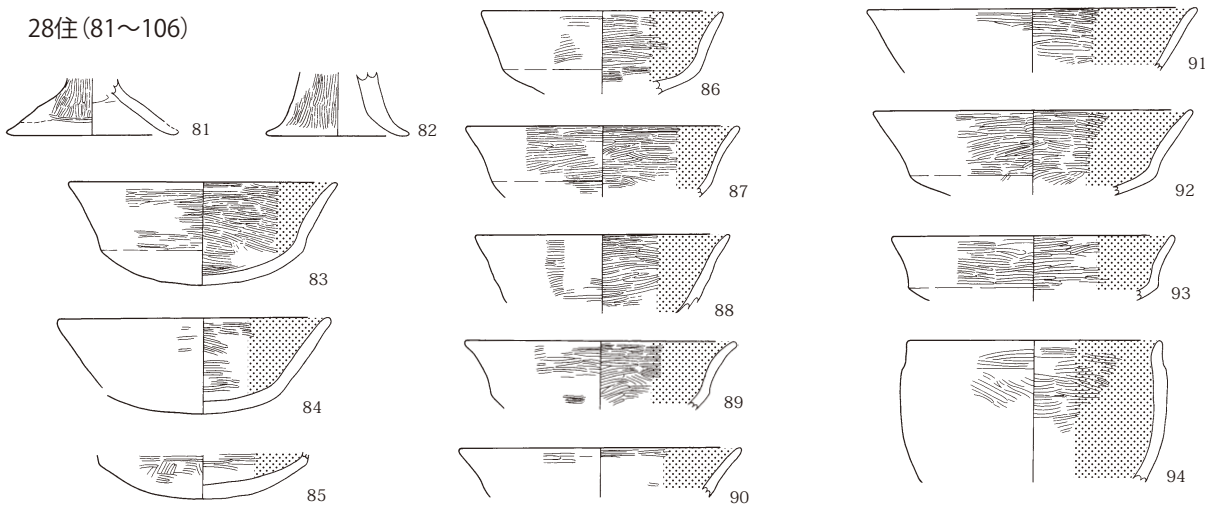
第19図 土器実測図 (1/12)



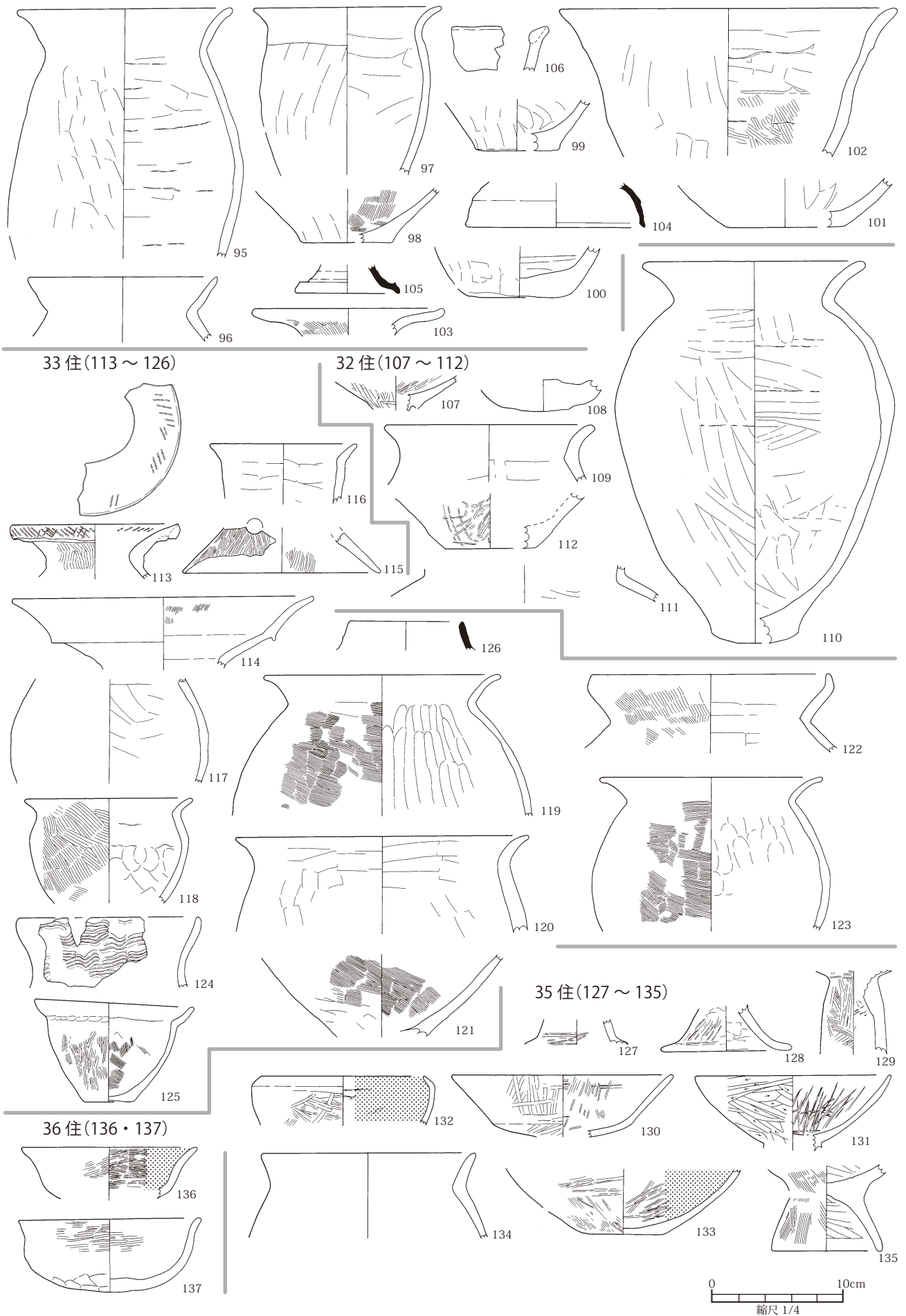
23住 (75~80)



28住 (81~106)

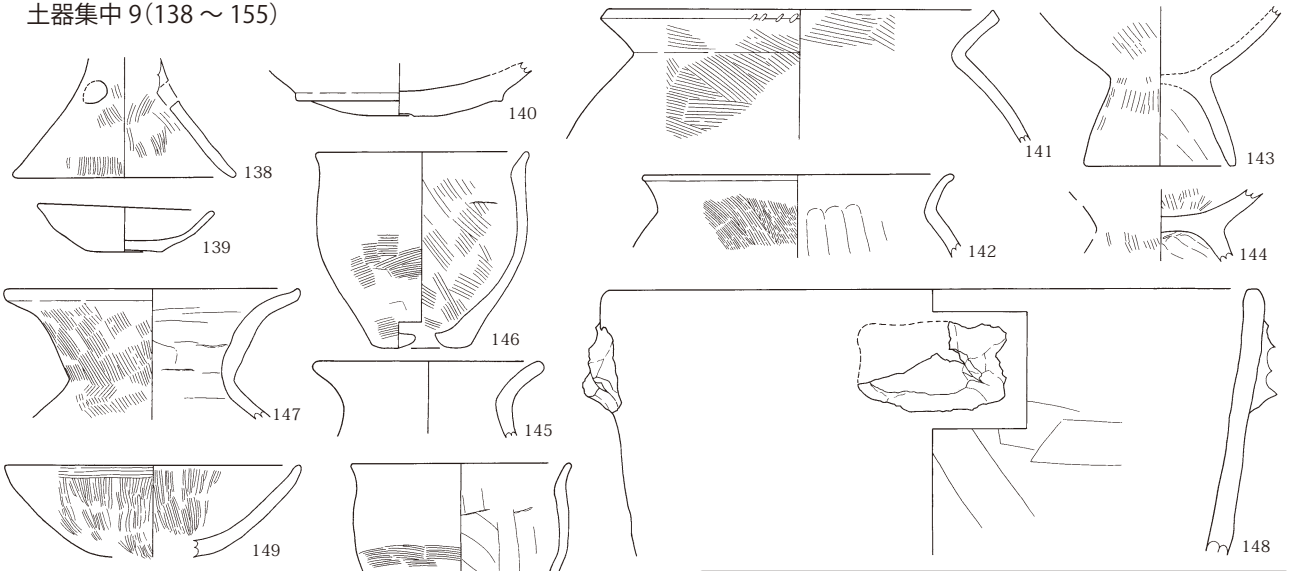


第 20 図 土器実測図 (2/12)

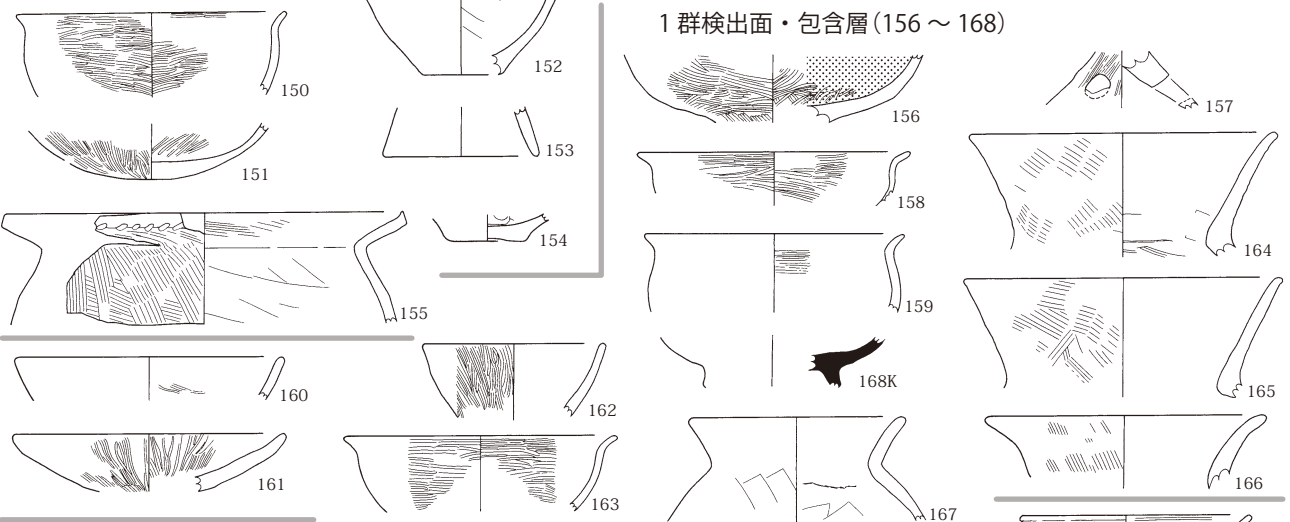


第 21 図 土器実測図 (3/12)

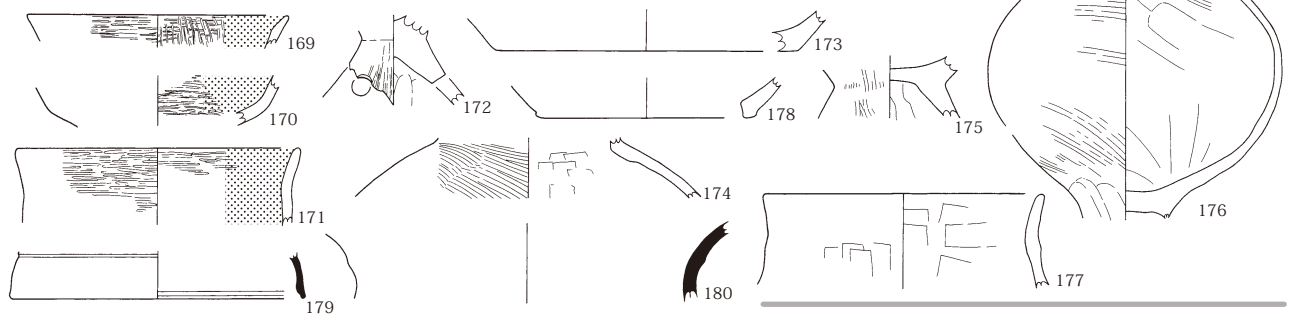
土器集中9(138~155)



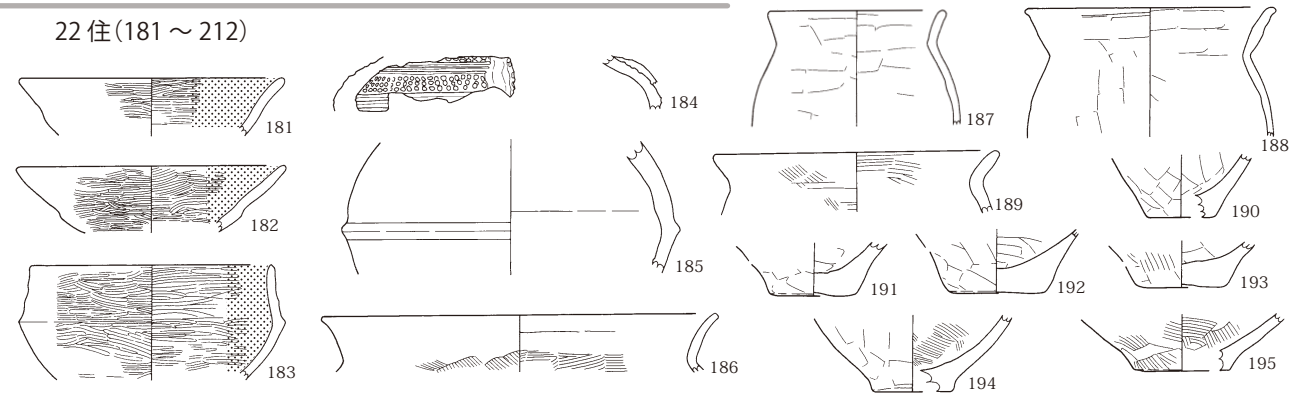
1群検出面・包含層(156~168)



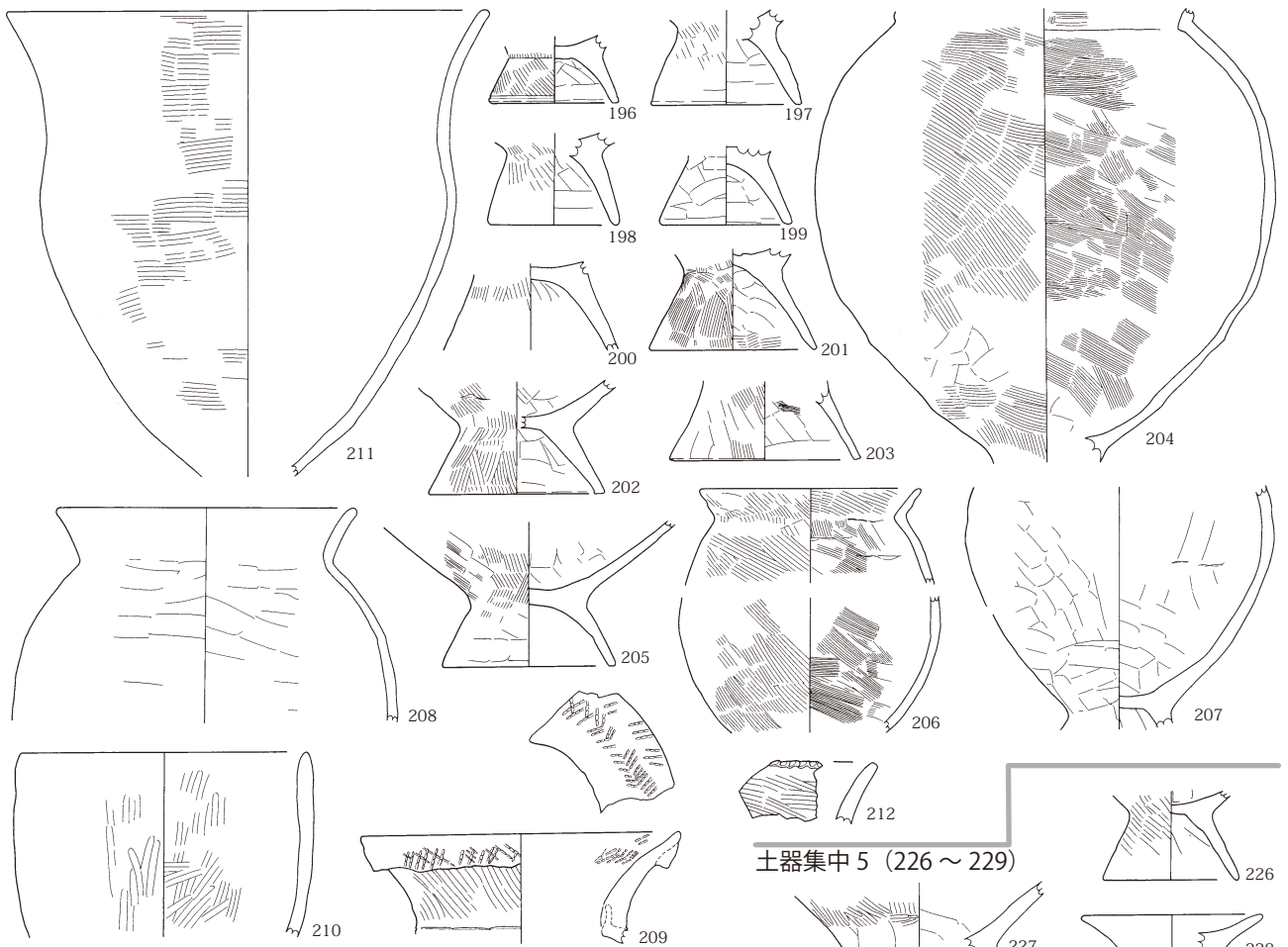
20住(169~180)



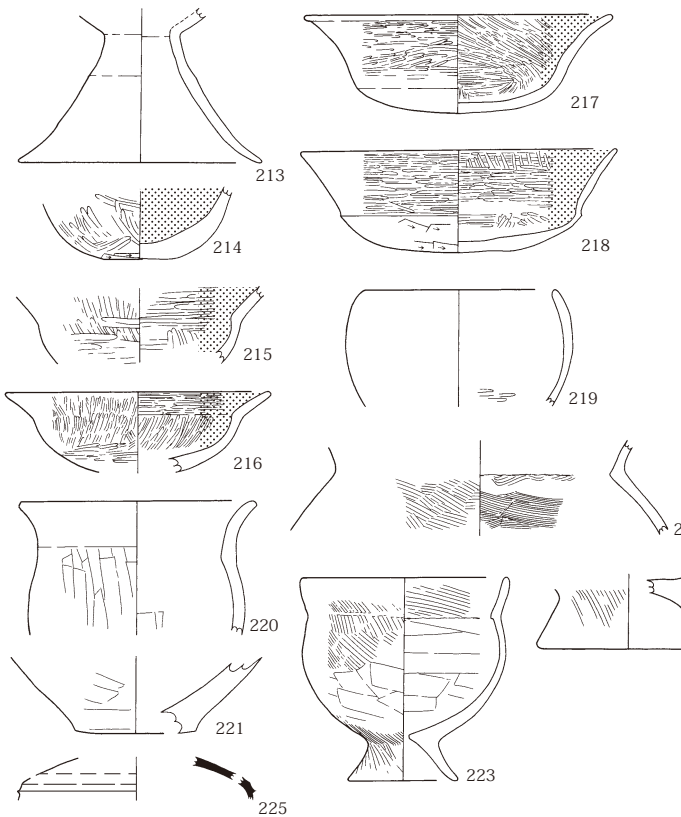
22住(181~212)



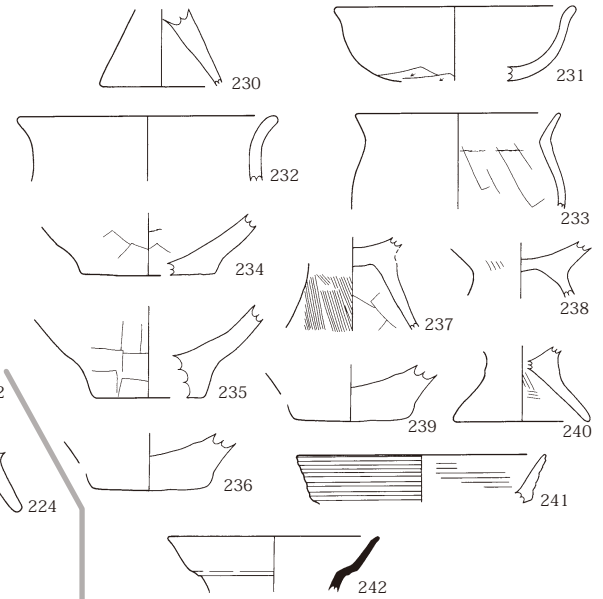
第22図 土器実測図 (4/12)



24 住 (213 ~ 225)

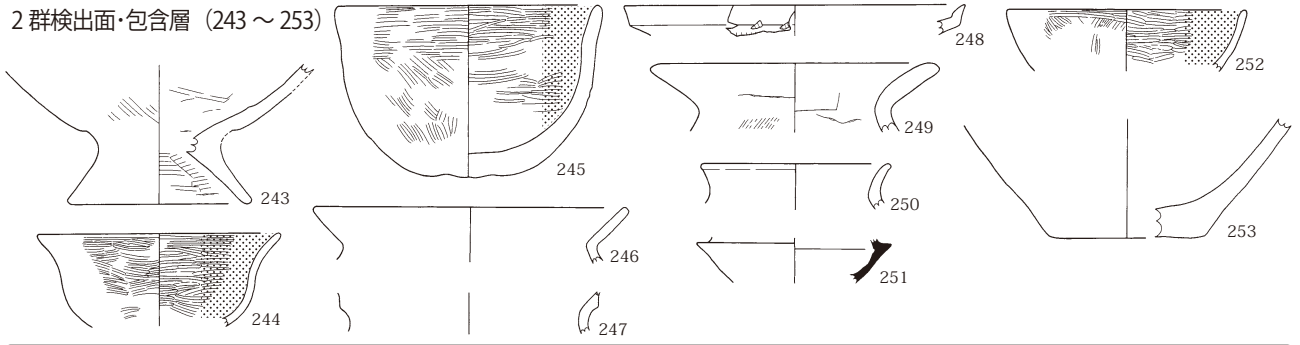


1 溝 (230 ~ 242)

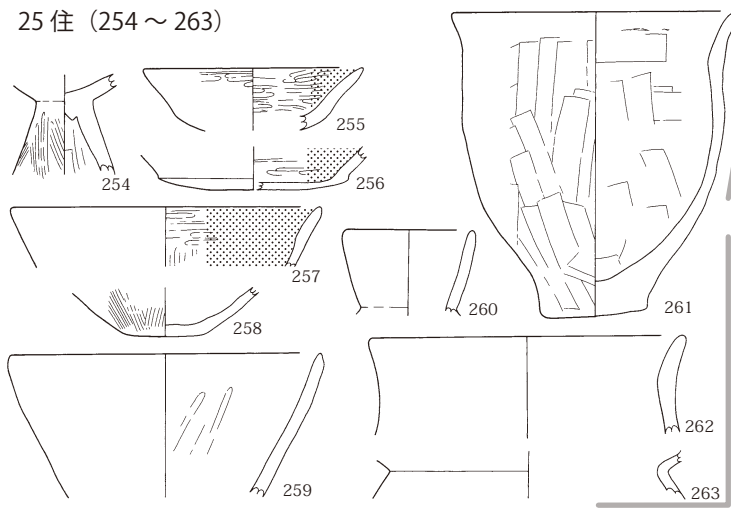


第 23 図 土器実測図 (5/12)

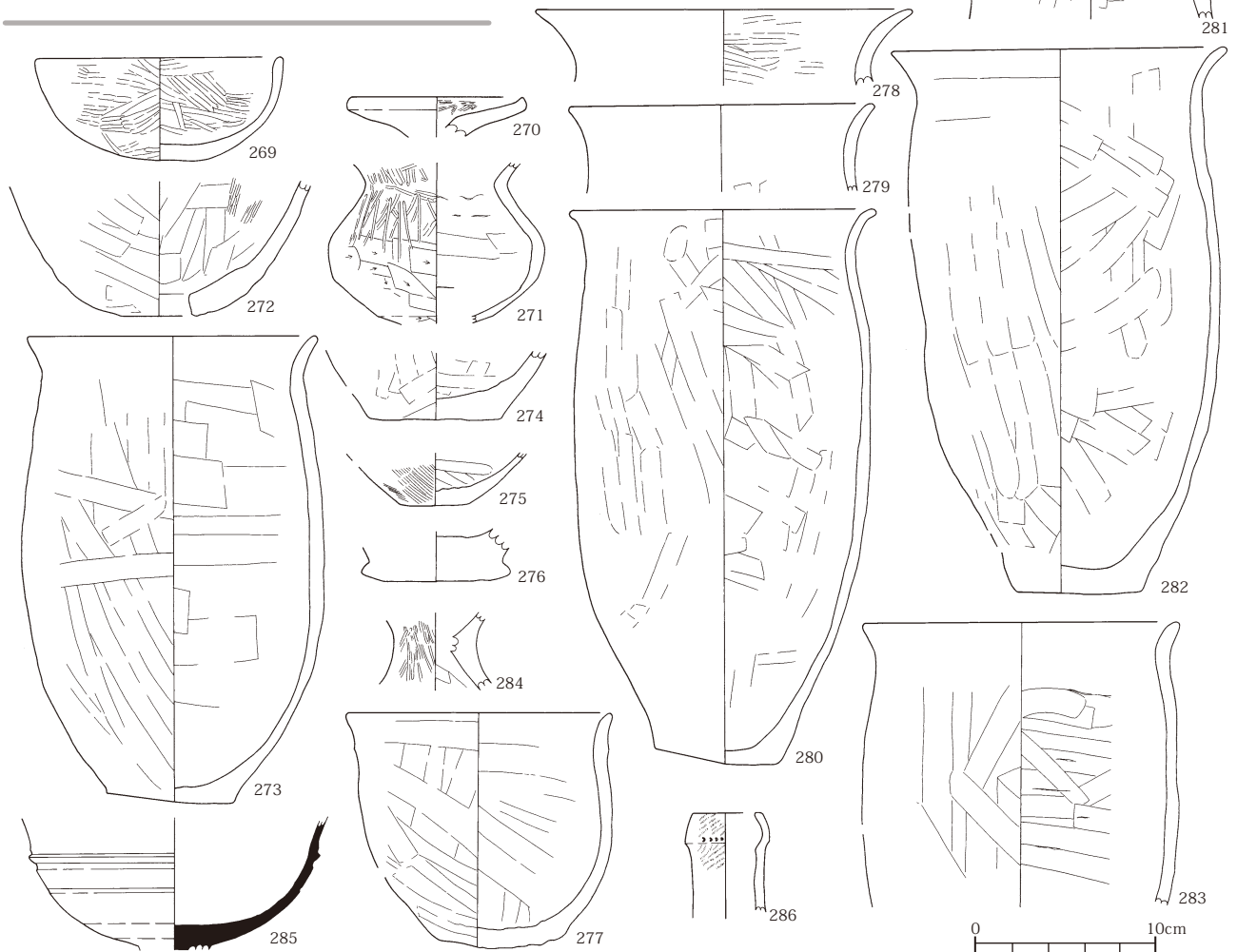
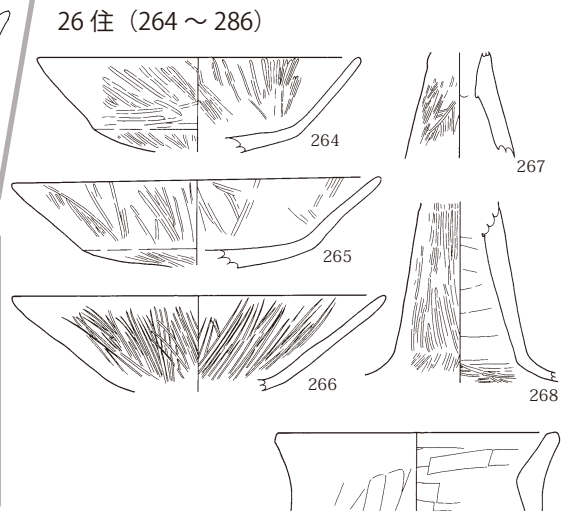
2群検出面・包含層 (243 ~ 253)



25住 (254 ~ 263)

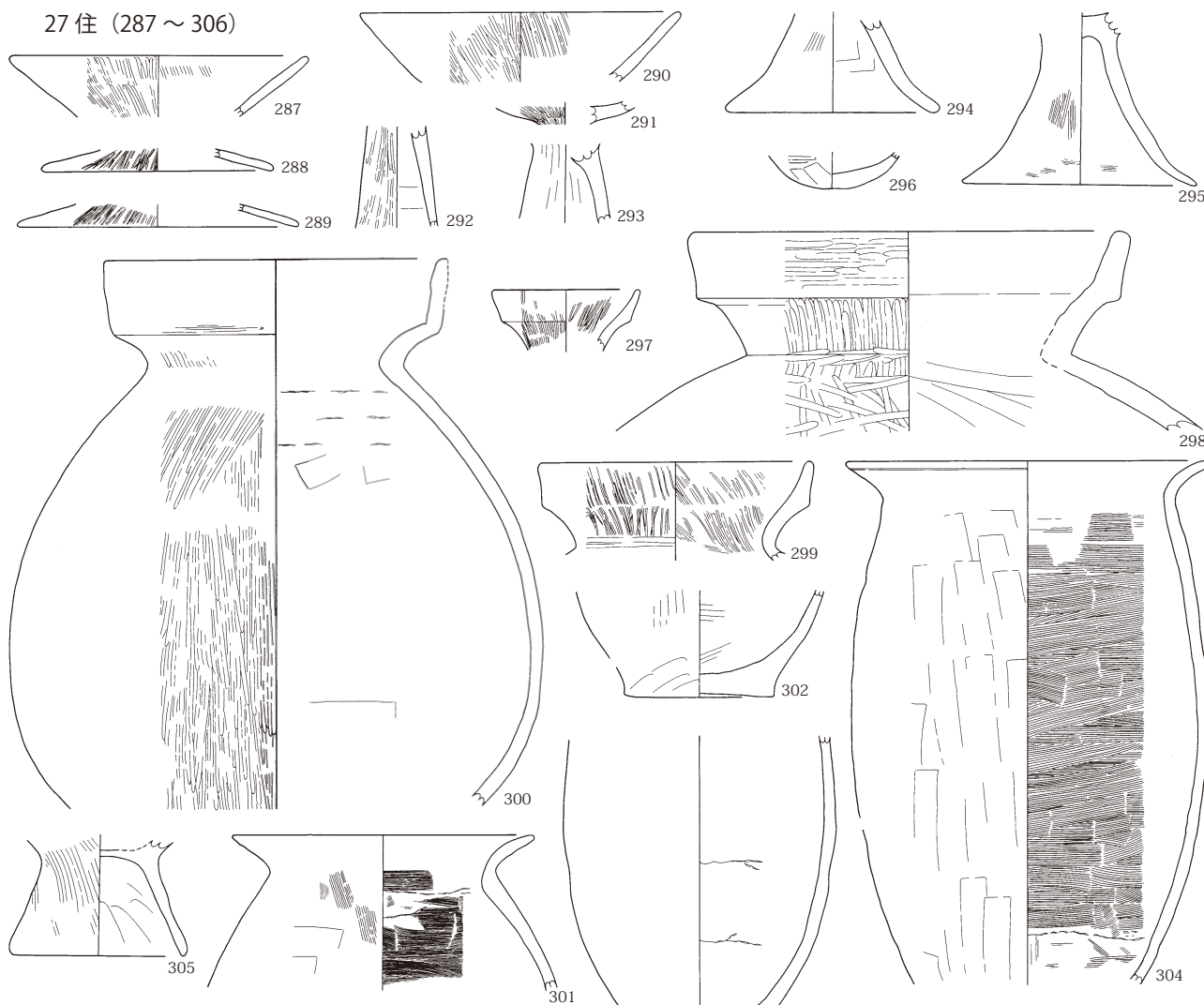


26住 (264 ~ 286)

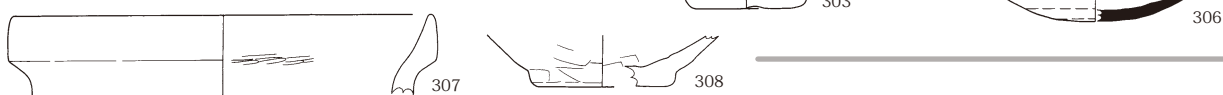


第24図 土器実測図 (6/12)

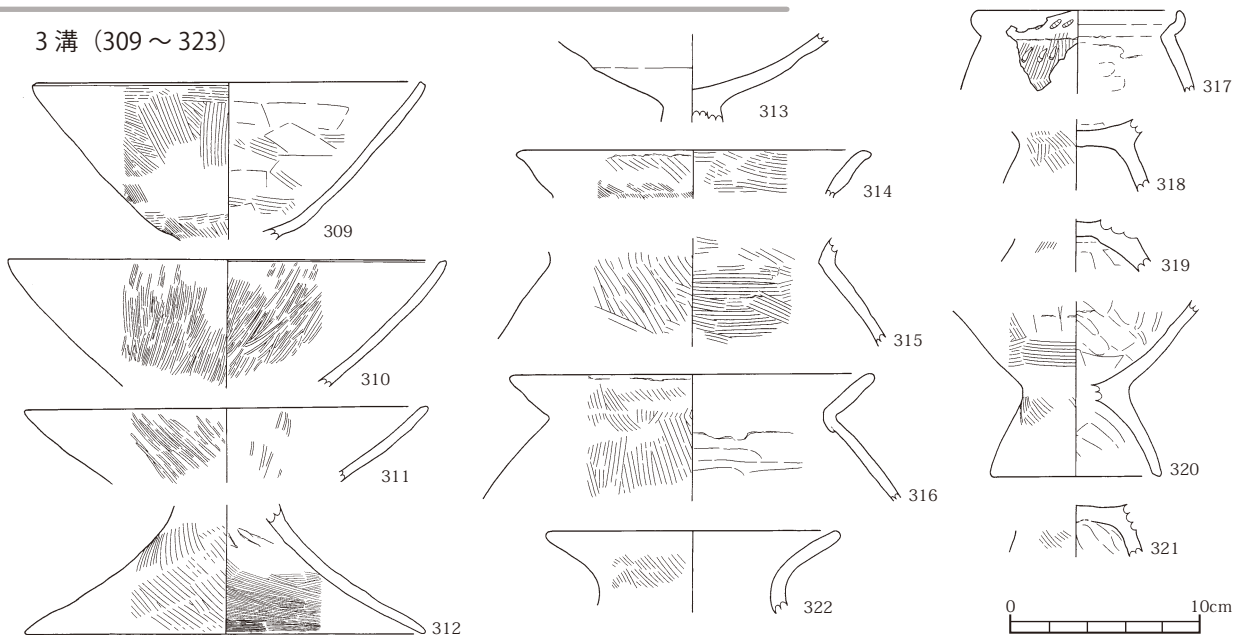
27住 (287~306)



3群検出面・包含層 (307・308)

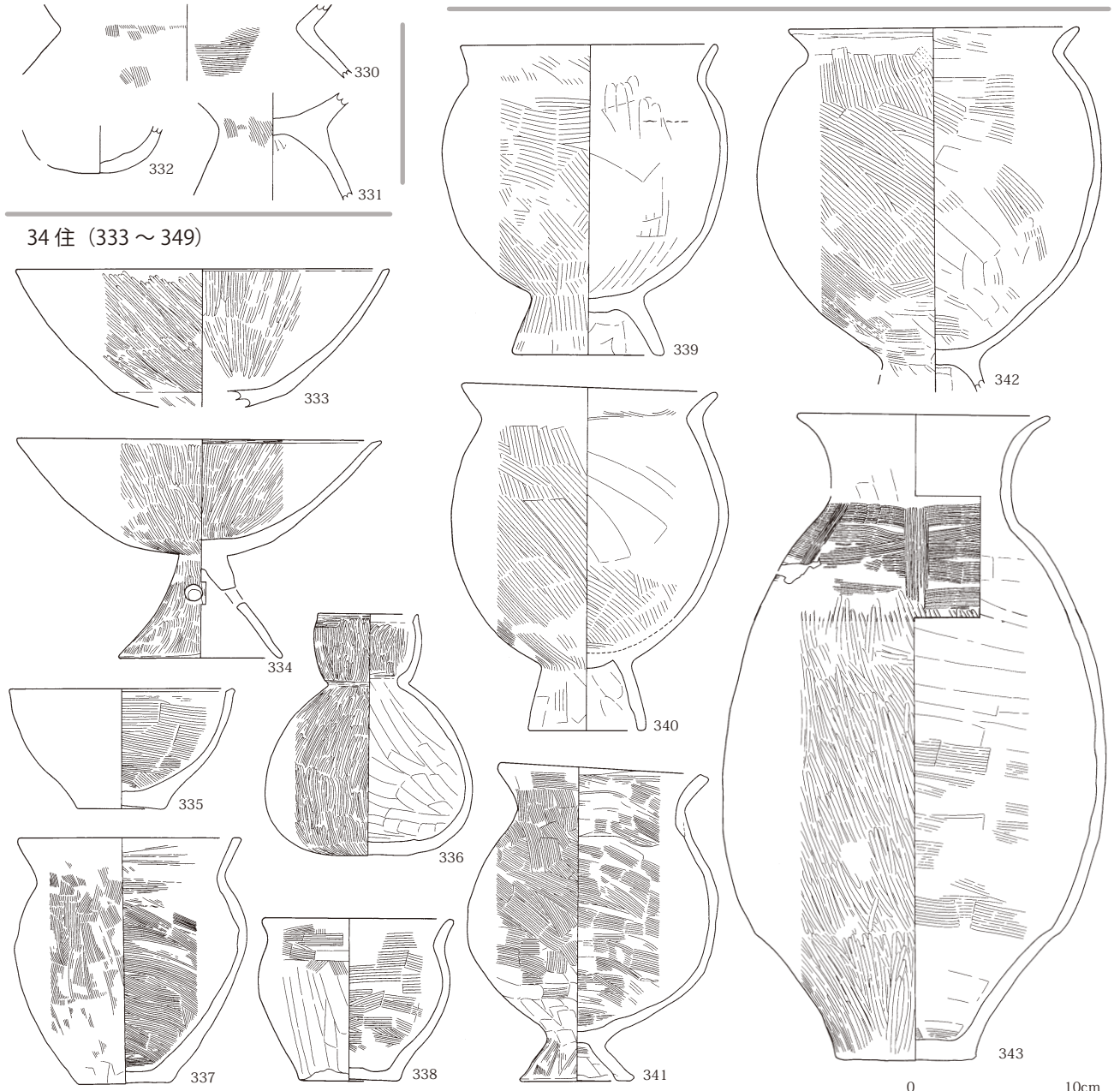
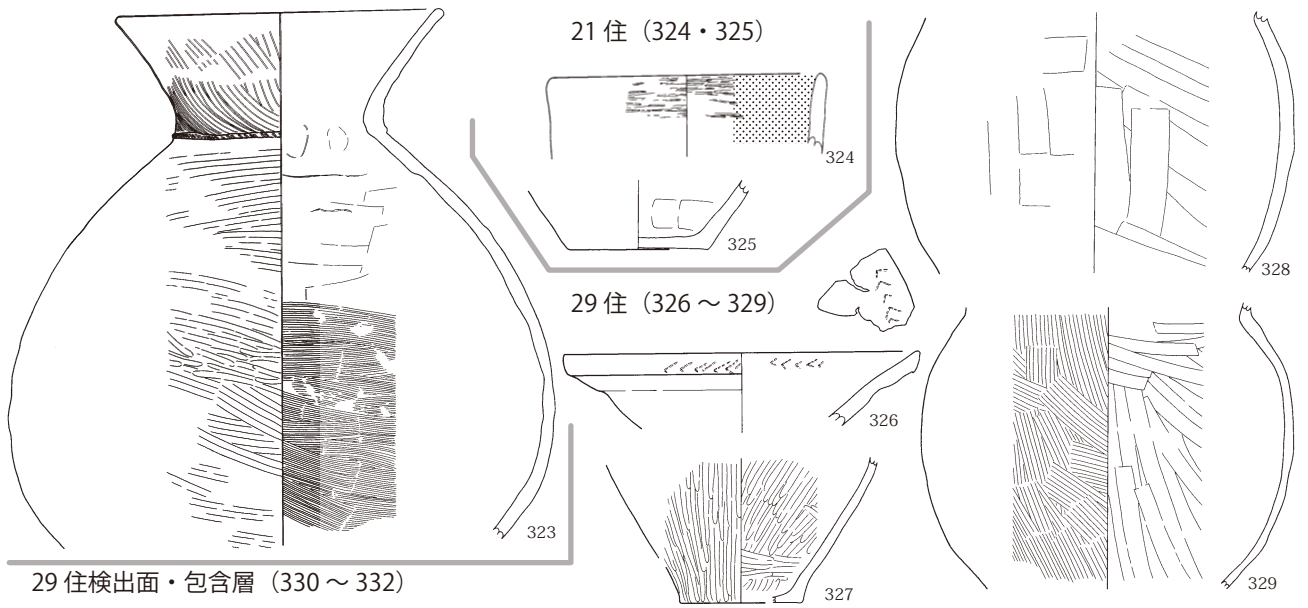


3溝 (309~323)

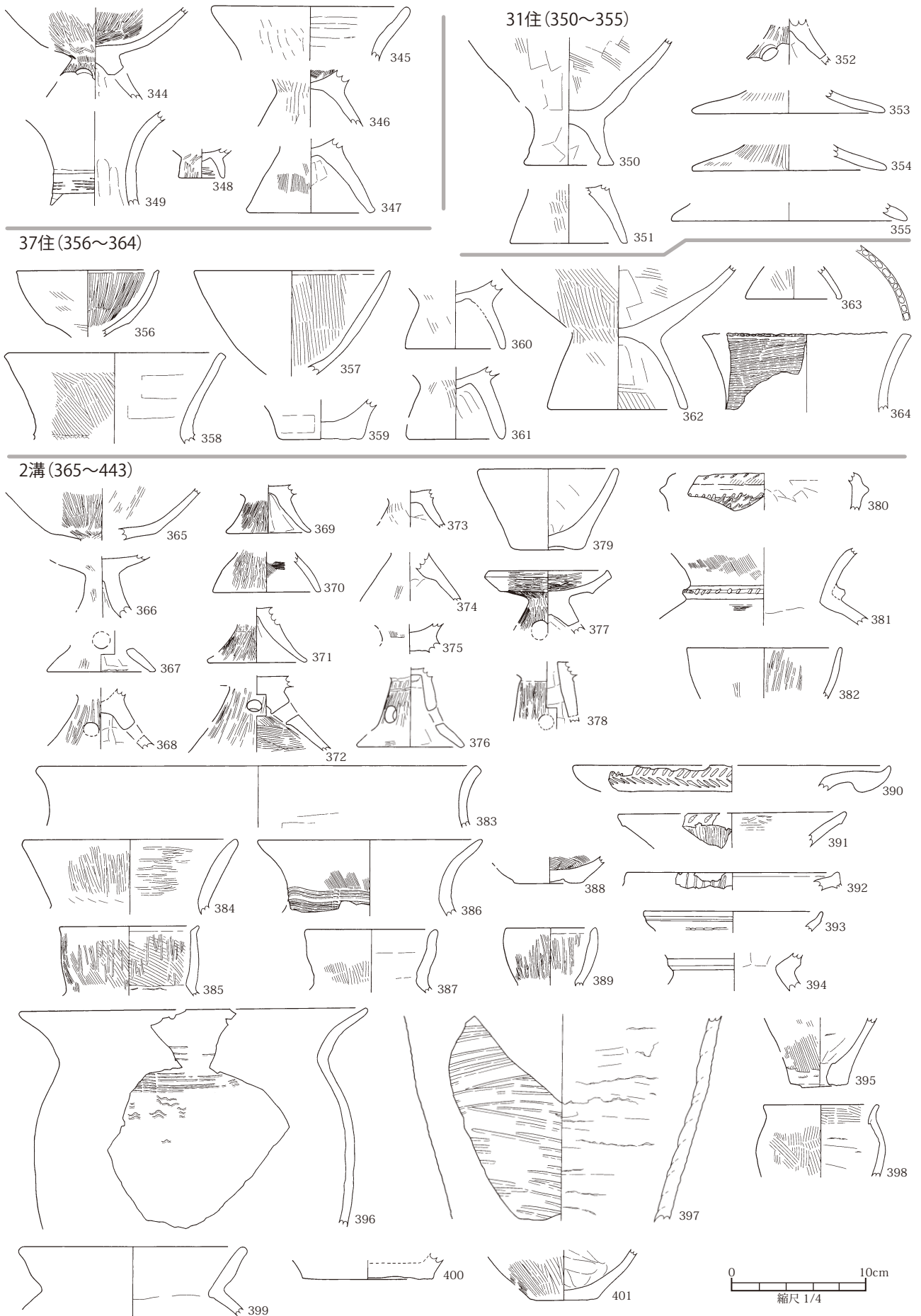


0 10cm
縮尺 1/4

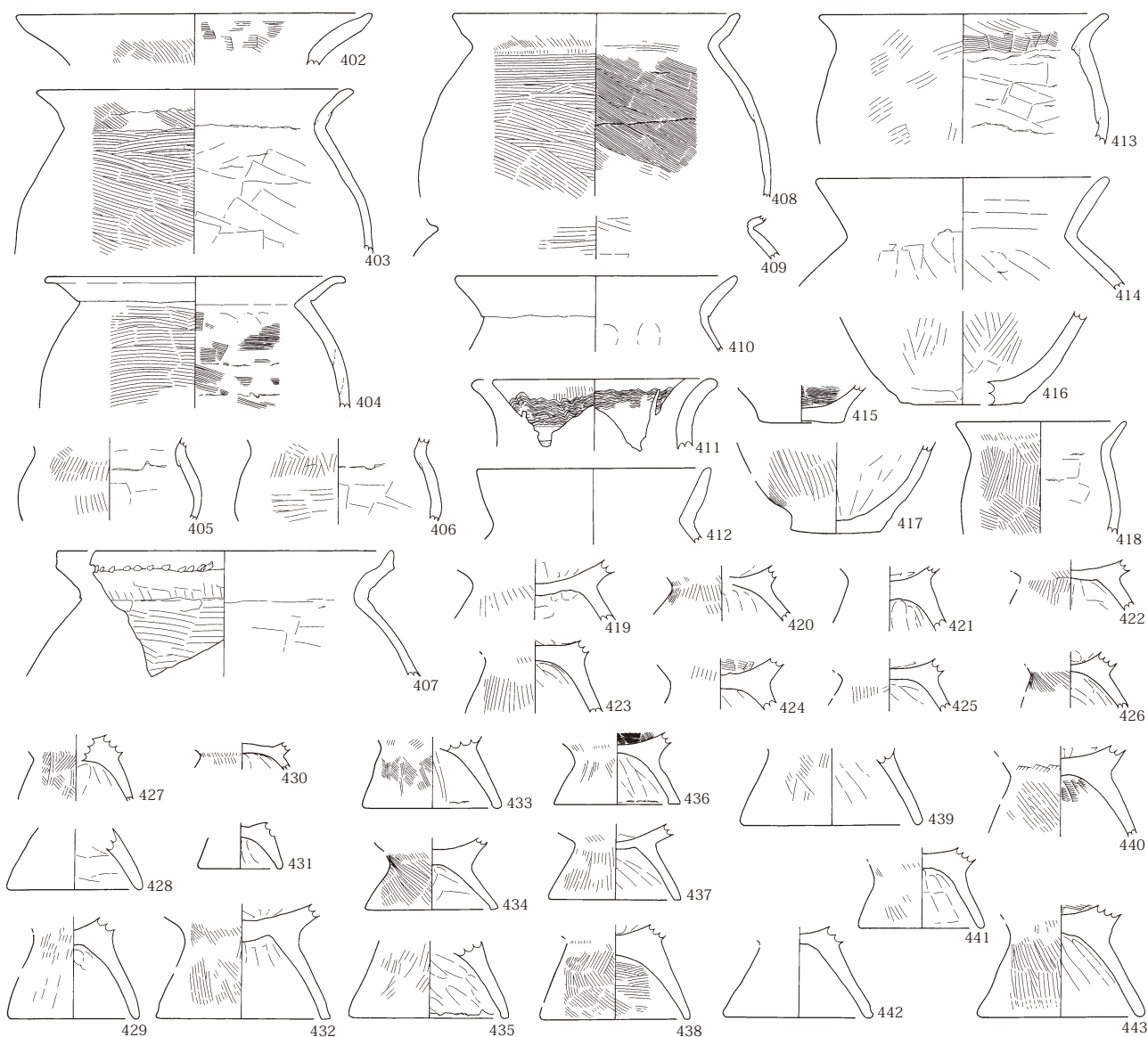
第25図 土器実測図 (7/12)



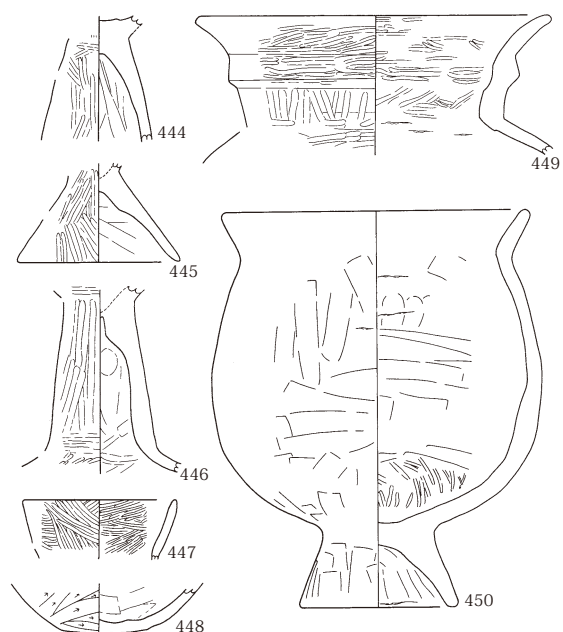
第 26 図 土器実測図 (8/12)



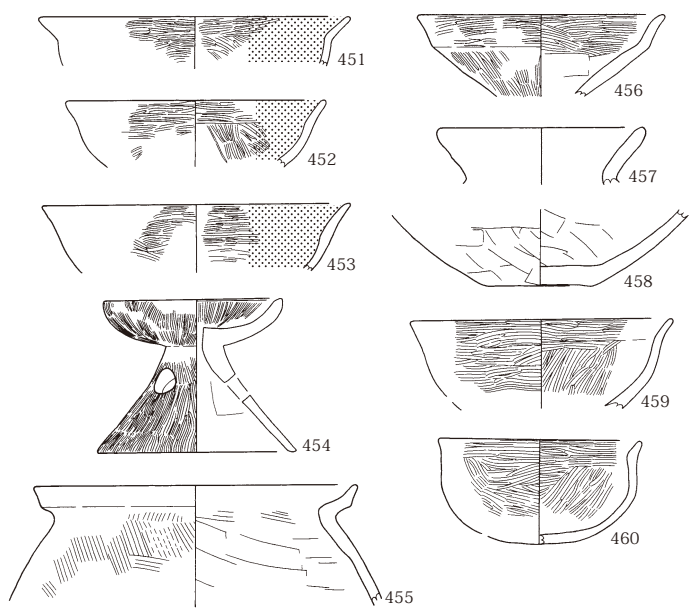
第 27 図 土器実測図 (9/12)



2溝(流路01)上部(444~450)

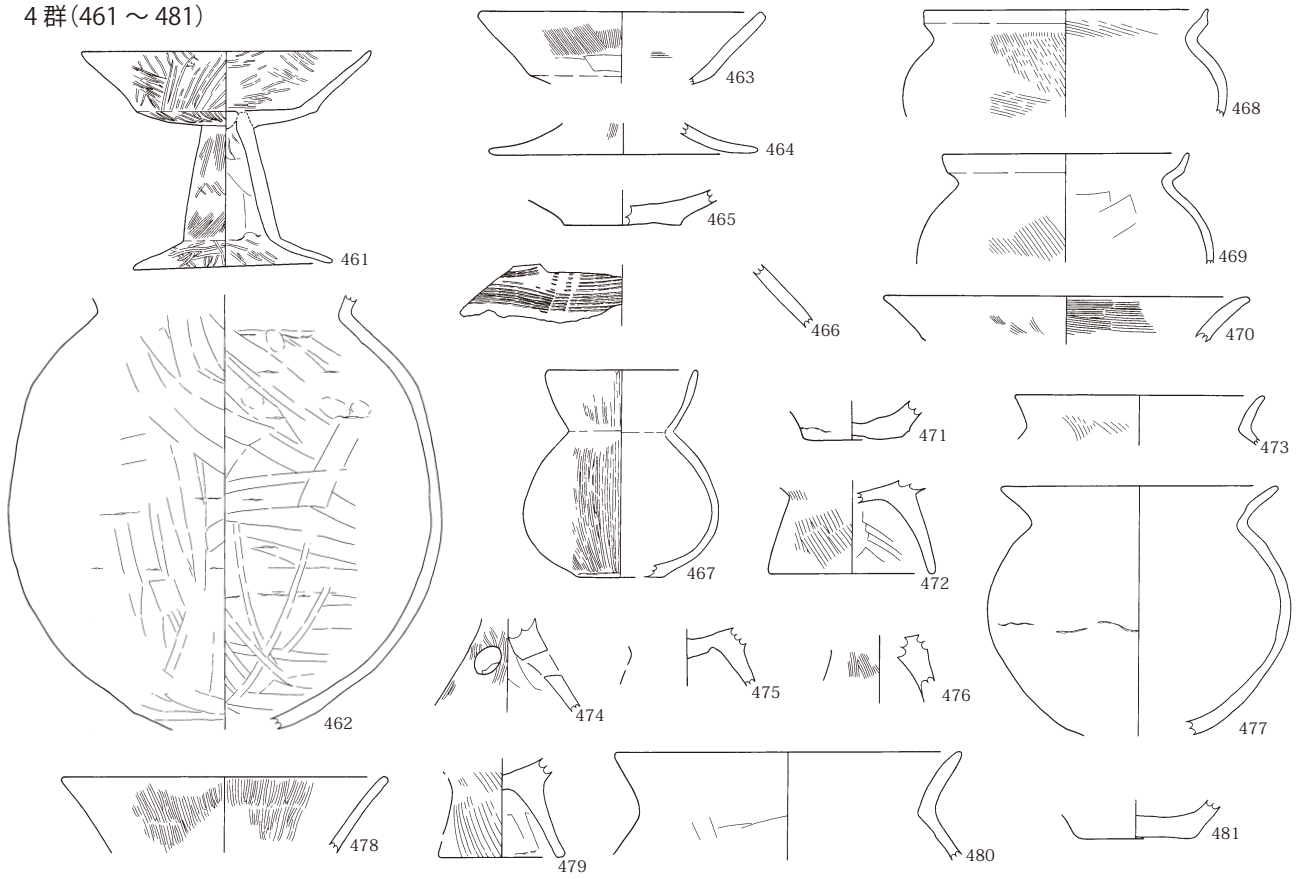


土器集中2(451・452)・3(453~455)・6(456~460)

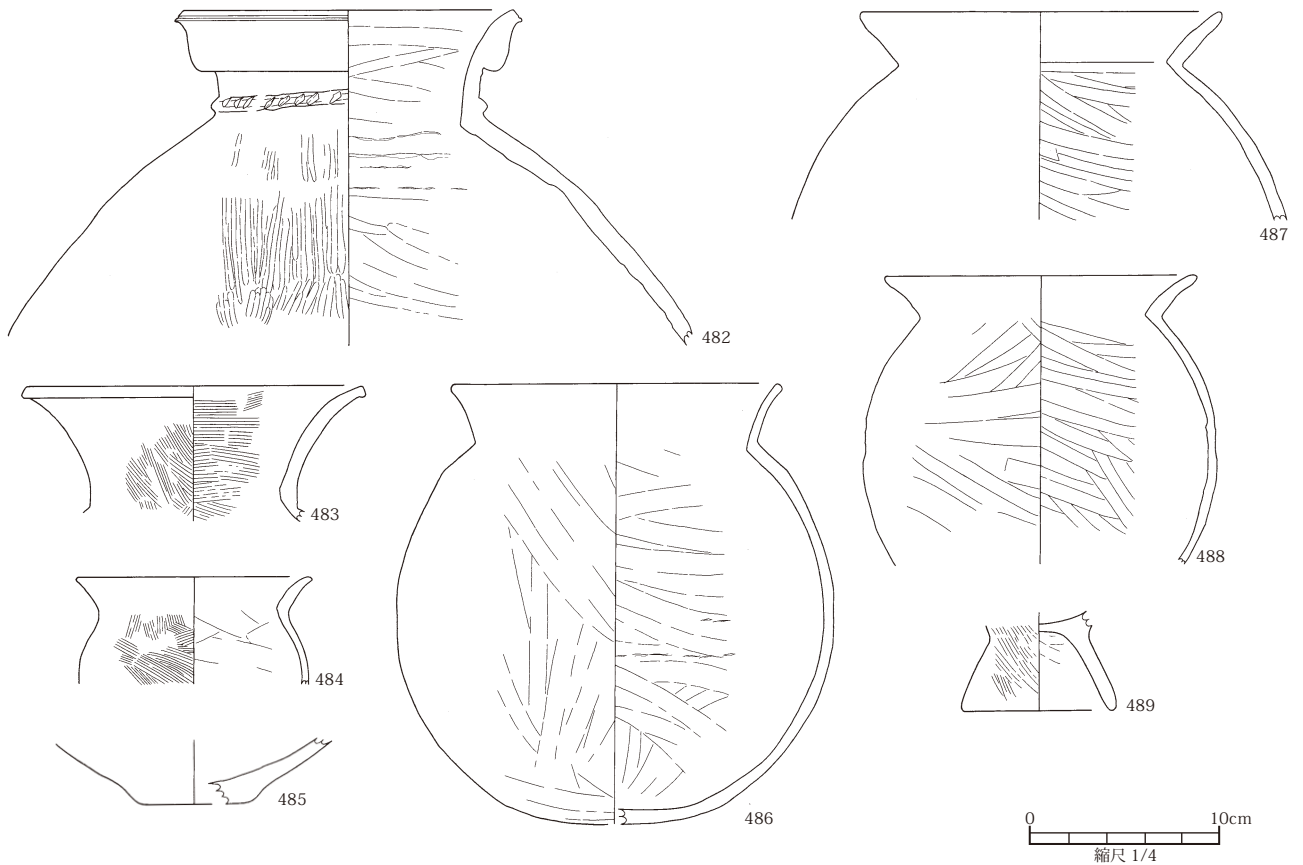


第 28 図 土器実測図 (10/12)

4群(461~481)

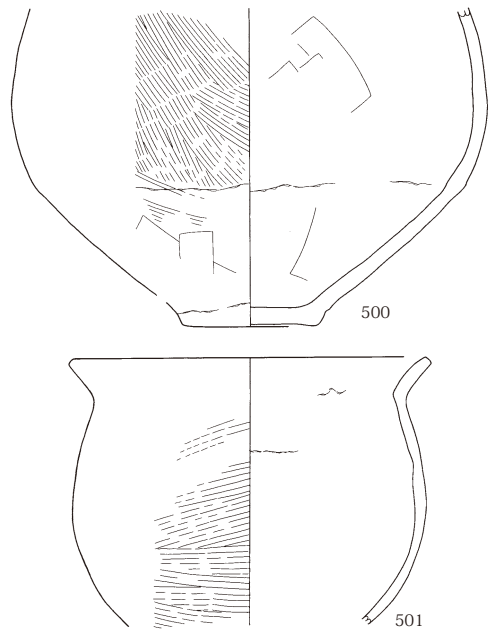
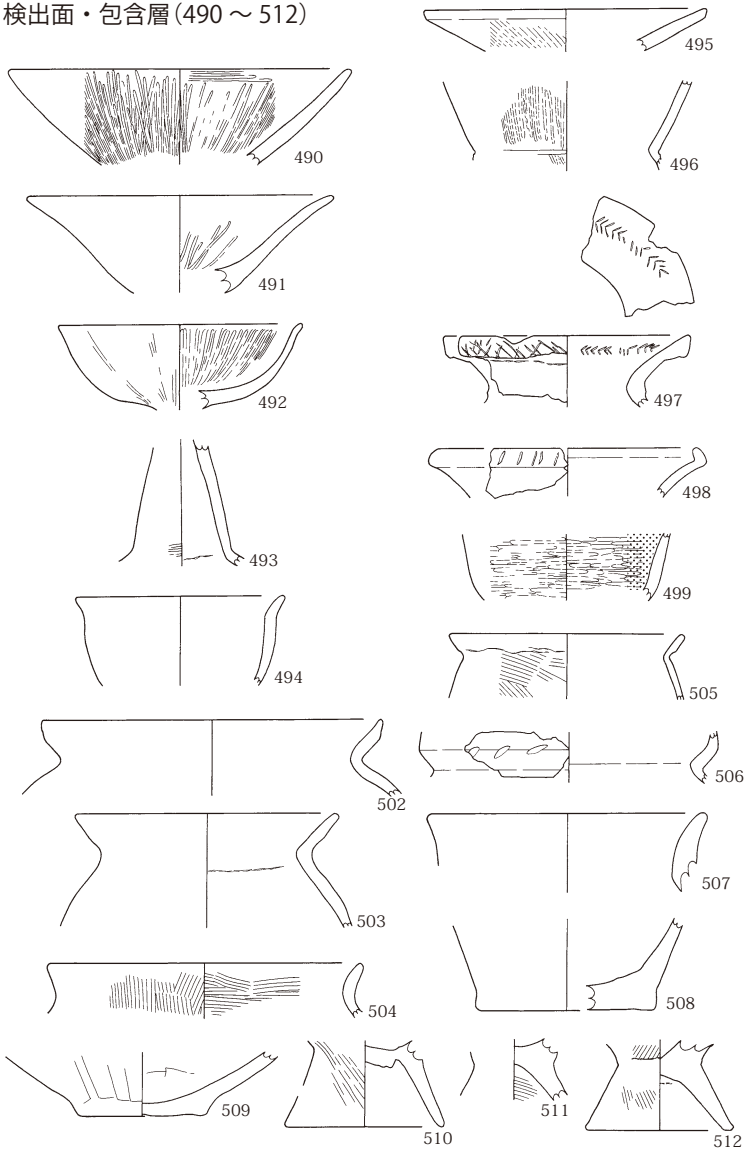


4群一括出土(482~489)

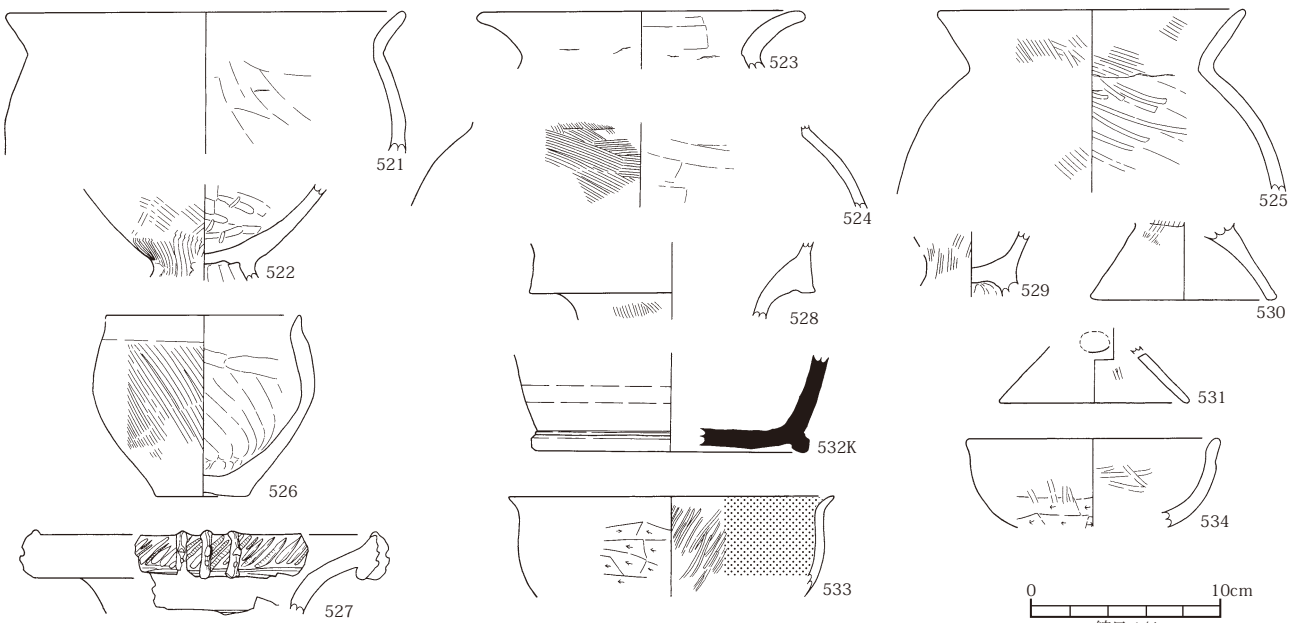
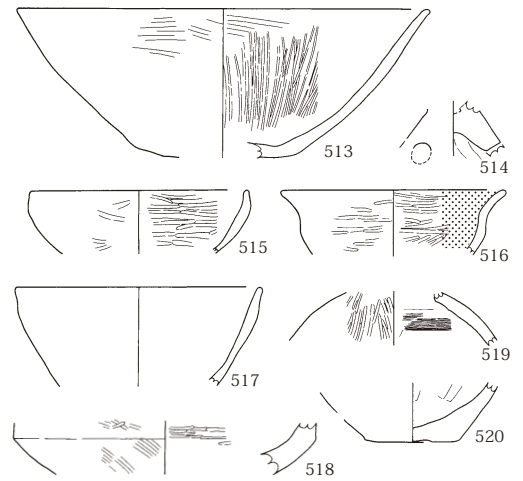


第29図 土器実測図(11/12)

検出面・包含層(490～512)

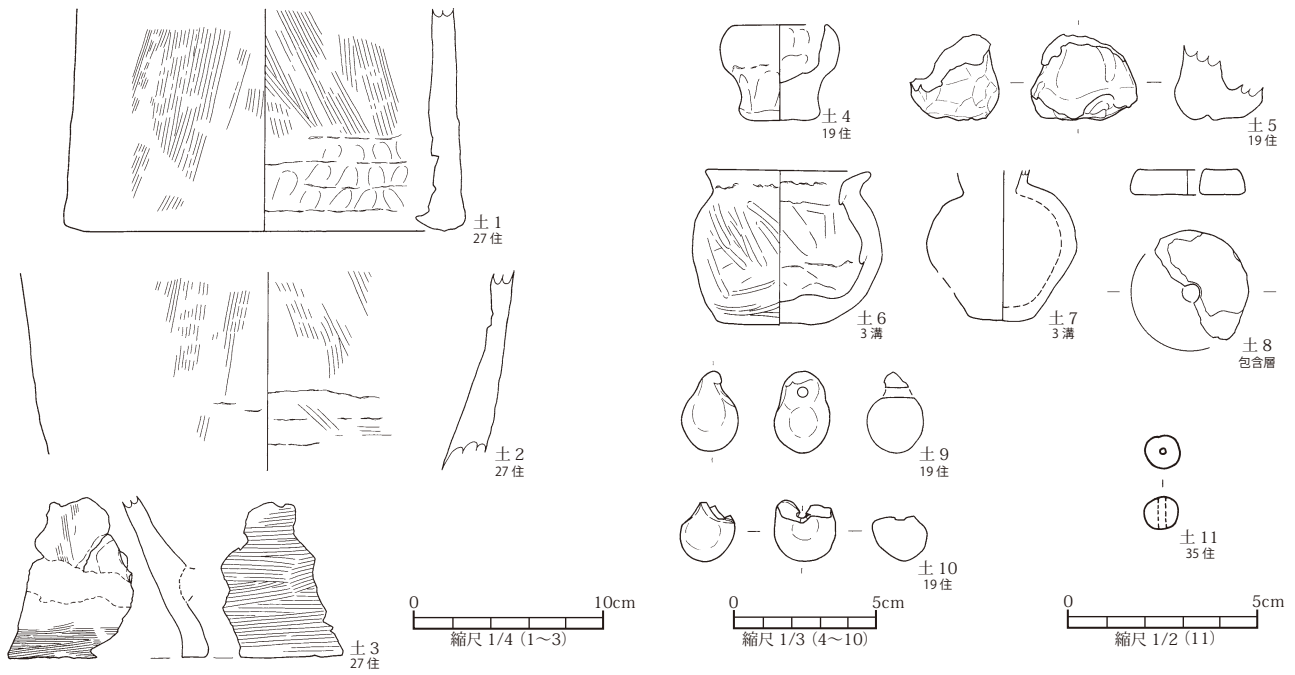


試掘・その他(513～534)

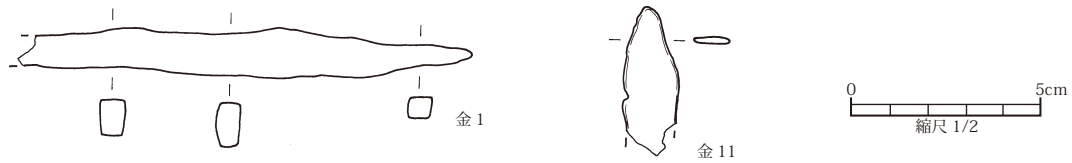


0 10cm
縮尺 1/4

第30図 土器実測図 (12/12)



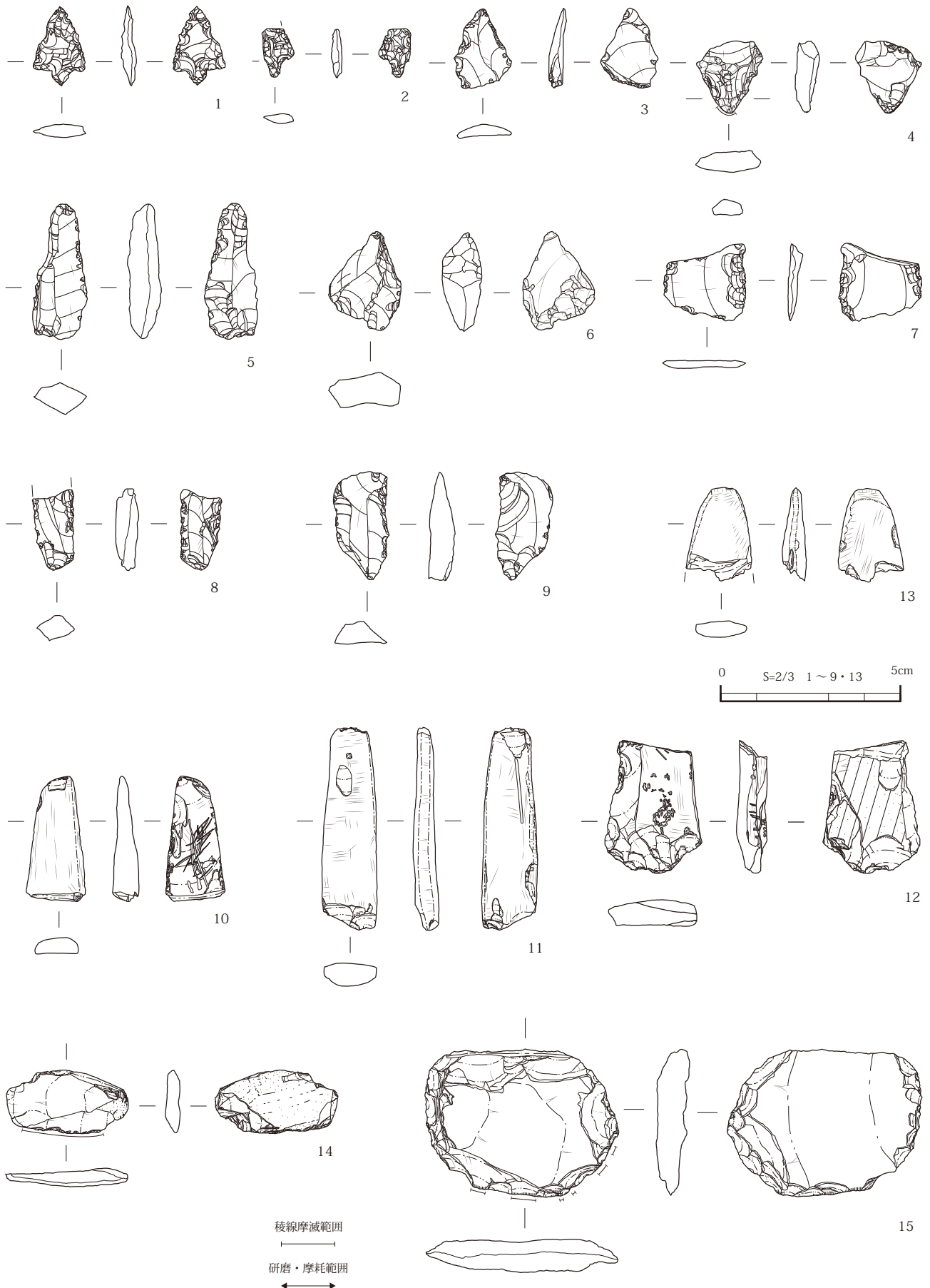
第31図 土製品実測図



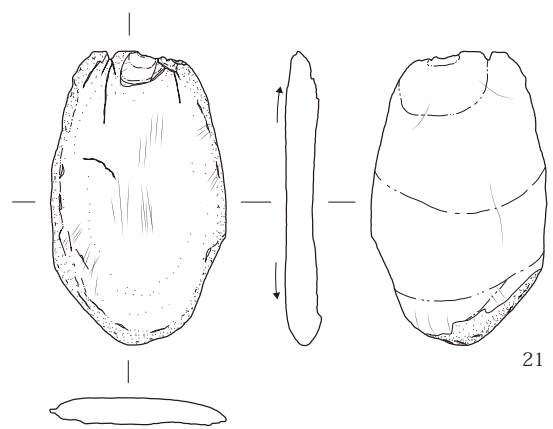
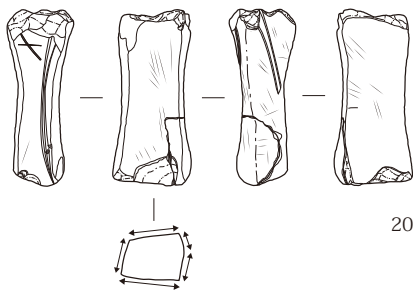
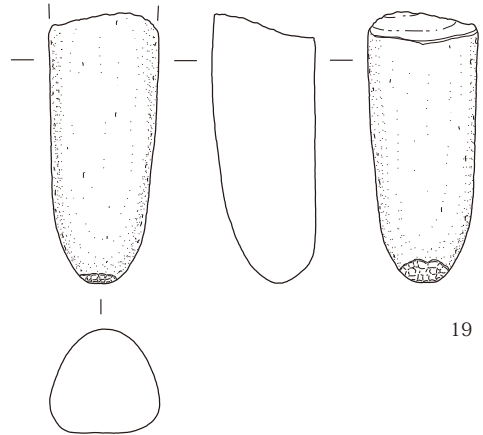
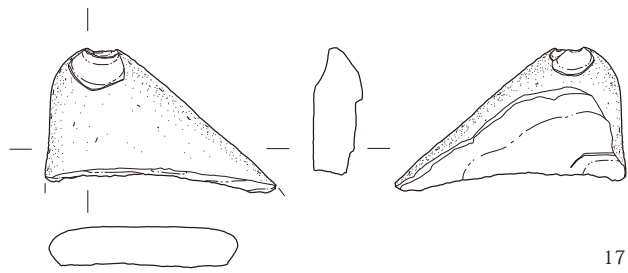
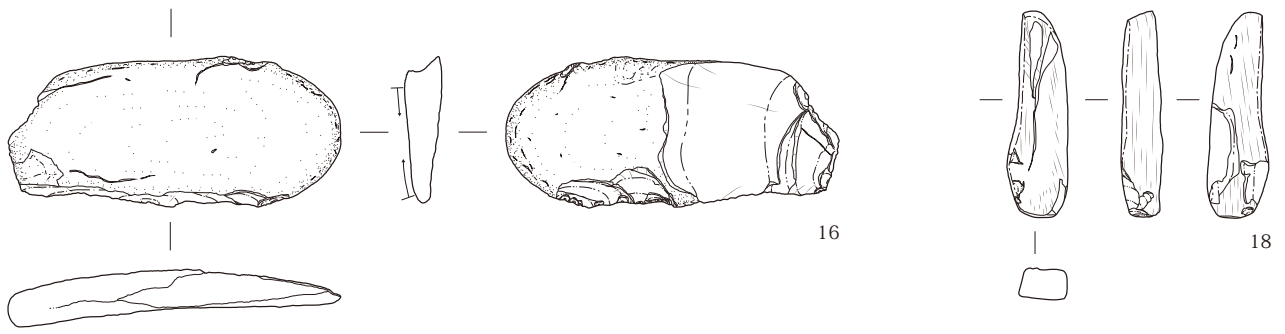
第32図 金属製品実測図

No	帰属遺構	器種・種別	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	金属種別	取り上げ情報	取り上げ日	備考
1	19住	刀子?	119.6	14.3	10.1	30.9	鉄	19住NE	13.07.12	
2	19住	不明	15.7	15.7	2.6	0.8	不明	19住SWカマド脇	13.07.12	
3	28住	滓				4.8	鉄	28住NE	13.07.23	
4	28住	滓				1.5	鉄	28住NE	13.07.15	
5	28~32住西側検出	不明				1.8	鉄	28住~32住の西側検出中	13.07.25	
6	32住	滓				3.7	鉄	32住SE	13.07.23	
7	33住	不明	31.3	31.3	9.7	4.9	鉄	33住検出	13.07.18	滓化している
8	火葬施設	銭貨(嘉祐通宝)	24.6	24.6	1.6	1.9	銅	火葬墓01NE	13.07.27	初鑄1056年
9	火葬施設	銭貨(聖宋元宝)	23.4	23.2	1.6	2.4	銅	火葬墓01NE	13.07.27	初鑄1101年
10	火葬施設	銭貨(景裕元宝)	24.4	24.3	1.4	2.6	銅	火葬墓01NE	13.07.27	初鑄1034年
11	1号土坑	不明(鏃?)	38.9	14.7	2.7	1.7	鉄	土坑01	13.07.25	
12	1溝	銭貨(天保通宝)	49.0	32.3	2.4	19.2	銅	溝01	13.07.08	初鑄1835年、広郭?
13	1溝	丸釘(ねじ)	24.4	10.3	9.2	2.5	鉄	溝01	13.06.28	近現代?
14	1溝	不明	22.7	5.5	5.5	1.0	鉄	溝01・24住付近検出中	13.07.02	近現代?
15	1溝	不明 棒状(角)	34.5	5.4	5.3	2.2	鉄	溝01を切る暗渠	13.06.25	近現代?
16	1溝	不明 棒状(角)	24.1	4.0	4.0	0.9	鉄	溝01を切る暗渠	13.06.25	近現代?
17	1溝	不明 リング状	21.7	21.0	3.0	1.9	鉄	溝01を切る暗渠	13.06.25	近現代?
18	1溝	鉄塊	20.4	15.5	11.9	4.6	鉄	溝01を切る暗渠	13.06.25	近現代?
19	T3以北T6以东(その他検出面)	不明 棒状(角)	46.4	18.4	17.5	5.1	鉄	T3以北T6以东検出中		
20	T3以北T6以东(その他検出面)	不明 棒状(角)	34.2	7.3	6.5	1.9	鉄	T3以北T6以东検出中		
21	試掘T7	滓				1.9	不明	試掘トレンチ7攪乱中		

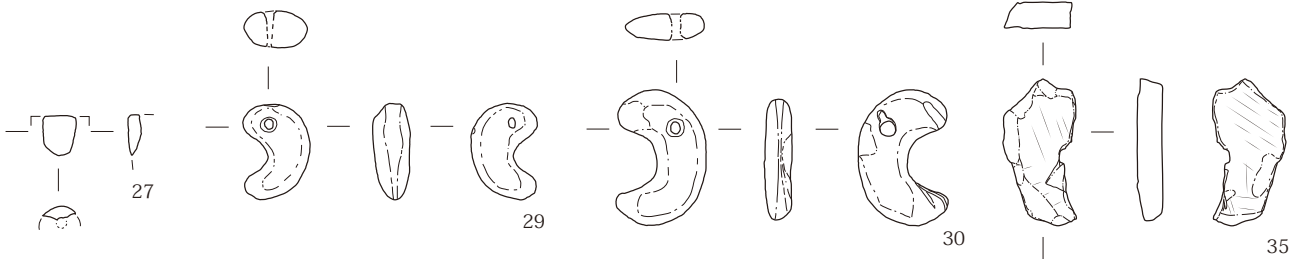
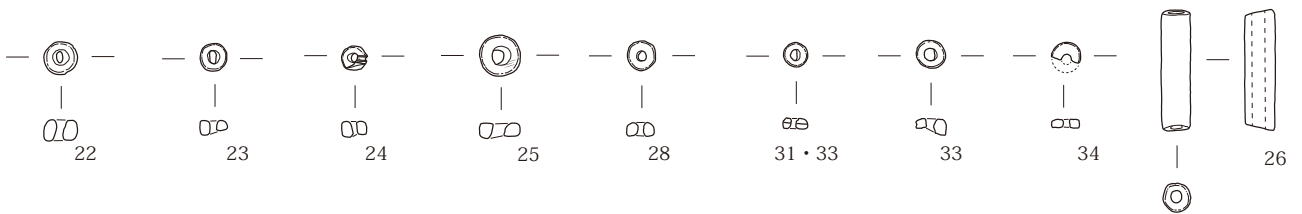
第3表 金属製品一覧表



第33圖 石器・石製品実測図 (1/2)



0 S=1/3 16~21 10cm



0 S=2/3 22~35 5cm

第34図 石器・石製品実測図 (2/2)

石鏃

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
96	1	24住	SW床面	黒曜石	21.4	14.4	4.1	0.8		有茎平基、側辺は左右非対称
173	2	土器集中5	NE 22住・24住間の包含層	黒曜石	(13.4)	(8.2)	(2.9)	(0.3)	尖頭部・片脚部欠損	有茎平基鏃
117	3	25住	SE	黒曜石	21.9	15.5	3.6	1.1		

石錐

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
56	4	22住	SW	黒曜石	19.9	18.2	6.5	1.9		平面形逆三角形形状、錐部に一定方向の線条痕あり

小形刃器

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
41	5	22住	NE	黒曜石	37.8	12.4	7.1	3.6		搔器、縦長剥片素材、刃部位置は側辺
59	6	20住・22住	包含層	黒曜石	25.0	18.9	10.8	4.5		搔器、不定形素材、刃部位置は側辺
98	7	24住	SW床直	黒曜石	22.2	21.3	2.8	1.3		削器
134	8	28住	カマド周辺	黒曜石	11.6	20.9	6.4	1.4		削器、刃部2側縁
135	9	28住	南辺 床下	黒曜石	15.1	30.1	9.0	2.6		削器、刃部2側縁

磨製石斧

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
17		19住	SE	頁岩	37.6	14.8	5.4	3.2	側面の一部のみ残	
19		19住	SE	頁岩	83.5	20.3	6.6	9.5	側面の一部のみ残	
12	10	19住	SE	頁岩	(69.6)	(32.5)	(13.1)	(32.1)	刃部欠損	未成品、片面に溝状の線条痕多数あり
13	11	19住	SE	頁岩	(112.4)	(30.2)	(12.8)	(58.2)		未成品、刃部製作途中か
14	12	19住	SE	頁岩	73.4	53.6	13.8	69.9		未成品、3個体に割れ、部分的に研磨あり
97	13	24住	SW床面	頁岩	(26.2)	(18.1)	(6.7)	(3.1)	下半欠損	

大形刃器

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
16	14	19住	SE	硬砂岩	67.5	35.1	10.3	24.6		縦長剥片素材、刃部磨滅、
171	15	3溝		粘板岩	109.6	81.9	19.3	207.6		縦長剥片素材か、刃部磨滅し線条痕あり
183	16	不明		凝灰岩	131.0	59.6	16.4	176.0		扁平礫素材、磨製石包丁の未成品か

敲・磨石

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
69	17	24住	NE	砂岩	(61.7)	(90.7)	(19.7)	(96.5)	1/2以上欠損	敲石、敲打部1か所
107	18	24住	SW	凝灰岩	82.3	23.7	14.9	44.0		磨石
63		24住	床下	凝灰岩	51.5	19.2	3.1	2.3		磨石、磨製石斧の未成品の可能性あり
99		24住	SW床面	凝灰岩	24.8	20.4	3.1	1.9		磨石、磨製石斧の未成品の可能性あり
166	19	溝02		砂岩	(106.7)	(43.4)	(40.8)	(261.7)	1/2欠損	敲石、敲打部1か所

砥石

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
15	20	19住	SE	凝灰岩	(116.5)	(69.3)	(15.0)	(148.8)		砥面1面、線条痕あり
84	21	24住	NW床面	頁岩	69.7	29.7	26.5	61.6		直方体、砥面4面(4面とも内湾)

編み物用錘石

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
26		20住	P1内	砂岩	110.4	58.3	35.9	280.7		自然礫素材
27		20住	P1内	砂岩	104.1	59.1	32.9	258.0		自然礫素材
28		20住	P1内	砂岩	84.2	58.1	39.6	261.9		自然礫素材
29		20住	P1内	砂岩	80.4	45.4	30.2	161.5		自然礫素材
30		20住	P1内	砂岩	83.0	38.2	22.6	121.8		自然礫素材
31		20住	P1内	砂岩	83.0	36.0	37.5	139.5		自然礫素材
32		20住	P1内	砂岩	102.4	45.4	24.8	(167.1)		自然礫素材
33		20住	P1内	チャート	72.4	45.2	40.4	172.9		自然礫素材

第5表 石器・石製品一覧表 (1/2)

37		21住	炉付近	砂岩	184.3	50.5	48.7	505.4		自然礫素材
38		21住	炉付近	砂岩	146.3	53.8	49.6	573.4		自然礫素材
39		21住	炉付近	砂岩	101.8	66.4	42.9	409.0		自然礫素材
108		24住	SW	砂岩	150.8	63.7	34.0	419.9		自然礫素材
109		24住	SW	砂岩	(134.0)	(52.7)	34.6	(340.3)		自然礫素材
123		26住	No22	砂岩	143.9	73.6	57.4	713.4		自然礫素材

装飾品類

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
1	22	19住	No.1	滑石	最大径6.5		4.1	0.2		白玉、両面穿孔、孔径2.3mm
2	23	19住	NE	滑石	最大径5.2		2.7	0.1		白玉、片面穿孔、孔径1.5mm
3	24	19住	NE	蛇紋岩	最大径4.8		2.2	0.1		白玉、両面穿孔、孔径1.7mm
11	25	19住	SE	翡翠	最大径8.1		3.2	0.3		白玉、両面穿孔、孔径2.5mm
6	26	19住	NW床下	蛇紋岩	23.8	6.1	—	1.4		管玉、片面穿孔、孔径2.6mm
21	27	19住	SW	緑色凝灰岩	(7.6)	(6.3)	(2.5)	(0.1)	3/4欠	不明
124	28	26住	NE No.2	蛇紋岩	最大径5.5		2.3	0.1		白玉、片面穿孔か、孔径1.3mm
129	29	25・26住間	Ⅲ層	蛇紋岩	18.0	13.1	7.5	2.7		勾玉、両面穿孔、孔径2.8mm
133	30	28住		凝灰岩	26.8	18.0	5.2	3.3		勾玉、両面穿孔、孔径2.7mm
138	31	28住	SW床下	蛇紋岩	最大径4.0			0.1未満		白玉、139と接合(厚さ=1.79mm)、孔径1.2mm
139	32	28住	SW床下	蛇紋岩	最大径(4.2)			0.1未満	1/3欠損	白玉、138と接合
146	33	35住	No.1	滑石	最大径5.2		3.1	0.1		白玉、片面穿孔、孔径1.4mm
147	34	35住	床下	滑石	最大径(5.1)		(1.9)	0.1	1/2欠損	白玉、片面穿孔
141	35	攪乱		滑石	(28.7)	(15.8)	(6.1)	(3.5)		不明(未製品か)、片面穿孔

不明

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
18		19住	SE	ホルンフェルス	(41.2)	(13.8)	(4.0)	(2.5)		研磨痕あり

石核

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
7		19住	NW貼床下 35住含む	石英	20.4	16.7	15.1	5.8		
48		22住	NW	黒曜石	32.9	33.8	11.8	10.9		
60		24住	カマド内	黒曜石	19.0	20.2	10.6	3.3	完	
68		24住	NE	黒曜石	28.0	29.5	12.1	8.0	完	
101		24住	SW床下	黒曜石	12.4	25.7	37.0	7.3		
106		24住	SW	黒曜石	26.3	12.2	13.5	4.9		
125		26住	NE	黒曜石	13.9	23.3	10.9	2.8		
159		1溝		黒曜石	9.4	21.8	19.9	3.1	完	
167		2溝		黒曜石	26.4	20.2	8.7	4.1		
172		T3西端近く	Ⅲ層下位	黒曜石	24.6	21.7	12.6	5.4		二次加工あり

原石

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
25		20住	P1内	チャート	70.9	33.6	20.6	85.0		
118		25住	SE床面	チャート	48.2	18.9	13.2	18.6		
140		攪乱		チャート	20.2	9.4	6.0	1.6		
170		2溝		石英	11.9	11.2	9.3	2.0		

二次加工ある剥片

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
34		20住	P2	泥岩	86.2	16.6	11.2	22.2		磨製石斧未成品の可能性あり
35		20住		黒曜石	19.9	30.4	8.4	4.8		
36		20住		黒曜石	22.5	12.3	2.5	0.6		
77		24住	NW	黒曜石	18.8	24.3	7.7	2.6		
92		24住	SE	黒曜石	12.0	11.3	2.9	0.3		
165		1溝	下位	黒曜石	15.9	10.9	5.0	0.6		
174		土器集中5	NE 22住・24住間の包含層	黒曜石	22.4	29.5	7.2	4.5		

微細剥離ある剥片

注記 No.	図 No.	遺構	出土地点	石材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量(g)	破損状況	備考
40		22住	NE	黒曜石	14.5	13.7	2.0	0.3		
116		22住・24住間	包含層	黒曜石	17.5	26.9	4.1	1.6		

第5表 石器・石製品一覧表 (2/2)

第IV章 総括

1 遺物包含層と遺構検出

今回の調査地は古墳時代前期の遺物包含層が非常に発達しており、遺構の検出作業は困難を極めた。元来、本遺跡一帯は河川中流域の沖積地性の堆積のためベースが一定せず、腐植による黒色土の発達も乏しいため、竪穴住居址を中心とする遺構の識別が非常に難しい。さらに出土遺物から推定すると、古墳時代の遺構検出(可能)面の最上層に平安時代後期、下層に弥生時代中期の遺構が存在していた可能性が高く、しかも厳然とした遺構面をなしていなかった。それに加えて、本調査地は長年、工場として使われていた土地なので様々な攪乱が各所にあり、一定の範囲を見渡して遺構の平面形を確定していく作業に非常に障害をもたらし、これらの諸状況が調査を一層困難なものにした。

古墳時代前期の遺物包含層(一部、古墳時代中期と後期の遺物も含んでいる。)については、層位的に良好な遺物が多数含まれているという性格のものではなく、該期土器片が多数出土するので削り込んでいけば竪穴住居址等が現れてくると想定して作業を進めても、結局、何の遺構もなかったという感覚のもので、今回はそのような地点のいくつかをやむを得ず「土器集中」という名称で把握した。しかし祭祀遺構のように意図的に土器が集められた状況でもなかった。掘り込みや硬化面、火所、集・配石などでは把握できない何らかの遺構があった可能性も捨てきれないが、まったく不明である。

この種の遺物出土状況を示した調査例は松本市内ではいくつかあり、いずれも弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものであった。近接地では平成11年の出川南遺跡第9次調査の場合で、古墳時代後期の竪穴住居址は明瞭なのに同前期は土器が多数包含されいながら明確な竪穴として捉えられていかないという状況であった。やや遺跡の距離は離れるが、昭和63年の千鹿頭北遺跡第1次調査でも同様の状況を呈した。この時は最終的に何棟かの古墳時代前期の竪穴住居址を捉えることができたが、それらも重複する同後期の遺構群に比べると掘り込みは浅く不明瞭で、しかも遺構配置はまばらであった。まさに今回の状況と酷似している。それぞれの発掘時の遺構検出作業について、遺物の出土地点や微細な土層序に立ち返った再精査を行っても、おそらく適当な結論は出せないと感じている。竪穴等の掘り込みという形では捉えられない、地表面付近の建物、祭祀、造作などがあったのであろうか。時期的に近似している点も考慮すべきであろう。

2 竪穴住居址

検出された遺構の主体であるが、重複や攪乱などで全形を把握できたものは少ない。古墳時代前期のもの平面形は方形基調をなす。床の中央部やや奥寄りに炉を有し、炉は地床炉、土器埋設炉がみられた。同後期の住居址平面形は長方形や正方形で、長方形の場合、一方の長辺の中央部にカマドが付されている。カマドは石材を利用しているが、芯にする程度である。炉・カマドの他に目立った住居内の施設は検出されず、支柱穴の配置も明らかにできなかったが、これは調査地の土質等による制約と、本来的に存在しなかった場合とが考えられる。前・後期ともに住居の主軸方向に一定の傾向は見られない。

長野県の中信地方においては、竪穴住居の平面形は、弥生時代中期後半が楕円形、同後期には隅丸長方形から長方形に変化し、古墳時代前期に至って正方形に定まる。以後、平安時代中期まで数百年の間、正方形が基調である。しかし、今回の調査でほぼ全形が把握された古墳時代後期の住居のうち19・24・26住は明らかな長方形で、長辺の中央部にカマドを有した。同期の住居が113棟発見された出川南遺跡第4次調査においても、22棟が長方形基調であり、うち6棟は明らかに意図的に長方形を指向したものであった。これを見ると、どうやら住居の規模や微細な時期差に関係なく、古墳時代後期の竪穴住居には一割程度に長方形が採用される傾向があったのではないかと考える。この傾向が、出川西・出川南遺跡の範囲に限られるのか、さらに普遍的な広がりを見せるのかは、今後の調査と研究を待つところだが、松本市内の同時期の調査には類例はなく、中信地区でも塩尻市内の調査に疑わしい例が1件あるのみである。次期の古墳時代末から奈良時代に入ると、こ

の傾向は皆無となるので、地域性や時代背景を含めた考察が必要となろう。

3 出土土器

多量に出土した古墳時代前期の土器には、地元である松本平南部の弥生時代後期の土器から器形や紋様などで系譜が追えない、いわゆる外来系の土器として扱われるものが多い。内容も受け口口縁の甕や台付甕、口縁部が加飾されたり頸部に突帯を持つ壺やヒサゴ壺、杯部が大きい高杯、手焙り形土器など多種多様で、むしろ櫛描波状紋を持つ甕(124・396・411)や胴部が長めの甕(337)、頸部下櫛描紋の壺(343・386)など在地の系譜を引くと考えられるものはごくわずかと言ってよい。

外来系の土器は、ほとんどが東海西部に出自を持つものと考えられるが、その中でも三河地方の影響を受けているものが多いという指摘をいただいている(文献24等)。また、わずかだが北陸に出自があるもの(23図241)もみられる。松本市・塩尻市域では弥生時代後期から古墳時代前期にかけて在地での系譜が追えない土器が田川流域の遺跡を中心に多数出土しており、主要なものについて第35図に示す。

古墳時代後期の土器も多量に出土したが19住や26・28住など、遺構単位で特徴が捉えられる良好な土器群がある。19住の杯類は体部が丸く深めものが多く口縁部は短く外反するか内湾気味に収まる。28住の杯類は19住に比して深さが減じて、底部と口縁部の境界に稜を持ち、口縁部は反り気味に外開している。両者の形態差は時期差に起因するものと考えられる。甕類も19住には58・59などやや卵形のものも残るが、28住は長胴形となっているのも時期差に起因するのであろう。

4 周辺の調査地点

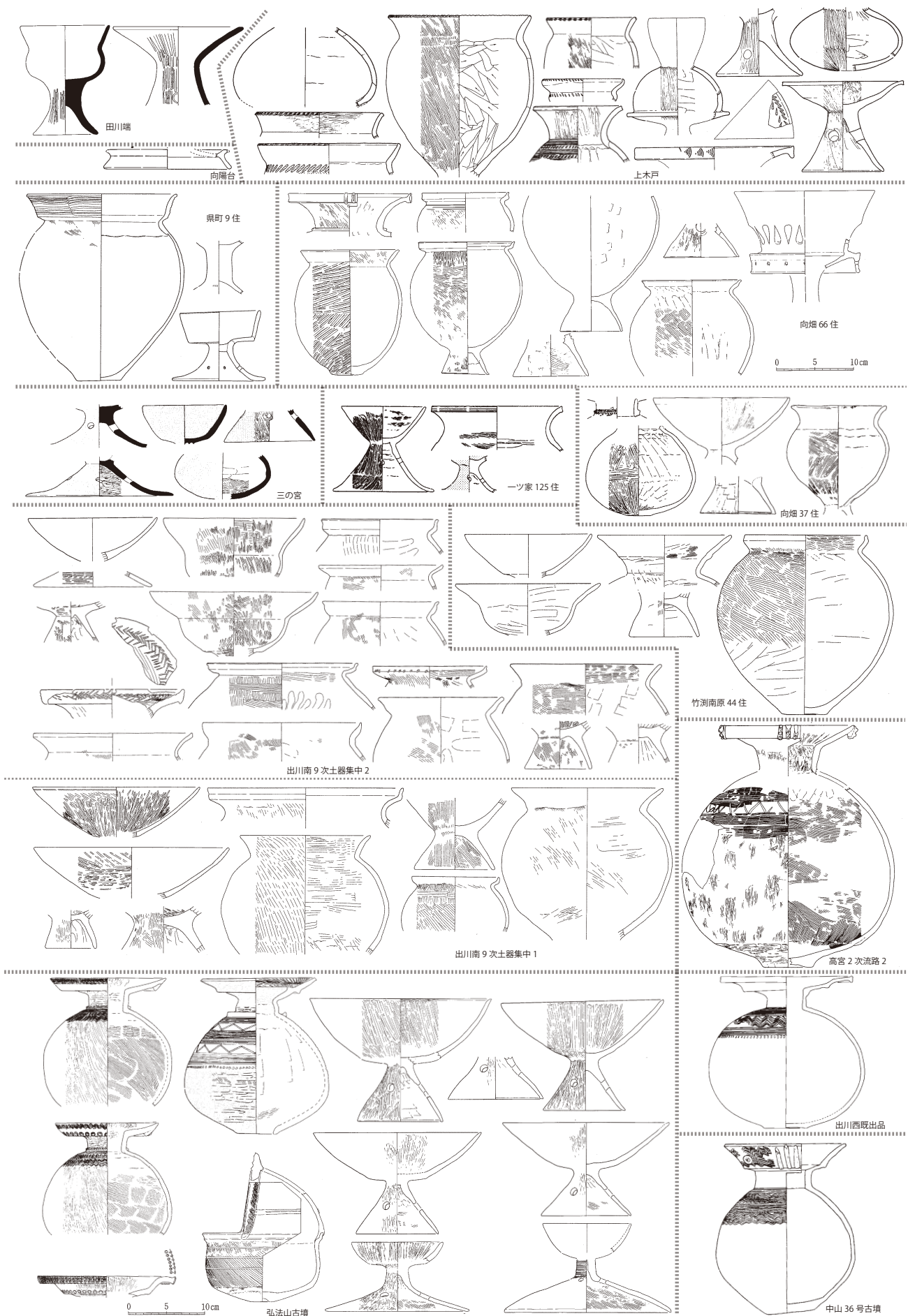
本遺跡と出川南遺跡は南北に接して広大な遺跡群をなしているが、それぞれの調査地点ではかなり異なった様相を呈している。本調査地北側60mの本遺跡第4次調査地点では、土層序は類似していたが遺物包含層の発達が無で、遺構も溝状のものがあつたのみという全く異なる状況であった。一方、南南西190mの出川南遺跡第9次調査地点は前述のとおり。さらに北東120mの同第7次調査地点は調査地の西側半分に大きな自然流路が重複しており、遺構は東側半分のみで把握された。また今回調査地西隣での平成24年の立ち合い調査では掘り込み等を伴う遺構が確認され、第4図11の土器が得られている。

5 出川西遺跡の成立と展開

本遺跡と南隣の出川南遺跡(以後、「南松本遺跡群」と総称する。)でのこれまでの発掘調査履歴は第3図と第2表(10頁)のとおりであるが、これによると南松本遺跡群は弥生時代中期前葉から中葉の頃、東北部から居住域が始まり、弥生時代後期から古墳時代中期頃までに北半分全体と東側1/3くらいの範囲に拡大する。古墳時代後期になると南松本遺跡群全域に集落は拡大し、最盛期を迎えたと思われる。この間、出川南遺跡第17次調査地点で大形の方形周溝墓(弥生時代後期と推定)、同第15次調査地点で石貼りの方形遺構(墳墓の可能性。古墳時代前期)、出川西遺跡第6次調査地点で祭祀遺構(古墳時代中期)、出川南遺跡第4次調査地点で平田里古墳群(古墳時代中期～後期)などの特殊な遺構が域内に造られている。

6 弘法山古墳と出川西遺跡

本調査地の東方1,200mの丘陵上には東日本で最古級の古墳のひとつとされる前方後方墳の弘法山古墳が立地する。同古墳の墳頂部から出土した土器は東海西部の影響を受けた外来系のもので占められ、前方後方墳という特徴的な墳形もあり、築造の時期や造営に携わった集団、成立の背景などが問題とされてきた。本遺跡群は地理的な位置から、これまで造営に関連する集団の居住地候補と目されてきたが、今回の調査あるいは出川南遺跡第9次調査での東海西部を中心とする外来系の土器の多さは、本遺跡群が同古墳の造営集団の主要な一翼を担っていたことを改めて確認させるものとなった。



第35図 松本市・塩尻市域出土の外来系土器集成 (文献25から転載)

本遺跡群と弘法山古墳の間を北流する田川の流域には、上・中流部の塩尻市内から多くの弥生時代後期以降の集落遺跡(田川端遺跡、上木戸遺跡、向陽台遺跡等)や墓域群(剣ノ宮遺跡、犬原遺跡、丘中学校遺跡)が展開しており、本遺跡群はその田川流域の諸遺跡の北端に位置する。飯伊地方を經由して流入した東海西部の文物の、ある時点での北端の到達点を象徴する遺跡であり古墳と捉えることも可能であろう。

参考文献(文献番号は第Ⅱ章第3節の続き)

文献20: 宇賀神誠司 1988「弥生時代後期後半の土器について」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2ー塩尻市内その1ー』

文献21: 清水隆寿 1991「第2節 遺物<弥生時代後期出土土器について>」『古城』大町市教育委員会

文献22: 関沢聡 1994「住居址」『松本市出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群』松本市教育委員会

文献23: 直井雅尚 1996「松本市出川出土の古墳時代土師器」『長野県考古学会誌』79

文献24: 安城市歴史博物館 2014『特別展 大交流時代 鹿乗川流域遺跡群と古墳出現前夜の土器交流』

文献25: 直井雅尚 2014「2・3世紀、中・南信の集落と墳墓(松本盆地南部を中心として)」『ふたかみ邪馬台国シンポジウム14 邪馬台国時代の甲・信と大和 資料集』香芝市二上山博物館友の会「ふたかみ史遊会」

結 語

本調査の実施と報告書作成にあたっては、株式会社東京インテリア家具からは多大なご理解とご協力をいただきました。現場作業の際には南松本一丁目、南松本二丁目、双葉町、双葉南、双葉西の各町会の皆様、各町会長・松南地区連合町会長の皆様、隣接する株式会社竹屋松本工場、市営住宅G棟、信濃むつみ高校、サーパス南松本、松本ノーサンビルの皆様にはご理解とご支援を賜りました。文末になりましたが、記して深甚なる謝意を表するものです。

また本書をまとめるにあたり、例言にお名前を記した皆様からたくさんのご助言、ご教示を頂戴しました。しかしながら、編者の力量不足により、それらを本文中に十分反映することができませんでした。深くお詫び申し上げますとともに、あらためてご協力に感謝を申し上げます。

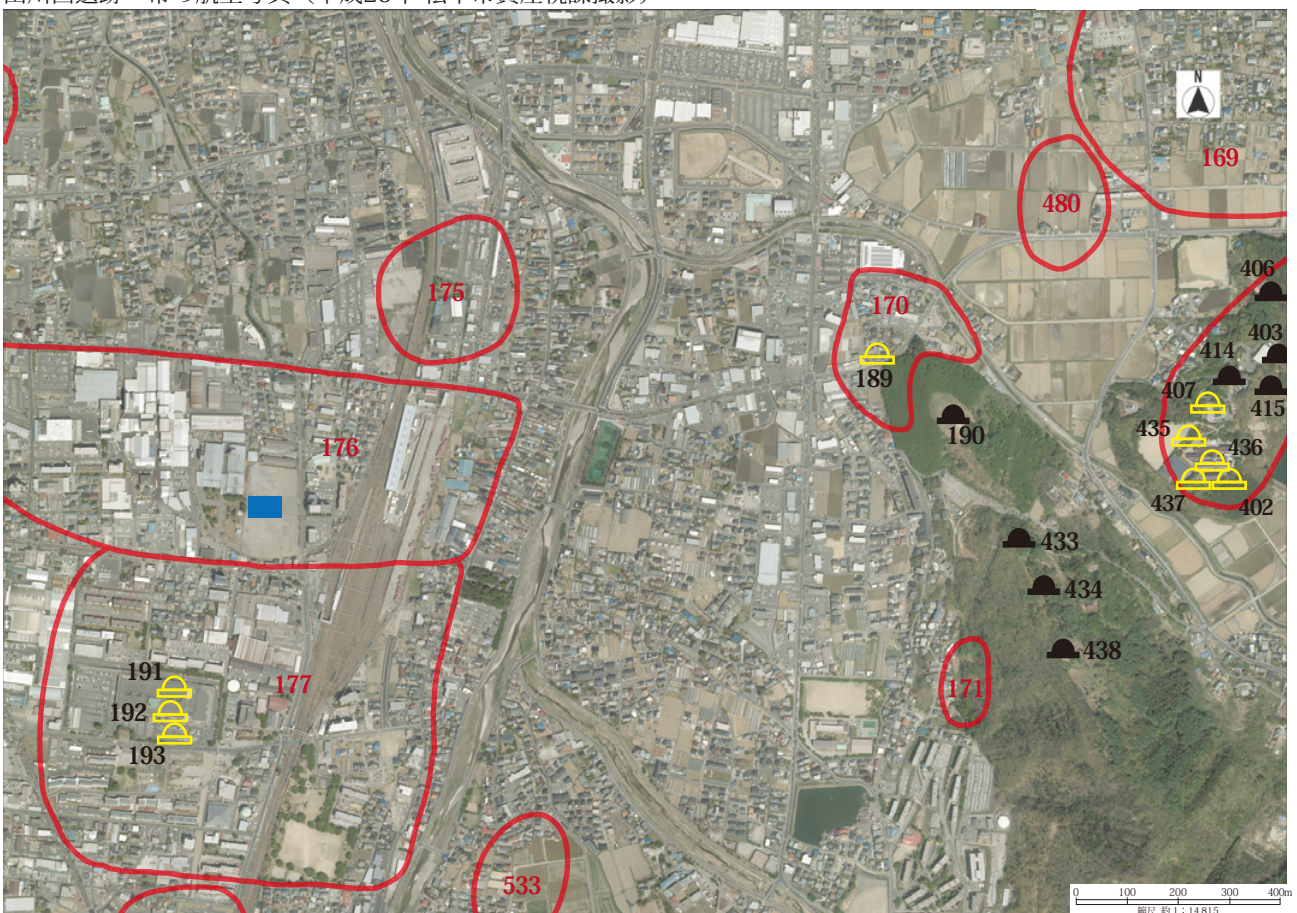
今回の発掘調査は、急きょ実施することになったもので、保護協議、試掘調査から本調査まで非常に厳しい日程でした。しかも、市教委では当時、既に市内4カ所で発掘現場を展開しており、発掘担当者の人材は払底しておりました。やむを得ず整理作業専属と庶務担当の職員を動員して調査班を編成したのですが、本文で記したように遺構と遺物が重層、錯綜していた上に各所に攪乱があり、発掘作業は困難を極めました。そのような状況にもかかわらず、本書に記載した成果が得られたことは大きな驚きであり、調査実施にご尽力いただいた皆様の熱意に深く感謝いたします。



弘法山古墳から出川西・出川南遺跡を望む(平成26年9月26日撮影)



出川西遺跡一帯の航空写真（平成25年 松本市資産税課撮影）



遺跡 176：出川西 177：出川南 175：出川 170：平畑 169：神田 480：神田西 171：山行法師 533：寿畑田
 古墳 191：平田里1号 192：平田里2号 193：平田里3号 189：平畑1号 190：弘法山 406：中山35号 403：中山32号 414：中山58号
 415：中山59号 407：中山36号 435：棺護山1号 437：棺護山3号 402：中山31号 433：北尾根1号 434：北尾根2号 438：北尾根3号
 遺跡番号・古墳番号は第1図(5頁)と同じ 青印は今回の調査地



出川西遺跡第 10 次調査 調査地遠景（北東から写す）



出川西遺跡第 10 次調査 調査地全景（東南東から写す）



19住 掘削状況（東から）



19住 カマド検出状況（東から）



20住 完掘状況（東から）



21住 完掘状況（北から）



22住 完掘状況（東から）



23住 完掘状況（東から）



24住 完掘状況（東から）



25住 完掘状況（東から）

写真図版 4



25 住 カマド新 (東から)



26 住 完掘状況 (東から)



27 住 完掘状況 (北から)



28 住 完掘状況 (東から)



28 住 カマド (東から)



29 住 完掘状況 (東から)



29 住 埋甕炉 (東から)



31 住 完掘状況 (東から)



32 住 完掘状況 (東から)



32 住 火所検出状況 (西から)



33 住 完掘状況 (東から)



34 住 完掘状況 (北から)



1 建 (西から)



火葬施設 完掘状況 (東から)



2 溝 完掘状況 (南東から)



3 溝 検出状況 (西から)

写真図版 6



19住カマド支脚（北東から）



26住遺物出土状況（東から）



27住遺物出土状況（西から）



27住P5遺物出土状況（西から）



3溝 遺物出土状況（北から）



3溝 遺物出土状況（南から）



II層2溝上部 土器出土状況（南から）



火葬施設 炭化物出土状況（南から）



34住 遺物出土状況（東から）



34住 一括土器出土状況（北から）



34住 一括土器出土状況（南から）



34住 一括土器出土状況（北西から）



34住 一括土器出土状況（北から）

写真図版8



56(19住)



58(19住)



323(3溝)



110(32住)



273(26住)



280(26住)



454(土集2)



461(4群)



既出11口縁部内面



450(2溝上部)



既出10



既出11



333(34住)



334(34住)



335(34住)



336(34住)



337(34住)



338(34住)



340(34住)



341(34住)



343(34住)



339(34住)



342(34住)



第34号住居址一括出土土器(333~343)



出土石製品

報告書抄録

ふりがな	ながのけんまつもとし いでがわにしいせき だい10じはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県松本市 出川西遺跡 第10次発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	松本市文化財調査報告							
シリーズ番号	No.216							
編著者名	百瀬長秀、三村竜一、原田健司、直井雅尚							
編集機関	松本市教育委員会							
所在地	〒390-0874 長野県松本市丸の内3番7号 TEL0263-34-3000(代) (記録・資料保管：松本市考古博物館 〒390-0823 松本市大字中山3738-1 TEL0263-86-4710)							
発行年月日	2015(平成27)年3月31日 (平成26年度)							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いでがわにし 出川西	ながのけんまつもとし 長野県松本市 みなみまつもと 南松本 にちょうめ ばん ごう 二丁目15番10号	20202	177	36度 12分 41秒	137度 58分 04秒	H25.6.17 ～ H25.7.31	1,469 m ²	株式会社東京 インテリア家具 松本店店舗建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
出川西	集落跡	古墳 ・ 平安 ・ 中世	竪穴住居址 18棟 (第19～37住：30住欠番) 掘立柱建物址 1棟 土坑 7基 溝址・流路 3条 火葬施設 1基 土器集中 7カ所	[土器・陶磁器] 土師器 須恵器 灰釉陶器 [土製品] 埴輪 土錘 ミニチュア 丸玉 [金属製品] 刀子 銭貨 [石器・石製品] 石錘 管玉 白玉	・古墳時代前期～後期の集落址の一部を調査した。各時期の竪穴住居址18棟が重複して検出された。 ・古墳時代前期の34住からは11点の土器が並べられたような状態で出土した。 ・古墳時代後期の住居址から多数の土器が出土した。 ・古墳時代前期の土器は東海地方の影響をうけたものが多い。			
要約	・出川西遺跡の第10次調査で、株式会社東京インテリア家具店舗建設事業に伴う緊急発掘として実施した。竪穴住居址を主体とする3世紀から7世紀にかけての古墳時代集落跡を調査し、同時期の土器を中心とする多量の遺物を得た。出土した3～4世紀の土器には東海地方西部に系譜を持つものが多く、古墳時代の初頭に同地方の強い影響を受けていることが窺われる。今回調査地の東1.2kmにある国史跡の弘法山古墳からも濃尾地方の土器が多数出土しており、本遺跡が同古墳の造営集団の中で主要な位置ある可能性が強まった。							

松本市文化財調査報告No.216

長野県松本市

出川西遺跡

—第10次発掘調査報告書—

発行日 平成27年3月28日

発行 松本市教育委員会

〒390-0874 松本市丸の内3番7号

印刷 アサカワ印刷株式会社
